

新潟県中越地震 被災地の声

—「中越地震後の生活についてのアンケート」調査報告書・手記—

2005年7月

新潟県消費者協会
新潟大学人文学部松井研究室

はじめに

昨年10月23日に発生した新潟県中越地震では、新潟県消費者協会でも多くの会員が被災しました。中越地区にある9つの支部とは、地震発生当初、なかなか電話もつながらず、状況の把握もままならない状態でした。その一方で、当協会事務局のある新潟市内は大きな被害もなく、被災地に申し訳ないほど、ごく普通に日常生活を送ることができていました。頭の上を一日中飛んでいるヘリの音に被災地の苦労を思い、テレビに映る馴染み深い町の変わり果てた様子に衝撃を受ける毎日でした。そのような中で、被災地の消費者団体として何ができるか、あるいは何をすべきかを考えつつも、見舞金を集める程度の支援しかできないことを歯がゆく思っていました。

地震から1か月ほどたったころ、中越地区のある支部から当協会事務局に、「今回の体験を皆さんに活かせるような形にまとめたい。日常の備え、役に立った物・事、救援物資、役に立たなかった物、ありがたかった事……全国からの支援やボランティアの皆さんへのお礼として、私たちの体験をのちのち役に立ててもらえるように記録しておきたいのだが、どのようにすればよいだろうか」との相談がありました。これを受け、一支部だけではなく、被災地のできるだけ多くの生活者の体験を情報として整理し、記録として残すため、当協会のネットワークを生かしてアンケート調査を行うことにしました。幸い調査にあたっては、新潟大学人文学部松井研究室と共同実施の形をとることができ、松井先生には調査票の作成から、結果の分析・報告書の執筆まで大変なご苦勞をいただきました。

このような経緯で取り組んだ調査でしたが、多くの方々の協力を得て、今回報告書を発行できることを大変うれしく思っています。この調査に寄せられた「被災地の声」が今後の防災や災害救援、また復興にあたってのさまざまな施策に十分生かされるよう各方面に働きかけていくことが、私たちの次の課題と考えています。

なお、本書には被災した会員からお寄せいただいた手記も併せて収録しました。地震発生時やその後の様子など、それぞれの体験の記録は、調査とはまた違った形で、「その時」を伝えてくれるでしょう。

最後になりましたが、アンケートに回答してくださった方々、また支部のない川口町での調査にご協力いただいた新潟県農村地域生活アドバイザーの方々および新潟県三古農業改良普及センター（調査当時）様、貴重な記録写真をご提供いただいた小千谷新聞社様・恒文社様にあらためて御礼申し上げます。

2005年7月

新潟県消費者協会 会長 吉村洋子

序にかえて —— 震災体験の記録と伝達

美しい景観の広がる新潟県中越地方を最大震度7の地震が襲ってから、早くも9ヶ月近くが経過した。地震により多くの貴重な人命が失われるとともに、住宅や農地に被害を受けて、今なお不自由な暮らしを強いられている人が多数存在する。

1995年の阪神大震災以来、日本列島は地震活動期に入ったといわれている。残念ながら人間の力では、地震そのものを止めることはできない。私たちにできることは限られているが、経験を蓄積することはその一つだろう。被災の経験を記録し伝達すること、それにより地震に対する備えを充実させていくこと。それは、今後予想される地震の被害をできるだけ少なくするために、いま必要なことである。

今回、思いがけず新潟県消費者協会のアンケート調査をお手伝いさせていただくことになった。そもそもの発端は、被災された会員の方から「せっかくの体験を後で役に立つ記録として残したい」という提案がなされたことだという。この提案を受けて、消費者協会と私たちとで相談しながら調査票を作成し、調査を実施した。記入するのに骨が折れるアンケートだったが、地震の3ヶ月後というまだ大変な時期に、多くの方からご協力いただいたことにあらためて感謝申し上げたい。

返送された調査票の多くには、びっしりと震災の体験が書き込まれていた。突然襲ってきた地震の恐ろしさ、十分な情報もないまま暗い夜を過ごした不安、家に入れずライフラインも途絶したなかでの生活の不便さ、そうした不便な暮らしを支えた人のつながりの温かさ。この報告書のなかでは、回答や体験の記録を図や表に整理した上で、具体的な文章を紙幅の許す限り収録するようにした。できるだけバランスよく「被災地の声」を伝えることができるよう努めたつもりだが、とりまとめが不十分な点もあるかと思う。その点は、回答していただいた方々のご海容を願いたい。

アンケート調査をおこなった2005年の1月から2月にかけて、被災地の中越地方は例年になく豪雪の下にあった。回答者の方からは、生活の見通しが立たないことへの不安やいらいら、地震の後片づけに引き続く雪との格闘の疲れを訴える声が数多く寄せられ、心が痛んだ。被災されたすべての方が、1日も早く元通りの暮らしを回復されることをお祈りしたい。

2005年7月

新潟大学人文学部助教授 松井克浩

目次

はじめに

序にかえて——震災体験の記録と伝達

I 新潟県中越地震の記録～被災会員手記 1

「10.23中越地震体験そのとき私は」	見附支部長 岡 勝 江
「中越地震に被災して」	長岡支部 青 木 優
「地震を体験して」	十日町支部長 桑 原 光 江
「千差万別の状態に未曾有の震災がおそった」	小千谷支部 石 田 節 子

II 「中越地震後の生活についてのアンケート」調査報告書

第1章 調査の概要 5	
1-1 調査の目的と方法 5	
1-2 回答者の属性 5	
第2章 被災者のニーズの変化と支援の実際 7	
2-1 被害の概要 7	
2-2 地震当日の状況 9	
2-3 1週目までの状況 15	
2-4 1ヶ月目までの状況 23	
第3章 情報伝達と行政の役割 29	
3-1 被災生活と情報伝達 29	
3-2 行政への意見と感想 34	
第4章 人間関係とコミュニティ 39	
4-1 地震後の生活と人間関係 39	
4-2 ボランティア活動のやりとり 44	
4-3 被災生活とコミュニティ 48	
第5章 経験をふまえた提言と感想 53	
5-1 地震への備え 53	
5-2 問題点と不安 60	
第6章 結論と課題 64	
6-1 ニーズの変化に対応した支援の必要性 64	
6-2 コミュニティの意義 66	
6-3 「生活アンケート」からの提言 68	
資料：調査票および単純集計結果 69	



いう意識が働いた。鍋を置いて暗い中出口へと走った。この松の大木の下に居れば絶対大丈夫だと言われ、ようやく人心地がついたその時、足が少々不自由な近所の一人暮らしのNさん、どうしているのかと気になり夫と二人で跳んで行った。玄関のサッシ戸は家の中に倒れ込み、ガラスも壊れ、戸は重くてどうにもならず数人で取り除き、半ベそかき状態のNさんをようやく外に連れ出した。我が家も外回りは全部二重ガラスのサッシ戸である。7・13水害の時は、雨音も激しく避難勧告のスピーカーも聞き取れなかった。こうなると頑丈なだけがいいとは限らない。

幸いこの近辺は、電灯も直ぐに通電し、断水もなくガスが止まっただけで暖をとることや食事作りなど当面の生活に支障はなく大変助かった。

翌朝、被害状況が明らかになる。屋根のぐし瓦崩壊、石灯籠倒壊、洗面所水道管破損漏水、家中の散乱は言うまでもない。自然災害でこれほどの被害を被ったのは初めてである。ドアの蝶つがいの金具の心棒が6センチも上に飛び出たままになっている状態は、家全体が何回も何回も縦ゆれに飛び上がり跳ね上がりしたのだろう。

私が聴いた異様の音は、キッチン周りの食器、鍋釜、電子レンジや冷蔵庫までありとあらゆる物が飛び上がって跳ね上がって宙に舞っていた音だと後で納得した。幸いにも戸棚の食器類は、なにひとつ壊れず元どりの状態であったことの方がむしろ不思議なくらいである。見附市近辺では、水害と地震Wパンチの被害を受けた世帯も多

い。「災害は忘れた頃にやってくる」という格言を身に沁みて感じさせられた年であった。

中越地震に被災して

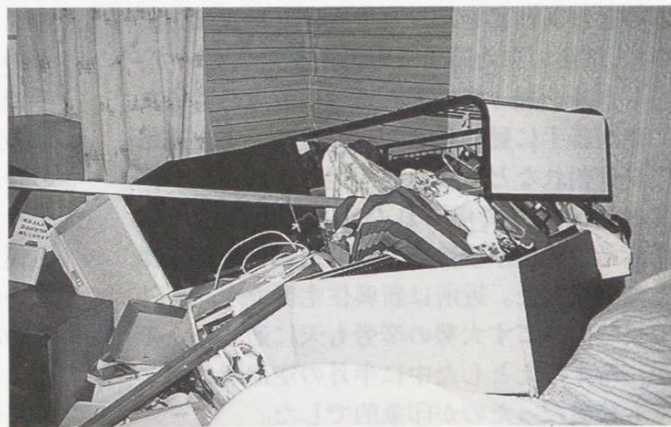
長岡支部 青木 優

10月23日未曾有の震災に襲われた。新潟県中越地震、忘れることのできない恐怖、思い出すことすら心が戦^{おの}く体験であった。

その日は土曜日、小春日和の一日を畑で冬野菜の収穫に励み早めに帰宅した。夕食の支度を整えた後、散歩を兼ねてすぐ近くに住む息子家族の家まで足を運んでいる途中だった。突然ドーンという音とガランガランというような音、ものすごい揺れに足元がぐらぐらして立っていることが出来ない。

「何が起きたのか、あ！地震だ、どうなるんだ」。瞬間にいろいろなことが頭の中を駆け巡ったような気がする。夢中で住宅地の片側に立つコンクリート塀につかまり体を支えた。

塀と道路との接点がパクンパクンと口を開け数十センチもの亀裂となった。一人で家からやっとの思いで逃れてきた夫と、息子家族と合流し、家族6人が命からがら近くの小学校へ避難したのは、夜の8時を廻っていた。2時間ほどの間に6強、5弱が10回程襲ってきたと後日記録で知ったが、その時は無我夢中で、只みんな一緒に避難できたことを喜び合った。恐怖の中の避難所での一夜は明けた。



着のみ着のまま、食べ物もないまま続いて襲う余震に怯えながら小半日が過ぎた。昨夜から何も食べていない。係の方のお世話で、釜や野菜を持ち寄り、救援隊からの差し入れの肉とでみんなの力で夕食が作られた。手の掌にすっぽり入るようなおにぎり一個と一杯の豚汁に心も体も救われた。

私たち家族は幸せなことに、避難所での生活は一晩だけで、その後は、長岡を離れ、揺れの少ない地の親戚のお世話になった。家は、大きなダメージを受けたが、これも工務店に補強補修工事をやってもらい、一か月余りを経て自宅に戻ることが出来た。

同じ町内の中でも、取り壊す家、無人になった家と明暗を分けてしまった。

突然に地震という天変地異に襲われたが、私はこの度のことでいろいろなことを学び得たような気もしている。家族、親戚の絆の有難さ、ご心配くださった友人、知人のお心の暖かさ、町内自治会の連帯意識、責任感の強さ、地方行政の優しさ等々である。しかし、一つだけ心にしっくりこないことがあった。それは、国からの支援を受けるには条件や規制が多々あり、むずかしいということである。

地震を体験して

十日町支部長 桑原 光江

10月23日午後5時56分、この地震の体験は生涯忘れることは出来ない。

我が家も半壊の被害を受けた。築約50年の家だが頑丈に建ててあったので、何とか修繕で住むことが出来ている。修繕もとりあえず必要な部分が済んだだけで、後は業者の順番を待っている状況である。

自分は、何の用意もなく、何もできなかったことを反省、思ったこと箇条書きにしてみたい。

◎個人的には

○懐中電灯、携帯ラジオなど、いつでも持



ち出せる用意。

○ペットボトル（飲水）、風呂の水等の雑水の用意（水洗トイレや雑巾水等に非常に大切）。

○簡易食品、寒さ対策の衣類と履物の用意。

◎行政に望むことは

○災害時、即その体制が作れる訓練。

非常時の行政職員、又住民も含め「非常の時には」の意識を高揚するための、教育、情報の提供。

○生活インフラの早期復旧体制（電気、水道、ガス）。

○各地域、町内の避難態勢のあり方を再検討する。

○行政の災害対策本部と地域避難所との連絡体制、情報の伝達方法（連絡が取れない所は、救援物資も情報も届かなかった）。

○救援物資などのきめ細かな配分方法。

○ボランティアセンターの早期立上げ、受け入れ体制とニーズの把握、敏速なコーディネート。

◎地域としては

○日頃の地域連帯と、災害時、小規模の第1の避難場所を決めておくと思っ

た。○第1の場で隣近所の安否を確認してから、その後状況を見て、行政指定の避難場所なりへ移動。

○地域にも災害時のリーダーが必要と感じた。

◎今後の復旧に望むこと

○この地に住める住宅、生活（就職）支援

- を。
- 仮設住宅に入居している高齢者など、家の立て替えが難しい人達に、安価な住宅の供給を。
 - 農地や山林の復旧もおろそかにせず、安全安心の食料を供給できる農業政策を。
 - 子供や高齢者など、心のケアを続けてほしい。マスコミも忘れず、地域盛り上げの報道を望む。
 - すべての救援活動に心より感謝とお礼を申したい。

千差万別の状態に未曾有の 震災がおそった

小千谷支部 石田 節子

午後3時頃、水仙の家（老人施設）に慰問後家に帰ってスーパーで買物後、5時20分頃散歩に出掛けそこへあの午後5時56分が唐突にきた。何事が起きたのかと「ゴーッ」と、ものすごい音と共に立つことが出来ず地面に四ッ這いになって揺れが止まるのをまった。電気は消え、あたりは真暗、その時これは地震と思い無我夢中で家に向い、途中一面にコンクリートのかけらやブロック塀が倒れ強い余震の中つまづいて転び、前歯を欠いてしまった。

その夜は満天の星空にたくさんのヘリが飛びかい、寒空の下何回も来る余震におびえ、無情報の中、近所の人達と夜半まで過ごしたことが心に残り忘れることが出来ない。翌24日家の中は食器棚、テレビは倒れあらゆる物が散乱し手のつけ様がなかった。

夕方高校の武道館に避難出来ることを知り、大きな風呂敷に寝具を包み行くとあふれる程の人達でようやく入口に場所を確保した。トイレは建物の外5分位歩いた所にあり、バケツの水（当番制でくみトイレの前におく）、懐中電灯を持ち暗い中トイレに入ると時間を選べばない突然の余震に今

もゾットする。
近辺の道路は隆起や陥没、裂けたり危険状態。全国から食料や水とあらゆる援助物資が届き、町内役員は役所に午前と午後2回取りに行き、全戸に連絡配給する。時間を束縛され様々な連絡事項等大変でした。必要物資も時間の経過と共に変わるため、無駄が多いと思います。また、たくさんのボランティアの方が試行錯誤しつつ出来る限りの活動を行った姿は疲れた心に感謝の気持ちが……。また、復興への心のエネルギーになったと思います。

自衛隊や県内外よりけたたましくサイレンを鳴らしながら東京消防庁も2日目の朝には到着、列をなして走る光景は今も目に浮かぶ。両陛下と会話を交わしたことも心に残ります。阪神淡路大震災の時、小千谷支部で各家庭より物資を集め、荷造りして送ったことが思い出されます。

あれから10年が……。まさか我が身に起きるとは夢にも思わなかった。一瞬にして汗の結晶を奪われ原始生活に……。日常生活がライフラインに支えられているという重みを改めて知りました。市町村も個人と同じで、地震を我が町のことと思えなかったから、防災計画の見通しが進まなかったと新聞で見ました。

この地震から色々なことを学び、どう備えるか、日頃の備えは必ず生きると思います。



写真提供 1・3・4ページ 小千谷新聞社編
写真集「小千谷を襲った大地震」より
2ページ 左：岡 勝江さん 右：青木 優さん

「中越地震後の生活についてのアンケート」

調査報告書

新潟大学人文学部助教授 松井 克 浩

第1章 調査の概要

1-1 調査の目的と方法

本調査（「中越地震後の生活についてのアンケート」）は、新潟県中越地震の被災者としての体験を生活者の立場から記していただき、災害等への備えや救援に必要な物資・支援・情報などについて後で役立つ記録として残すことを目的としている。そのため自由回答部分の多い調査票を作成し、被災者の方に記入をお願いした。なお、本調査の企画と実施は、新潟県消費者協会と新潟大学人文学部松井研究室（社会学）が共同でおこなった。

調査票の内容は、地震当日以降の被災生活の様子を、いくつかの項目を設定して時系列的に尋ねることを中心としている。それに加えて情報伝達の問題、行政やマスコミに対する意見や要望、被災生活で支えになった人間関係やコミュニティのあり方、経験をふまえた提言、などについて記入してもらった（巻末資料参照）。

調査は2005年1月下旬から2月上旬にかけて実施した。おおむね地震の3ヶ月後にあたる時期である。調査対象者は、中越地震で被災した中越地区の新潟県消費者協会会員およびその知人・関係者である。なお、消費者協会支部のない川口町では、在住の新潟県農村地域生活アドバイザーを通じて依頼した。調査票は消費者協会支部等を通じて対象者に配布し、郵送で回収した。調査票配布数は285票、回収数は211票で、回収率は74%である。震災の傷の癒えぬ多忙な時期に、骨の折れるアンケートに協力して下さった回答者の方々に感謝したい。

以下では、調査で得られたデータを順を追って紹介し、検討を加えていくことにする。選択肢を用意した項目については、集計結果を表やグラフで示している。また自由回答部分についても、記述を内容にしたがって整理・集計し、表の形でまとめて提示した。同時に、記録を残すという観点から、代表性があると思われる自由回答をできるだけ多く選び、分類したうえで具体的な「生の声」として掲載している。

1-2 回答者の属性

回収された調査票によって、回答者の属性を確認しておく（図表 1-1～6）。性別は、女性が9割を超えている。年齢は、60歳代が中心で平均63.5歳である。回答者の住所は、長岡・小千谷・十日町・見附の4市ではほぼ7割強を占める。対象者が消費者協会の会員中心であるため被災地域を網羅しているわけではないが、被害の大きかった地域はほぼカバーしている（前出4市に人的被害の8割強が集中）。居住年数は、30年以上が8割を超える。新潟県消費者協会の会員が、回答者の7割強を占めているが、川口町・長岡市では、非会員の割合が高い（それぞれ非会員が100%、58.7%）。消費者協会以外にも趣味等のサークルや婦人会、ボランティアグループなどに複数参加している人が目立つ。

回答者の性格については、地域に根づいたベテランの生活者、生活にかかわる意識の高い、活動的な生活者、と特徴づけることができるだろう。本調査のデータは、中越地震被災者の平均値を示すものではないかも知れない。だが上記のような対象者の性格は、被災

生活の状況を生活者の視点から詳細に記録するという本調査の目的にとって、有意義であるといえる。

図表 1-1 性別

男性	16	7.7%
女性	191	92.3%
合計	207	100.0%

図表 1-2 年齢

20-30 歳代	7	3.4%
40 歳代	9	4.4%
50 歳代	39	18.9%
60 歳代	106	51.5%
70-80 歳代	45	21.8%
合計	206	100.0%

図表 1-3 住所

長岡市	46	22.8%
小千谷市	40	19.8%
十日町市	34	16.8%
見附市	24	11.9%
六日町	14	6.9%
栄町	11	5.4%
川口町	11	5.4%
塩沢町	10	5.0%
柏崎市	6	3.0%
小出町	4	2.0%
その他	2	1.0%
合計	202	100.0%

図表 1-4 居住年数

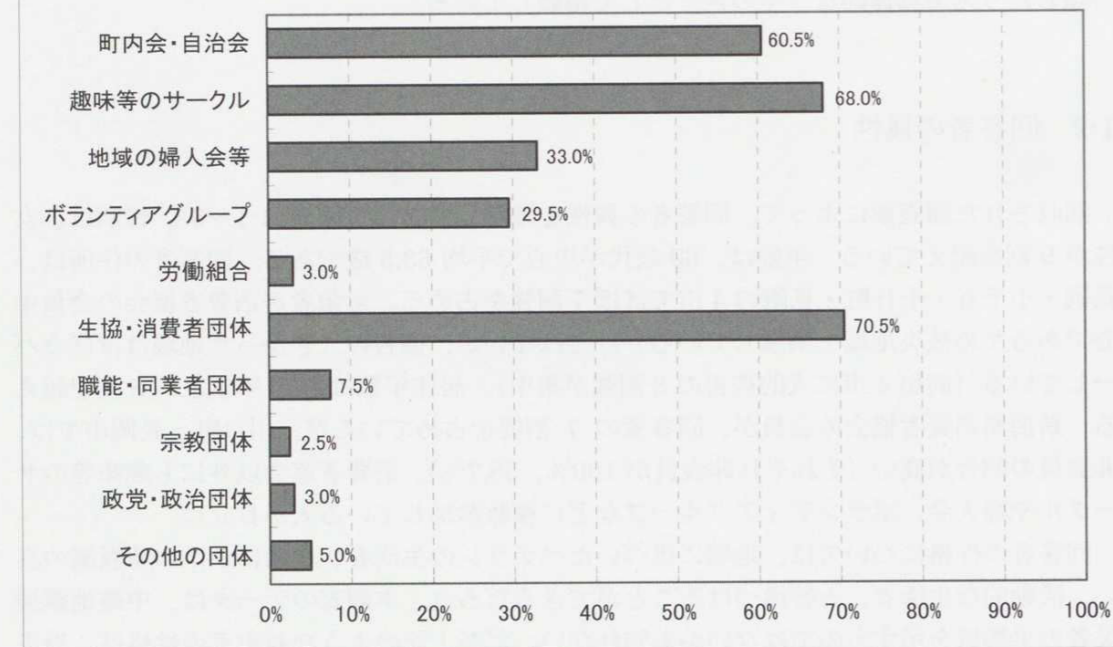
5 年未満	3	1.5%
5~9 年	7	3.5%
10~19 年	10	5.0%
20~29 年	16	8.0%
30 年以上	164	82.0%
合計	200	100.0%

図表 1-5 消費者協会

会員	136	68.7%
非会員	62	31.3%
合計	198	100.0%

注：パーセンテージは無回答を除外して算出してある。また市町村名の表記は、地震時点を基準としている（以下も同じ）。

図表 1-6 団体への所属



第 2 章 被災者のニーズの変化と支援の実際

本調査ではまず、被害の概要を知るために、自宅の被害の状況やライフラインの回復時期などについて尋ねた。それに続いて、地震当夜、翌日から 1 週間目まで、8 日目から 1 ヶ月目まで、と順を追って、それぞれの時期で「困ったこと」「助かった支援」「もっと欲しかった支援」「不必要だった支援」について尋ねている。さらに、「助かった支援」と「もっと欲しかった支援」に関しては、それぞれ「物資の支援」「手助け」「情報」「その他」に分けて詳細に書き込んでもらった。被災直後からの被災者のニーズの変化と実際になされた支援の様子を明らかにするためである。

2-1 被害の概要

家屋の被害と寝泊まりの場所の変化

家屋の被害については、全壊・かなりの損傷が 4 割弱、軽い損傷・損傷なしが 6 割強だった（図表 2-1）。川口町の 54.5%、長岡市の 48.9% が全壊・かなりの損傷で、十日町市・小千谷市でも 4 割を超えている。

当初の避難場所は車が 4 割前後で第 1 位（避難所・公共施設の倍以上）だった。この点に、今回の震災による避難生活の特徴があった。その後急減するが、1 週間を超えて車で寝泊まりした人も 7.8% いた。車での寝泊まりが長期化することにより、いわゆる「エコノミークラス症候群」が問題化したのもこの頃である。

1 週間目までに自宅の居室に戻れた人が 5 割を超えたが、車・避難所・両親等の家で避難生活を送る人も 4 割弱残る。1 ヶ月目までに自宅へ戻る人が増え、3 ヶ月後にはほとんどの人が戻っている（図表 2-2）。その一方で、回答者のうち 2 名は仮設住宅に入居していた。

電気・ガス・水道の復旧

電気は 2~3 日後までに 6 割弱、1 週間目までに 9 割強が復旧した。それに対してガスは、4 割近くが 1 週間以上復旧せず、15% は復旧に 3 週間以上を要した。水道は被害なしの割合も多かったが（33.5%）、被害を受けた地域では電気よりも復旧が遅く、12% で 2 週間以上かかっている（図表 2-3）。こうしたライフラインの復旧の遅れが、後にみるようなトイレ、入浴の困難に結びついていった。

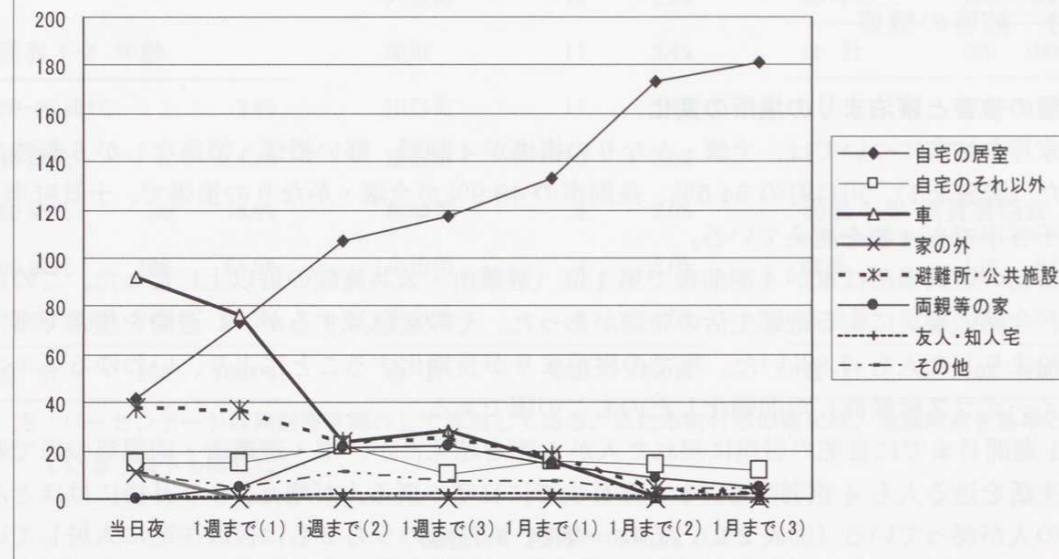
最初の風呂

水道やガスの復旧が遅れ、また浴室自体も被害を受けたために、半数近い人が 5 日目以降になってようやく地震後最初の風呂に入ることができた（図表 2-4）。1 週間目以降にやっと入浴できた人も、2 割を超えている。幸い暑い時期ではなかったが、長期間入浴できないことは、被災生活の苦痛を大きくしたといえる。最初に風呂に入れた場所については、自宅が 4 割で、銭湯・温泉等、両親等の家が 2 割前後で続いている。自衛隊の仮設風呂をあげた人も 1 割程度いた（図表 2-5）。

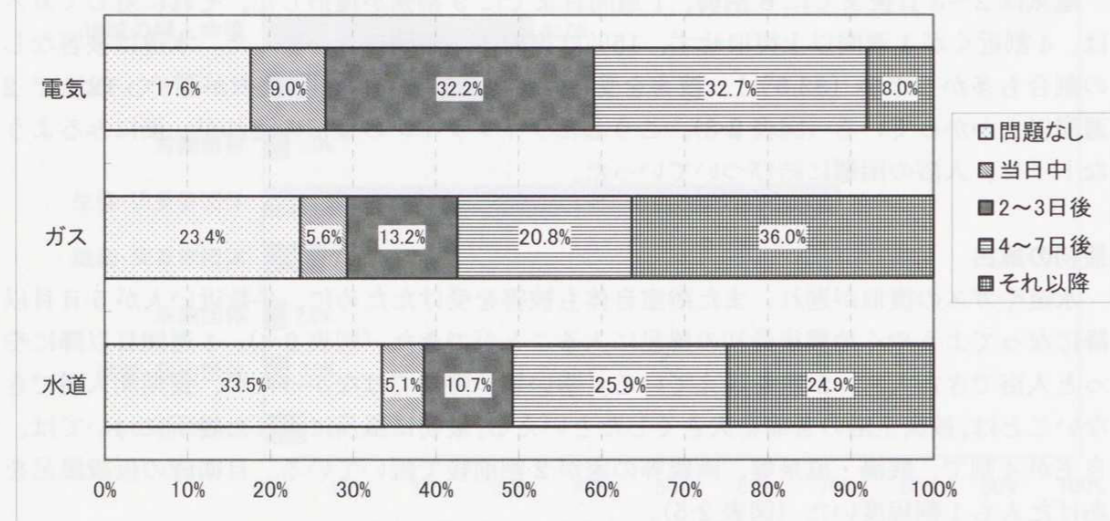
図表 2-1 家屋の被害

全壊	10	4.9%
かなりの損傷	64	31.4%
軽い損傷	112	54.9%
損傷なし	18	8.8%
合計	204	100.0%

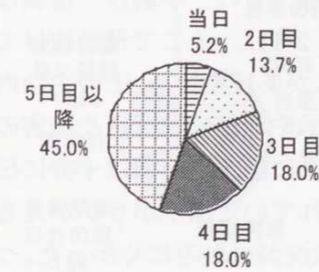
図表 2-2 寝泊まりの場所



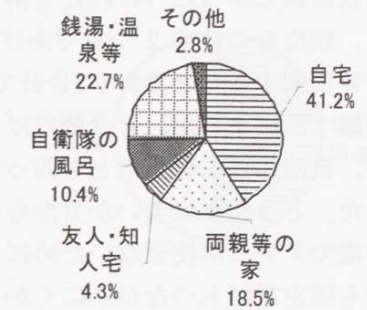
図表 2-3 電気・ガス・水道の復旧



図表 2-4 最初の風呂(いつ)



図表 2-5 最初の風呂(場所)



2-2 地震当日の状況

当日夜の食事と居場所

本震の時刻が午後 5 時 56 分頃だったため、夕食に影響がでた家庭が多かった。調査票では、発生前に食べた、発生後に食べた、食べられなかった、その他、という 4 つの選択肢から選んでもらった上で、地震後の食事の様子や食べることができなかった理由について、自由回答で記入してもらった。図表 2-6 は、選択肢のパーセンテージを示した上で、対応する自由回答を内容にしたがって整理し、集計したものである。また、自由回答の具体例については、後出の「自由回答から——地震当日の状況」のページのなかを示しておいた。

それによると、当日夜は 1 割強の人は地震前に夕食を済ませていたが、5 割弱は発生後に夕食をとった。自宅で用意してあった夕食をとることができた人もいたが、多くは時間も遅くなってから、車や近所の屋外、避難所でおにぎりやパンを食べた。また支度の途中だったり、揺れて散乱したために、あるいは食欲や食べる余裕がなかったために、4 割の人は夕食をとることができなかった。

地震当日の夜に自宅の居室に戻れた人は 2 割のみで、多くの人は車の中や避難所で過ごした(図表 2-7)。そのためこの夜は、ほぼ半数の人は横になって休むことができなかった(図表 2-8)。図表 2-9 は、避難した人が自宅から持ちだしたものについて、自由回答(複数回答)を整理・集計したものである。毛布・布団が記入数の 7 割を超えてもっとも多く、ついで懐中電灯、食料品、防寒着・衣類の順になっている。当日は晴れて夜に気温が下がったため、寒さを防ぐための物が多く、停電した暗い場所で行動するための懐中電灯や当座の食料と水がそれに続いている。

当日の夜に困ったこと・欲しかった支援

当日の夜に困ったことを、困った順に 2 つまで記入してもらった(図表 2-10)。上位を占めたのは、寒さ、通信の途絶、トイレである。さらに、停電で暗くなったこと、眠れな

かったこと、食料や飲み物の不足、余震の不安や情報の不足などがあげられている。場所によっては避難所も未整備で救援物資も届かず、情報もなく、不安な一夜を過ごしたことがうかがわれる。

当日の夜に欲しかった（けれども得られなかった）支援（もの・手助け・情報など）についても、順位をつけて2つまであげてもらった（図表2-11）。そこで飛び抜けて多かったのが情報に関することであり、合計で100名を超える人があげている。その主な内容は、どこへ避難すればよいか、どう動けばよいかといった指示や地震の大きさや被害の状況などである。自治体の広報車なども回ったようだが、避難所に関する情報は十分に伝わっていなかった。どうすればよいか分からなくて、途方に暮れていた様子が見える。

また停電でテレビが使えないために、自らがおかれた状況がつかみにくかった。ついで、携帯電話も固定電話もつながりにくかったため、家族や知人との連絡も取りにくかった。さらには当夜の寒さに対応して、毛布・布団や温かい食料・飲料、暖房・防寒具等の支援が必要とされたが、これらも十分には得られなかった。

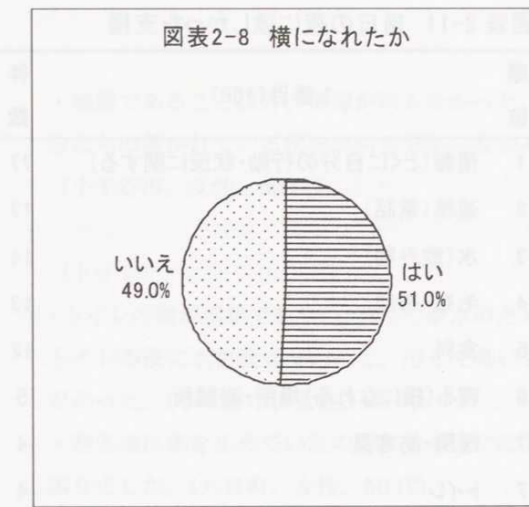
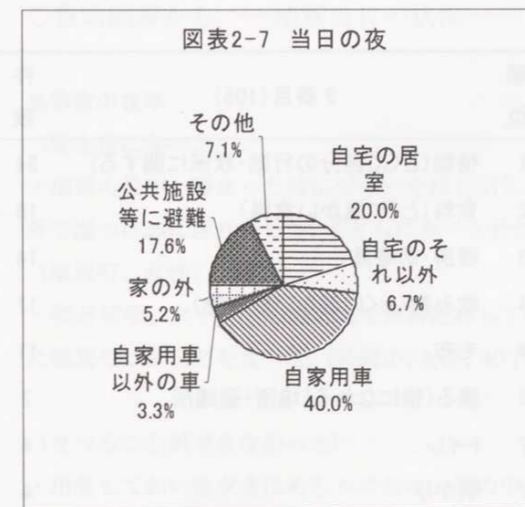
当日の夜に役に立ったもの・助かったこと

役に立ったもの・助かったことでは、こちらも情報がトップにあげられている。ラジオや車に搭載されたテレビが情報源となった。ついで懐中電灯、精神的な人の支え、車の順となっている（図表2-12）。自宅に入れず停電もしているなかで、いずれも不安を和らげる働きをしたと推察される。とくに誰かと一緒にいる、声を掛け合うといったことが、さまざまな物資や情報とともに地震当夜の被災者を支えたわけである。また少なくとも当座は、緊急の避難場所として、あるいは情報源として車が役に立っている。

図表2-6 当日の夕食

発生前	26(12.6%)	いつ	どこで	何を	件数
		18-20時	自宅	用意してあった夕食	30
		20-22時	車のなか	おにぎり・ご飯	28
発生後	98(47.3%)	22時以降	近所の屋外	パン	14
			避難所	お菓子・果物	10
			子どもの家	ありもの	9
		理由			
			夕食の支度がまだだった・支度が途中でだった		22
			夕食を始めようとしていた・地震でびっくりかえった		16
食べられず	81(39.1%)		食欲がなかった		12
			家に入ることができなかった		11
			食べる余裕がなかった		11
その他	2(1.0%)				

注：選択肢のあるもの以外は、自由回答を内容に従って整理・集計している（以下も同じ）。



図表2-9 当日の夜に自宅から持ちだしたものの

順位	内容(135)	件数	順位	内容	件数
1	毛布・布団	98	6	現金・貴重品	39
2	懐中電灯	60	7	ラジオ	28
3	食料品(パン・ご飯・菓子・果物など)	49	8	携帯電話	11
4	防寒着・衣類	43	9	カイロ	8
5	飲み物・水	42	10	薬	6

注：「内容」の後ろにあるかっこ内の数字は記入数を示している（以下も同じ）。

図表2-10 当日の夜に困ったこと

順位	1番目(196)	件数	順位	2番目(160)	件数
1	寒さ	35	1	トイレ	34
2	家族等と連絡が取れない・電話の不通	26	2	寒さ	27
3	トイレ	25	3	家族等と連絡が取れない・電話の不通	26
4	停電	22	4	食事がとれない	16
5	不眠	21	5	停電	12
6	余震の不安	14	6	飲み物がない	9
7	眠る場所	11	7	不眠	7
8	情報の不足	10	8	情報の不足	6
9	食事がとれない	7	9	水の不足	5
10	水の不足	6	9	余震の不安	5

図表 2-11 当日の夜に欲しかった支援

順位	1 番目(166)	件数	順位	2 番目(105)	件数
1	情報(とくに自分の行動・状況に関する)	77	1	情報(とくに自分の行動・状況に関する)	34
2	連絡(電話)	17	2	食料(とくに温かい食料)	16
3	水(飲み物)	14	3	暖房・防寒具	14
4	毛布・布団	13	4	飲み物(とくに温かい飲み物)	11
5	食料	12	4	毛布	11
6	寝る(横になれる)場所・避難所	5	6	寝る(横になれる)場所・避難所	7
7	暖房・防寒具	4	7	トイレ	4
7	トイレ	4	7	明かり	4
9	手助け	3	9	ガス	3
10	カイロ	2	9	家族・交流	3

図表 2-12 当日の夜に役立つもの・助かったこと

順位	内容(169)	件数
1	情報(ラジオ・テレビ・カーナビなど)	60
2	懐中電灯	35
3	精神的な人の支え(一緒にいる、声かけなど)	27
4	車	26
5	食べ物があつた・食べ物をもらった	20
6	飲み物があつた	16
7	毛布・布団	15
8	カイロ	12
9	携帯電話	10
10	防寒具	9

◇自由回答から——地震当日の状況——

当日夜の食事

(発生後に食べた)
 ・地震の最中、静まった時にジャーを持ち出し、外で塩つけおにぎりをして、子どもに食べさせた。(塩沢町、女性、50代)
 ・夜 8 時頃、スーパーの駐車場で無料配布していた惣菜やピザなどを食べた。(長岡市、女性、40代)
 (食べることができなかった)
 ・用意しておいた夕食はめっちゃめっちゃ。家の中には危険で入れない。町内で地域の学校に避難するよう指示され、避難所へ行った。そこでは食事のことなど考えるゆとりもなかった。(長岡市、女性、70代)
 ・避難所で食事の差し入れもなく、そのうえ恐怖で、食べるよりもいかにすごすかの思いがいっぱいでした。避難した方々と無事を確かめ合うのが精一杯でした。(長岡市、男性、70代)
 ・強い余震が続く中、家に入れず、中はぐちゃぐちゃで明かりもなく、食べ物を持ち出すこともできず、驚きであえて空腹も感じなかった。(小千谷市、女性、50代)

当日の夜に困ったこと

(寒さ)
 ・グラウンドの上に、ビニールシートを 1 枚とダンボールを敷いていましたが、寒くて 1 夜全然眠れませんでした。(十日町市、女性、60代)
 ・避難所が人でいっぱいに入れなかったため、寒さに震えて外の道路にいました。(長岡市、女性、60代)
 (通信・情報)
 ・まず電気、電話が使用できなくて困った。電話は携帯電話も受信はどうかできたが、発信は全然使用できなかったため、親戚、知人への連絡に、翌日の夕方まで困った。(塩沢町、女性、60代)

・地震であること以外、情報が何もなかった。自分たちの置かれている状況が何も分からなかった。(小千谷市、女性、60代)
 (トイレ)
 ・トイレの数が不足であり、なおかつ断水のため、トイレの後に水を流せないで、汚くて臭いもひどかった。(小千谷市、女性、60代)
 ・空き地に車を止めていたので、トイレには大変困りました。(六日町、女性、50代)
 (その他)
 ・余震がひどく、不安で眠れなかった。さらにヘリコプターの音がうるさくて眠れなかった。(十日町市、女性、30代)
 ・この地震がいつまで続くのかという思いが辛いものでした。大きな揺れが絶え間なく来たために、目の前の住宅や電柱が余震のたびに傾いていきました。(長岡市、女性、60代)

当日夜に欲しかった支援

(情報)
 ・避難所などの情報が届かなくて、やむなく自宅で過ごした。車が回ってきたが聞き取れなかった。(見附市、女性、50代)
 ・どこで何があつたのか、どこにいたらよいかという情報。市の広報車は巡回できなかったのかと思う。避難所が明確でなかった。(小千谷市、女性、60代)
 ・どのくらいの震度なのか、震源地はどこなのか。電話が通じなくて困った。小さな地域でも無線が 1 台ずつあればと思った。(川口町、女性、50代)
 (家族等との連絡)
 ・携帯電話が通じなくて親戚等の安否が心配だったため、通信網の確保。(小千谷市、女性、60代)
 ・電話が不通のため、兄弟や親族との連絡が取れ

ず、安否情報が一番欲しかった。(長岡市、女性、50代)

〈毛布や食料〉

・小学校に1晩泊まったのですが、毛布が1人1枚では寒くて眠れませんでした、もう少し厚い毛布が欲しかったです。(十日町市、女性、60代)

・毛布など、暖を取るものが不足。遅く行った者たちは、何もいただけなかった。(長岡市、女性、60代)

・夜間の食事が全くできなかったこと。飲料水が全く手に入らなかったこと。(川口町、男性、60代)

〈避難所・その他〉

・地域の住民全員が仮眠できる避難所。少なくとも各部落ごとに夜露をしのげる場所を、緊急時用に確保しておくべきだと思った。(川口町、女性、50代)

・遠くの避難所へ歩いていける状態ではなく、近くの公共施設を避難所として入ったが、狭いので、大家族の我が家は遠慮して出て、自家用車で過ごした。(小千谷市、女性、60代)

・1人暮らしなので人の声を聞きたかった。(栄町、女性、70代)。

当日夜に役に立ったもの

〈情報や物〉

注：市町村名の表記は、地震時点を基準としている。また属性の記入がない場合は空欄にしてある(以下同じ)。

・ラジオが手元にあったので情報が入ったから、デマなどには感わされなかった。(十日町市、男性、60代)

・避難所を知らなかったので、車がこんなに良い避難所になるとは思わなかった。家よりも余震の恐怖が少なく、落ち着くことができた。(長岡市、女性、50代)

・車の中のテレビ、携帯電話のメール。(塩沢町、女性、50代)

・毛布、冬物のコートで、近所の小さな子どもたちを包んでやることができて良かったです。(六日町、女性、60代)

〈人間関係や精神的な支え〉

・市の保育園が避難場所に指定され、安全な場所で町内の人達と一緒に(大勢)だったので、心強かった。(小千谷市、女性、60代)

・顔見知り(近所)の方々と一緒に場にいることで、勇気と安心感。(小千谷市、女性、60代)

・町内の連携がよくできていて、軽トラックで家に残っていた人を避難所まで送ってくれていた。(十日町市、女性、70代)

・子どもたちのために近所の人と飲食料を分け合ったこと。多く持ち出せた毛布を、他の子にも使ってもらったこと。(長岡市、女性、40代)

・隣近所の人たちと一緒に避難所に行った。4~5人の男性は町内の道路に車を止め、鍵もかけられなかった空っぽの家を1晩中守ってくれた。(長岡市、女性、60代)

2-3 1週目までの状況

1週目までの主な食事

自宅が壊れ、ライフラインが止まり、商店も営業できないでいる期間、食料をどう調達するかということはいっしょに重要な問題のひとつである。調査では、地震翌日から1週間目までの時期の食事の調達方法を、選択肢から3つまであげてもらい、その主な内容についても記入してもらった(図表 2-13)。被害が少ない場合は、自宅で普段に近い形で調理することができた。だが購入や支援物資も半数近い人があげており、その内容はパン、おにぎり、カップラーメンなどが中心となっている。避難所や近所での炊き出しでは、汁物やカレーライス、雑炊などの温かい食事もできた。この場合は、自衛隊による支援を受けたり、隣近所同士で材料を持ち寄って、協力しあいながら食事の用意がなされた。ただ全体としては、簡単に単調な内容にならざるをえなかった。

1週目までで困ったこと

この時期についても、困ったことを、困った順に2つまで記入してもらった(図表 2-14)。それによると、1番目、2番目ともトイレ、入浴、水が上位を占めている。風呂に入れないために子どもが「おむつかぶれ」になったり、遠方の親戚に洗濯を頼んだりといった記述がみられた。ガスや電気もあわせて、ライフラインが復旧していないことが日常生活に深刻な影響を与えている。それ以外では交通や通信の未回復、買い物の不便さ、子どもが余震におびえていること、などがあげられている。

今回は車での避難生活が目立っていたが、なかには避難所に入れない、入りづらいことから車での寝泊まりを余儀なくされたケースもある。「避難所に入らず、5日間車で寝泊りしたが、一睡もできず足がむくみ、痛くなったのが辛かった(長岡市、女性、50代)」。早い段階で十分な避難所を確保することが必要である。避難生活では、子どもや持病を抱えた人などが過酷な状況におかれることにも注意を払わなければならない。さらには、いわゆる「振り込め詐欺」に遭遇した経験も記されていた。十分な情報が得られないなかで、こうした詐欺あるいはデマによる被害に対しても気をつける必要がある。

1週目までで役に立った支援

この時期に役に立った支援、助かった支援として、物資・手助け・情報・その他についてそれぞれ記入してもらった(図表 2-15)。物資では食料・食事と水・飲み物が、それぞれ記入数の半数前後を占めて群を抜いて多くなっている。手助け(誰の・どのような)については、親戚をあげた人がもっとも多く、ついで近所の人、ボランティアの順になっている。親戚や子どもなどの身内に加えて、近隣関係やボランティアが、とくに情報交換や家の後片づけなどに関して重要な役割を果たしていた。

情報関係の支援としては、各地の被害状況や余震の情報、交通情報および炊き出しや入浴などの生活情報があげられている。とくにマスメディアが伝えきれないような、身近な被害情報・生活情報については、自治体の広報や隣近所の口コミ、ケーブルテレビ・コミュニティFMなどのローカルメディアの活躍がみられた。だが自治体からの情報に対しては、次の項目でみられるような不十分さも指摘されている。「その他」の項目では、支援が

なかった（受けなかった）という回答が多かったが、学校の先生や消防署員、警察官、医療関係者などの支援についての記入がみられた。

1 週目までのもっと欲しかった支援

この時期にもっと欲しかった（必要だった）支援についても、物資・手助け・情報・その他のそれぞれを記入してもらった（図表 2-16）。物資については食料と水がこれも多数を占めている。基本的な食料は届けられていたが、どうしても新鮮な野菜や果物が不足していた。ビタミン類の欠乏は体調を崩す原因となり、被災生活が長びくと深刻な事態になる可能性が高い。温かい食事や、片づけをしながらすぐ食べられる食事といったニーズも大きい。食料の支援については、その内容や質を徐々に高めていくことが求められる。また外部からの給水車による支援を含め、飲料水は足りていたようだが、炊事や洗濯等で使う生活用水は不足していた。

手助けとしては、家の後片づけや修理に多くの人手を必要としていたことが分かる。また行政や自衛隊に対して、仮設トイレや仮設風呂の早急な設置を求める声が見られた。情報についての要望も非常に多かった。交通や被害・余震に関する情報に加えて、救援物資や支援、ボランティア等、被災生活を支える情報が不足していたようだ。とりわけマスメディアが伝えきれないような、「風呂に入れる場所」「どこでボランティアを頼めばいいのか」といった地域の細かい情報に対するニーズが目立っていた。

1 週目までで不必要だった支援

この時期に不必要だった支援についても、自由に記入してもらった（図表 2-17）。そのうちもっとも多かったのは、食料の内容や量に関してで、具体的には同じもの（菓子パンやおにぎり）や賞味期限切れの近いものが無駄になってしまった、という記述がみられた。ついで古かったりサイズが合わなかったりした衣類があげられている。デマ情報に迷惑したという記入やボランティアに関するものもみられた。

被災生活も数日を経過すると生存の維持というだけでなく、被災者の生活の質を考える必要が出てくる。同じものを毎食食べるのは、やはりつらい。支援物資の配布を担当する行政としては、とりあえずあるものを公平に分配することを原則とするしかないだろう。しかし時間の経過とともに、被害の度合いによって必要とされる支援の内容は大きく異なってくる。

支援に関する記述からは、ものも情報も必要なものが必要な人の所に行き渡っていない反面、不必要なものも増えている様子がうかがえる。被災者の必要性と支援の内容の間でミスマッチやタイムラグが生じているわけである。この問題を解決するためには、必要性と支援についての情報の双方向的なやりとりが必要となるだろう。現場の要求と「善意」を取り結ぶ情報・コミュニケーションの回路をどのように形成していくかが課題となる。

また地震直後の時期を除けば、食料・衣類などの物資を被災地に送り届けることは必ずしも有効ではない。被災状況によるニーズの違いや変化に支援がきめ細かく対応していくためには、「もの」よりも義援金の方が有効に活用できるだろう。

図表 2-13 地震の翌日から 1 週間目までの食事

自分の家で作った(141)			自分・家族が買った(93)			配布された支援物資(92)		
順位	内容	件数	順位	内容	件数	順位	内容	件数
1	味噌汁・汁物	37	1	パン	23	1	パン	65
2	ご飯	28	2	おにぎり	18	2	おにぎり	62
3	ありもの	25	3	カップラーメン	14	3	飲み物	43
4	ふだん通り	21	4	飲み物	13	4	果物	24
5	おにぎり	12	5	弁当	9	5	カップラーメン	20

避難所の炊き出し(42)			近所での炊き出し(31)			その他(29)		
順位	内容	件数	順位	内容	件数	順位	内容	件数
1	汁物・味噌汁	21	1	汁物・味噌汁	12	1	親戚・知人から	20
2	おにぎり	20	2	おにぎり	8	2	食堂	1
3	パン	9	3	カレーライス	5	2	役員が購入	1
4	飲み物	7	4	ご飯	4			
4	果物	7	5	雑炊	3			

図表 2-14 翌日から 1 週間目までの間で困ったこと

1 番目(187)			2 番目(148)		
順位	内容	件数	順位	内容	件数
1	トイレ	30	1	水	15
2	入浴	26	2	入浴	13
3	水	23	2	トイレ	13
4	余震の不安	17	4	家の後片づけ	10
5	ガスが使用できない	15	5	交通の困難	8
6	買い物(商品不足・閉店・価格高騰)	8	6	買い物(商品不足・閉店・価格高騰)	7
7	停電	7	6	余震の不安	7

図表 2-15 翌日から 1 週間目までの間で役に立った(助かった)支援

物資の支援(132)			手助け(113)		
順位	内容	件数	順位	内容	件数
1	食料・食事	78	1	親戚(後片づけ・差し入れ・家族を預かる)	24
2	水・飲み物	65	2	近所の人(情報交換・差し入れ・後片づけ)	22
3	ホッカイロ	16	3	ボランティア(家の後片づけ・食事)	18
4	毛布	13	4	子ども(後片づけ・迎えにくる・差し入れ)	17
5	カセットボンベ・ガスボンベ	9	5	友人・知人(差し入れ・励まし)	11
6	カセットコンロ	7	6	自衛隊(仮設風呂の設置)	6
7	衣類・下着	6	6	大工(家の修理)	6

順位	情報(111)	件数	順位	その他(36)	件数
1	各地の被害状況	13	1	支援は受けず	9
2	余震の情報	10	2	市役所職員・地区の委員・先生の訪問	3
3	道路状況・交通情報	9	2	消防・警察のパトロール	2
4	炊き出し・食料について	5	4	町内の協力体制	1
4	入浴について	5	5	スーパーが商品を低額で提供	1
6	スーパー等の営業情報	4	6	デイサービスの再開	1
6	給水車の情報	4			

図表 2-16 翌日から1週間目までの間でもっと欲しかった(必要だった)支援

順位	物資の支援(95)	件数	順位	手助け(41)	件数
1	食料(とくに野菜・果物)	38	1	家の後片づけ(ボランティア・男性など)	14
2	水	27	2	家の修理・調査(大工・行政など)	6
3	衣類・下着	9	2	仮設トイレ・仮設風呂(行政・自衛隊)	6
4	毛布	8	4	情報の伝達(町内の役員など)	4
5	カセットボンベ・ガスボンベ	7	5	医療・高齢者の介護(医師・看護師)	3
5	カセットコンロ・ガスコンロ	7	6	治安(警察)	1
7	懐中電灯	5	6	そばにいて欲しい(余震が怖い)	1

順位	情報(82)	件数	順位	その他(25)	件数
1	道路状況・交通情報	13	1	ライフラインの早期復旧	2
2	被害の状況・余震の情報	11	1	ひとり暮らしの人の手助け	2
3	地域の状況	9	1	手続き関連の手助け	2
4	救援物資について	5	1	風呂	2
4	支援について	5	1	トイレ(身体が不自由な人のための)	2
6	ボランティアについて	4	6	洗濯	1
6	安否の確認	4	6	ふだんから隣近所を大切に	1

図表 2-17 翌日から1週間目までの間で不必要だった支援

順位	支援の内容(31)	件数
1	食料(同じ物・多い・生もの・加熱する必要)	16
2	衣類・古着	7
3	ホッカイロ(貼れないもの)	2
3	デマ	2
3	ボランティア(一度に大勢くる・素性が不明)	2

◇自由回答から——1週間目までの状況——

1週間目までの食事

〈自分の家で作った〉
 ・煮物、漬物(電気が使用でき、電気釜を使用し煮物を作ることができた。(長岡市、女性、70代)
 ・家の庭で卓上コンロを使って飯盒でご飯を炊き、おにぎりにした。(十日町市、女性、60代)
 ・発電機を順番に使いご飯を炊いて、あるもので簡単に食事をしていた。(長岡市、女性、40代)

〈自分・家族が買った〉
 ・野菜は自分の家にありましたので、店の商品がなくなるという話を聞き、魚、肉、加工食品等を買いました。(十日町市、女性、60代)
 ・近所のスーパーが3日後くらいから開いたので、おにぎりや弁当を買いました。(小千谷市、女性、60代)
 ・コンビニでお弁当やおにぎり、パンなど。(長岡市、女性、40代)

〈配布された支援物資〉
 ・近所でパン、おにぎりを配ってくれたのでそれを食べた。(十日町市、男性、60代)
 ・おにぎりが全員に行き渡らず、皆で分けるのに大変だった。けんか腰にもなった。(小千谷市、女性、60代)
 ・ガス、水道、電気が止まっていたので、もっぱら支給されたおにぎり、お茶、水、またはパン、牛乳。朝と夕の2回。(小千谷市、女性、60代)

〈避難所の炊き出し〉
 ・おにぎり、パン、カレーライス、ごはん、雑炊。(柏崎市、男性、70代)
 ・自衛隊の皆さんの炊き出しでバランスは良かった。量的にも十分でした。(川口町、男性、60代)
 ・手先の利くお母さんがいて、いつも温かいものを作ってくださって、冷たいものは口にしませんでした(感謝)。(小千谷市、女性、70代)

〈近所での炊き出し〉
 ・24日のお昼に初めて近所の若い人たちがおにぎりやトン汁を外で作り、いただいた(近所の広場で)。(十日町市、女性、70代)
 ・10月25日まで電気がついていたので、我が家に近所の人が集まって、電気釜、電気湯沸かし器、カセットコンロを使って、給水車の水で、近所中、来る人を拒まず食事を作って食べました。(長岡市、女性、60代)
 ・3軒で、冷蔵庫のものや畑の野菜等を持ち寄って、大勢で協力した。(十日町市、女性、60代)

〈その他〉
 ・東京にいる息子からたくさんの食料が届いた。近所にもおすそ分けできるくらいの量。(十日町市、女性、70代)
 ・半壊のスーパーから役員が集めて買ってきたパン、ジュース、お茶等。(小千谷市、女性、60代)

1週間目までで困ったこと

〈トイレ・入浴〉
 ・下水道が壊れてトイレが使えない。仮設トイレが3日目くらいにできたが、それまで外でするか、車で小学校の仮設トイレまで行った(自宅近くの高台の広場に避難していたため)。(小千谷市、女性、50代)
 ・水も出ないし自宅は危険で入ることができず、ものを食べたり飲んだりすればトイレが近くなるので本当に困りました。また寒い夜はよけいトイレが近くなり辛い日々でした。(小千谷市、女性、60代)
 ・ガスが止まったので、お風呂に入れなかった(髪が洗えなくて辛かった)。(長岡市、女性、40代)
 ・風呂に入れない。そのため子どもがおむつかぶれになった。(十日町市、女性、30代)

〈生活用水〉

・給水車が何時に来るのかわからないのと、その時を逃すと水がないのが困った。(小千谷市、女性、60代)

・洗濯ができなかった。長岡のコインランドリーに行きましたが、水不足のために、1日の定員に限られました。仕方ありませんから、五泉の親類に4日おきくらいに洗濯物を持って行って、洗濯をしていただいて助かりました。(小千谷市、女性、70代)

・水がないため、手洗いができないし、歯磨きもままならない。顔も洗えないし、洗濯もできない。(川口町、女性、30代)

〈余震の不安〉

・余震が続き、体中が揺れている感じで、家の前を車が通ってもビクッと驚く。(長岡市、女性、70代)

・1番下の孫は1歳ですが、余震が怖くて、昼間寝ついても布団に下ろすことができず、ずっと背中におんぶしていました。本当に疲れました。(川口町、女性、50代)

・子ども(小2)が怖がって、私(母)の傍を離れなかった。どうしたら子どもの恐怖心を取り除いてあげられるのか、親も不安だった。(長岡市、女性、30代)

〈交通・通信〉

・通勤道路が土砂崩れのために通行できなくなり、遠回りをした。渋滞で時間がかかった。(小千谷市、女性、50代)

・電話が使用できず、子どもたち、兄弟と連絡が取れず心配ばかりでした。(十日町市、女性、70代)

・自宅前の道路の車中泊だったため、情報が少なかった。避難所はいっぱい、情報を得るために行ってみたが入れず断念。(十日町市、女性、30代)

〈買い物や支援物資〉

・短い間でしたが、近くの店やスーパーに商品が

なくなりましてので、必需品(パン、肉、魚)が手に入らなくなりました。(十日町市、女性、60代)

・定められた避難所でないとって、全然物資が来なかった。4日目くらいになって、パン、水が配られてきたが、自分で作られるようになったので嬉しくなかった。(十日町市、女性、70代)

・配布された支援物資(食品)が、1日に1家族何人いてもおにぎり2個、パン2個くらいのことがあった。1日に3食いただいたことがなかった。(小千谷市、女性、50代)

〈家の後片づけ〉

・家の中、事務所の中、蔵の中の散乱したものの始末。墓、燈籠、ブロック塀の片づけが大変でした。(柏崎市、女性、60代)

・睡眠不足でも片づけをしなければならず、疲労が蓄積した。(川口町、女性、50代)

・余震が続いたため、なかなか片付けができない。(見附市、女性、50代)

〈車中泊や健康問題、その他〉

・近くの避難所は狭く、大家族の我が家は入りづらかったので、駐車場に停めた自家用車で寝起きしたが、体が伸ばせず、エコノミークラス症候群を心配しながらの避難でした。(小千谷市、女性、60代)

・避難所に入れず、5日間車で寝泊りしたが、一睡もできず足がむくみ、痛くなったのが辛かった。(長岡市、女性、50代)

・孫が風邪を引いてしまい、発熱と咳がひどく、夜間寒いところで寝ていたので症状が悪化するばかりでした。(川口町、女性、50代)

・余震の不安で家に居られないような状態の中、10月29日午後2時過ぎに自衛隊員と名乗る人から、お宅の息子が災害に遭い頭部から出血しているのでヘリを使用するから(そのヘリも民間のもの)100万円用意しろと電話あり、幸いにも息子に確認できたので難を逃れた。(見附市、女性、60代)

1週目までで役に立った支援

〈物資〉

・町内役員が避難所へ行けない人のために、おにぎり、パン、カップめんなどを配ってくれた(同時に安否の確認になった)(長岡市、女性、60代)

・給水車が来てくれたことが嬉しかった。各県の名前の入った給水車を見て、涙が出るほど嬉しく思いました。(長岡市、女性、60代)

・水、パン、缶詰、ラーメン、ホッカイロなど。ご飯を炊いて来てくれた人、煮物を鍋ごと持って来てくれた人など嬉しかった。(十日町市、女性、70代)

・生鮮野菜、ホッカイロ、下着(洗濯ができないので)、ブルーシート(屋根にかける)、電池、水。(小千谷市、女性、60代)

・見附市ではカセットコンロとボンベ3本まで無料で貸し出しをしてもらった。本当に助かった。希望者には2500円で買い取りもできた。水、毛布、タオル、衣類等役に立った。(見附市、女性、60代)

〈手助け〉

・親戚の人に、老夫婦を預かってもらったこと。(小千谷市、女性、50代)

・近所の家族との情報交換や、お互いの差し入れなど。(川口町、女性、30代)

・ボランティアの人たちの、倒れたもの(家具など)の整理、壊れたものを捨ててくださったこと。(女性、60代)

・東京から駆けつけた長男の、後片付け、ゴミ出し、買い物や入浴への車の送迎。(長岡市、女性、60代)

・自衛隊のお風呂、食事。ボランティアの人たちの食事。(小千谷市、女性、60代)

〈情報〉

・翌日の夜明けに配布された日報の朝刊(この地震が何であったか、そこで初めて知った)。(小千谷市、女性、50代)

・テレビですぐ余震の情報が知らされたこと。(塩

沢町、女性、50代)

・入浴やボランティアによる炊き出し情報。町内会を通して、各戸にチラシ配布。(小千谷市、女性、60代)

・市、町内で出す印刷物による情報(近辺の被害状況、風呂の情報、交通状態等)。(小千谷市、女性、60代)

・開いてる店、やってる病院、携帯電話の電源補充、周囲の被害の状況(知人からの電話による)。(小千谷市、女性、50代)

・ケーブルテレビやFMながおかで、北陸ガスからカセットコンロを貸し出すという放送があった。(長岡市、女性、60代)

〈その他〉

・私の住んでいる地区には、地震後1週間くらいは目立った支援はほとんどありませんでした。皆で米や野菜を出し合って自活していました。(川口町、女性、50代)

・子どもの担任が家を訪問してくれた。子どもの表情が明るくなった。(長岡市、女性、30代)

・消防署や警察官などのパトロールなどで治安が良く、安心できた。(小千谷市、女性、60代)

・近くのスーパーが、被災した商品を無料に近い金額で配布した。大家族の我が家は、支援の食事では間に合わないのと、とても助かった。(小千谷市、女性、60代)

・赤十字の救護所。車の中の生活で耳鳴りや頭痛等体調が悪くなったが、診てもらえて助かった。後日心のケアに家まで来てくれた。(小千谷市、女性、50代)

1週目までのもっと欲しかった支援

〈物資〉

・わがままかもしれませんが野菜、果物類。100%ジュースでも良いのですが。(小千谷市、女性、50代)

・温かいご飯、温かい野菜汁、水。(小千谷市、女性、60代)

・食事(片付けをしていると食事が作れない)。(長岡市、女性、60代)

・飲むだけでなく、食品、食器等を洗えるほどの水がほしかった。(小千谷市、女性、60代)

・水、ガスコンロ、下着類(水と電気がないので洗濯ができなくて、持っている下着全部を使用してしまって替えない)。(小千谷市、女性、60代)

〈手助け〉

・壊れた家具や壁の撤去(男性、若い人)。重くて大変だった。(小千谷市、女性、60代)

・ボランティア(直接的に家の片付け)、自衛隊(物資の運搬、仮設風呂)、警察官(治安)。(小千谷市、女性、60代)

・仮設トイレ(月末頃ようやく市にお願いしていた物が設置された)。(小千谷市、女性、60代)

・避難所をまとめ、連絡を取る行政の人。(十日町市、女性、40代)

・毎日夕方に地震が来るので恐ろしく、1人になったら心細く、誰でも良いからそばにいてもらいたいと思った(私のわがままか)。(十日町市、女性、70代)

〈情報〉

・自分が住んでいる地区の周りの状況(道路等)。(川口町、女性、40代)

・詳しい被害情報(長岡市とひとくくりにした情報でなく、例えば〇〇地区、〇〇町内といったような)。(長岡市、男性、60代)

・現況(停電によって、全く分からなかった)。どこで何が手に入るか。洗濯や入浴ができるところ。道路情報。いつ余震がおさまるかが一番知りたい。(小千谷市、女性、50代)

・地域の細かな情報、風呂に入れる場所、ごみの出し方など。(長岡市、女性、50代)

・どこでどんな支援が受けられるのかの情報は、大きな避難所に行かないと分からなかった。(小千谷市、女性、60代)

・ボランティアをどこへ頼んでいいのかわからなかった。(長岡市、女性、60代)

・ここへ行けば情報があるという情報。自分の身の回りの事しか分からなかったので、大型スクリーン等でテレビが見られる所があると良かった。

(小千谷市、女性、50代)

〈その他〉

・一人暮らしのため、市役所に避難する時に誰も送ってくれず(車を持っている人に頼りたけれど)、タクシーで行きました。(十日町市、女性、70代)

・行政書士(関係機関への書類提出の手助けなど)。(小千谷市、女性、60代)

・地震の保険について、また、被災届け等の情報が欲しかった。(柏崎市、女性、60代)

1週目までで不必要だった支援

・アンパンばかりがきた。また賞味期限が過ぎて食べられなかったパンもありました。(十日町市、女性、70代)

・3、4日目になると菓子パンは食べられない(飽きて)。またレトルトパウチのおにぎりは温められず、どちらも捨てた。(十日町市、女性、30代)

・救援物資が、一週間経っても本当に必要なところとそうでないところが画一的に配付されるなど、疑問も多く持った。(見附市、女性、50代)

・必要以上に送られてくる支援物資(ありがたいが、送る人にも何をどんなふうに使えば良いのかという情報が定着していない)。(長岡市、男性、20代)

・貼れないホットアイロ、サイズの大きすぎる靴下。(川口町、女性、50代)

・大勢一度にボランティアさんに来られても、指示することをお願いするのに、3~4人くらいが限度。(十日町市、女性、60代)

・中古衣類のぼろの様な品物が、役場の倉庫に山のようにあったことには驚きました(東京地区より送品)。(女性、70代)

・占い師による、いついつまた地震が来るというデマ。(六日町、女性、50代)

2-4 1ヶ月目までの状況

1ヶ月目までで困ったこと

つづいて地震から8日目以降1ヶ月目までの期間について、1週目までとほぼ同じ質問に回答してもらった。

まず、この時期に困ったことを困った順に2つまで記入してもらった(図表2-18)。トイレ・入浴に関する支援やライフラインの復旧が一定程度進んだことにより、この時期には家の後片づけや修理の問題がより前面に出てきている。くりかえされる余震によって家の片づけもままならず、また余震のたびに家の損壊も進んで、被害判定や修理も困難になっていく。その意味で人手はいくらでも必要であり、地域でボランティアをいかに有効に受け入れ機能させるか、建築関係の専門家の助力をいかに得るか、が重要な課題となる。

同時に被災生活が長引き、家の片づけも際限なく続くなかで、不安や不眠、体調不良などの精神的・身体的不調が増大してきた様子が見えてくる。しかも余震が長期にわたって繰り返されたために、「いつでもすぐ飛び出せるように」服を着たまま玄関近くで寝るといった生活が続く、心身ともに疲労が蓄積していく。深刻な状態にいたらないうちに、早期に医療関係者が対応していくことが必要であろう。

1ヶ月目までの役に立った支援

1ヶ月目までの時期に役に立った支援、助かった支援として、物資・手助け・情報・その他について、ここでもそれぞれ記入してもらった(図表2-19)。この時期になると、1週目までと比べてそれぞれの項目の記入数はほぼ半減している。役に立った支援として、物資では相変わらず食料・飲料が上位にあるが、マスクやタオルなどの日用品がそれに続き、見舞金も登場してくる。手助けとしては、家の後片づけが本格化するとともに、ボランティアの活躍に助けられたという回答が多くなっている。また体調を崩したり不安を訴える被災者も増えてくるなかで、医薬品や医療関係者の支援、知人や友人からの励ましや心配りなどに助けられたという声もあがってきた。情報に関しては、行政の広報も機能してきたことにより、入浴や炊き出し、ボランティア、各種支援についての情報が被災者のもとに届けられるようになった。

1ヶ月目までにもっと欲しかった支援

この時期についても、もっと欲しかった(必要だった)支援について、物資・手助け・情報・その他のそれぞれを記入してもらった(図表2-20)。その内容は、引き続き野菜や果物などの新鮮な食料品、家の後片づけや補修、農作業などのための人手、支援やボランティアに関する情報が上位にあがってきている。また休養や安心が必要だという回答も寄せられた。

1週目までの時期と比較すると、物資と情報に関しては記入数が3~4割程度に減少しているが、手助けについてはそれほど減少していない(7割強)。この時期になると商店も本格的に営業を再開し、物資はひととおり行き渡ったのだろう。また行政の広報等の整備につれて、身近な生活情報のニーズも一段落したようである。ただ住宅の補修や建て替えに向けて、援助金や罹災証明に関する情報ニーズが強まってきており、この点への対応は不

十分だったようだ。この時期には、ボランティアに関する情報とともに、支援制度にかかわる情報の充実が望まれていた。また前述したように、家の片づけや補修をする人手に対するニーズは非常に大きいので、力仕事を助けるボランティアや大工・左官などの仕事をする人が必要とされている。そのほかには、「休養のできる時間」といった記入もみられた。

1ヶ月目までで不必要だった支援

不必要だった支援としては、タイミングが遅れた支援や菓子パンとともに、ここでもまたデマという回答がみられた(図表 2-21)。デマの内容は、たとえば「いついつ余震が来る」といったものようだ。心身が疲れた状態だと、そうした風評にも影響を受けやすくなるので注意したい。インフラの復旧が進み、商店も営業していたので、物質的なニーズはだいぶ満たされている。ボランティアに関しても、タイミングの難しさがうかがえる。この時期にボランティアの手助けを必要としていた被災者も多かったことを考えると、やはり情報のルートを整備して必要性と支援のミスマッチを生じさせないようにする工夫が求められる。

図表 2-18 8日目から1ヶ月目までの間で困ったこと

順位	1 番目 (130)	件数	順位	2 番目 (94)	件数
1	余震の不安	19	1	家の損壊・修理(損壊の進行・判定)	14
2	家の後片づけ	15	2	家の後片づけ	12
3	トイレ	14	3	入浴	8
4	家の損壊・修理(損壊の進行・判定)	13	4	洗濯	6
5	入浴(風呂が壊れた、ガス・水道未回復)	11	5	ガスが使用できない	5
6	ガスが使用できない	9	5	体調不良	5
6	安心して眠れない	9	5	安心して眠れない	5

図表 2-19 8日目から1ヶ月目までの間で役に立った(助かった)支援

順位	物資の支援(71)	件数	順位	手助け(71)	件数
1	食料・食事	36	1	ボランティア(後片づけ・子守り・土木作業)	21
2	水・飲み物	16	2	親戚(後片づけ・差し入れ)	11
3	日用品(マスク・タオル・紙類)	13	3	子ども(後片づけ)	10
4	毛布	5	4	大工・建築関係者(家屋の補修・診断)	7
5	カセットボンベ・ガスボンベ	4	5	自衛隊(仮設風呂・物資支給)	6
5	現金(見舞金)	4	6	医療従事者(回診)	5
5	カイロ	4	7	市・町の職員(物資支給)	3
8	防寒着	3	7	近所の人(差し入れ・情報交換・家の片づけ)	3

順位	情報(52)	件数	順位	その他(12)	件数
1	地震(被害)について	8	1	励ましの電話・手紙・メール	3
2	入浴について	7	2	近所の人(心配り)	2
3	支援について	6	3	近所・消防団の土木作業	1
4	ゴミ収集について	5	3	保健師の指導	1
5	ボランティアについて	4	3	行政による宿泊・引っ越しの手配	1
6	生活情報	3	3	話をする	1
7	家屋の被害(判定)について	2			

図表 2-20 8日目から1ヶ月目までの間でもっと欲しかった(必要だった)支援

順位	物資の支援(34)	件数	順位	手助け(30)	件数
1	食料(とくに野菜・果物)	18	1	家の後片づけ・力仕事	10
2	水	6	2	家屋の補修	9
3	衣類・下着	3	3	農作業	4
4	トイレトーパー	2	4	身体が不自由な人の手助け	1
4	カセットボンベ・ガスボンベ	2	4	子守り	1

順位	情報(35)	件数	順位	その他(21)	件数
1	支援について	10	1	休養・安心	3
2	ライフラインの復旧状況	4	1	ライフライン・道路の復旧	3
2	地震(被害)について	4	3	近くの避難所・集合場所	2
4	周辺・地域について	3	4	偏りのない支援	1
5	ボランティアについて	2	4	情報を伝える手段	1

図表 2-21 8日目から1ヶ月目までの間で不必要だった支援

順位	支援の内容(21)	件数
1	復旧後の支援	5
2	菓子パン	4
3	デマ	3
4	サイズの合わない衣類	2

◇自由回答から——1ヶ月目までの状況——

1ヶ月目までで困ったこと

〈家の後片づけ・損壊・修理〉

・家の判定がはっきりせず、どのように補修して住めるのかがわからない。余震が続き、家の補修に大工さんをなかなか頼めなかった。(長岡市、女性、70代)

・早く家の修理をして欲しかった。11月の始めにトイレの破損が分かり、使用できなくなった。掃除しても掃除しても、壁土がポロポロ落ち、空気中に飛び、喉や鼻に入ってくしゃみと咳に困った。11月の半ば頃には、(ひどい部分だけが)修理が終わった。(十日町市、女性、70代)

・預金がなく家の修理ができないので、余震のたびに不安だった。(小千谷市、女性、50代)

・瓦の片付け。収集場所まで持って行くのに手がなく、重労働だった。(川口町、女性、50代)

・あまりに凄まじい家具等の散乱で、居場所をつくる、台所を使用可能にする等、片付けが多くて際限なく忙しく、とても肉体的に辛かった。(小千谷市、女性、50代)

・家の片付けが間に合わず、不眠が続いて体力的に大変だった。(小千谷市、女性、50代)

〈余震の不安・体調不良・不眠〉

・家の中の片付けが遅々として、心身ともに疲れきっていた。余震が度々あり、まだ大きいのがくるということもあり(終わりの宣言がなく)、元のように家の中を復元できず、いつも中途半端というか、避難所モードを抜け出せないでいた。夜も、パジャマに着替えてという気になれなかった。恐れおののいていた。(長岡市、女性、60代)

・余震が続き、ゆっくり眠れない。24時間玄関は開けっ放しで、すぐに逃げられるような支度で寝ていた。(小千谷市、女性、50代)

・車の中で寝泊りして足や身体中が痛くなり、危険を承知で自宅の玄関に1番近い部屋を片付けて家族中で寝泊りした。夜はいつでも地震に備えてすぐ飛び出せるように戸を開けていた。(小千谷

市、女性、60代)

・主人が公務員で全く帰ってこないため、子どもたちが不安があった。(十日町市、女性、30代)

・疲れが出始めて、仕事があるのに体が動かない日があった。ある程度自分で片付けないと人に頼めない。(長岡市、女性、60代)

〈トイレ・入浴・洗濯〉

・自宅のトイレが使えず困り、畑にトイレを作り使っていたけど困りました。(小千谷市、男性、50代)

・ガスの復旧が遅かったため、赤ちゃんの入浴、洗濯などに困った。(小千谷市、女性、50代)

・洗濯ができない。洗っても、避難所では干す場所がない。(川口町、女性、30代)

〈その他〉

・商人は、売上げが止まってしまったのが一番困る。銀行などはどんなことがあっても引き落としを止めない。(十日町市、男性、60代)

・ごみの収集が滞ったこと(仕方がないことではあります)。(長岡市、女性、60代)

・実家へしばらく移ったが、思ったよりも早く学校が再開。でも家にはまだガス、水道が通っておらず、この状態の生活で学校生活は無理で、学校が始まってもすぐには戻れなかった。(川口町、女性、30代)

・12日目から会社(長岡市)へ出社したが、交通機関が不便で、片道3時間くらいかかり、へとへとだった。(小出町、女性、50代)

1ヶ月目までで役に立った支援

〈物資〉

・食料(あちこちから鮭や筋子、特産のかまぼこや揚げ物、果物、ハム、お菓子、お茶)、タオルなどをいただき嬉しかった。(十日町市、女性、70代)

・不足しがちな野菜類、果物の差し入れ。(小千谷市、女性、60代)

・給水車が来てくれて助かった。(小千谷市、女性、70代)

・食器類が助かりました。毎日使っている物が全部落ちて壊れてしまい、支援の紙皿で食事をしていました。時にはアルミホイル等も皿になりました。(長岡市、女性、60代)

・常連のお客様の見舞金がたくさん届いたこと。(塩沢町、女性、50代)

〈手助け〉

・解体を修理に変えたために、色々な小さな仕事が出てきた時に、栃木から若者がボランティアに来てくれました。頼みもしないのに朝来て、片づけを手伝ってくれました。思いがけないことで嬉しく、心強く感じ、自分も頑張ろうと思いました。(長岡市、女性、60代)

・建築会社からの手助け。家屋の検査、道具の修理、重い道具の移動。(長岡市、女性、70代)

・ボランティアの方の子守り、小学生の送迎。美容院の方々による散髪。(川口町、女性、30代)

・息子が川崎から、山梨・長野の名水、果物、野菜をどっさり運んでくれ助かりました。やはり身内は大切。(十日町市、女性)

・隣の方の親切、近所の方の心配り、車でお風呂に1日おきに連れて行ってくれたこと、ありがとう。(小千谷市、女性、70代)

・日赤が町内に来ていて、血圧を測ってもらうだけでも、とても心強く感じた。(小千谷市、女性、50代)

〈情報〉

・地方新聞による市内の状況等(写真)。(小千谷市、女性、60代)

・町内だけでなく、市内のいろいろな方と情報交換ができるようになっていった。入浴の情報、いろいろな支援についての情報、テレビでの生活支援情報が役に立った。(小千谷市、女性、50代)

・市役所→町内会→各班→個人のシステムで、入

浴情報、炊き出し情報のチラシ配布。(小千谷市、女性、60代)

・「広報」による災害情報や必要手続きの指導等。(川口町、男性、60代)

・「ボランティアを利用してください」という社協のビラが配られて、利用できた。(長岡市、女性、60代)

〈その他〉

・電話が通じてから、知人からの励ましの電話や食品(甘いもの、レトルト)などの見舞い品が嬉しく、災害で心が塞いでいたのも元気が出た。(小千谷市、女性、50代)

・知人からのメールに励まされた。(長岡市、女性、40代)

・近くの避難していた高台に亀裂が何本も入っていて、電話したら30分で消防団の方が来てブルーシートを張ってくれた。自宅脇の川の土手も亀裂が入っていたので、その時に見てもらって、次の日シート60枚を届けてもらい、町内の住人みんなです手にかぶせた。(小千谷市、女性、50代)

1ヶ月目までにもっと欲しかった支援

〈物資〉

・生もの(新鮮な野菜、果物等)。(小千谷市、女性、60代)

・水とガステーブルを使えなかったので、火を使用しなくてもすぐ食べられるレトルト食品類。(小千谷市、女性、60代)

・支援物資(食べ物)は取りに行かねばもらえなかった。高齢者には不親切だったと思う(もらいに行けなかった)。(長岡市、女性、70代)

・避難所にいる人だけが被災者ではない。しかし車中や家になんとか居る人には、何の支援もなかった。(長岡市、女性、70代)

・食器などを洗う水が欲しかった。(川口町、女性、50代)

〈手助け〉

- ・ボランティアの人(家の中の片付けや搬出)。(十日町市、女性、60代)
- ・安心してお願いできるボランティア。(小千谷市、女性、60代)
- ・ボランティア(農作業が遅れて困ったけれど、私の家だけ続けて来て欲しいとは言えなかった。皆が困っていたから)。(川口町、女性、50代)
- ・男の人の労働力(重いものを動かしたり、倒れた柱などを運ぶ労働力)。(小千谷市、女性、60代)
- ・大工、左官等、専門家による家の修復。(小千谷市、女性、50代)

〈情報〉

- ・援助金等の制度の情報。(長岡市、女性、40代)
- ・住宅修理に関する支援体制、建物共済などの査定や支払額。(十日町市、女性、70代)
- ・地盤や建築についての情報が欲しかった。色々なデマが飛び交った。(長岡市、女性、70代)
- ・ボランティア情報。(長岡市、女性、60代)
- ・道路の情報(買い物その他、外出するとき時間がかかりすぎるから)。その日より不通になるところがあったりしたから。(小千谷市、女性、70代)
- ・余震に関する情報。被災者に対する援助に関する情報。窓口に問い合わせても、回答がまちまちだった。(長岡市、女性、30代)

〈その他〉

- ・休養のできる時間。(長岡市、女性、60代)
- ・ライフライン、特にガスが遅かった。11月15日にやっと路上より家に届いた。(長岡市、女性、60代)
- ・中央部(本部)に近いところで避難生活をしてきた人は、割合何でも手に入ったが、遠くの人には届かないアンバランスの支給だった(公平が原則)。(小千谷市、女性、60代)
- ・避難所や仮設以外にも被災した人は多くいるが、情報を早く伝える手段。(長岡市、女性、40代)

1ヶ月目までで不必要だった支援

- ・ボランティアの申し出はたくさんあったが、家の復旧が進んでいるのに、そういうボランティアは不必要だと思った。タイミングが遅い。(長岡市、女性、40代)
- ・店が開いたり電気、水道が入ったら、あまり物はいらないと思う。(小千谷市、女性、60代)
- ・物見遊山なボランティア。〇日にまた震度5の余震があるという風評。(小千谷市、女性、50代)
- ・パンはだめでした。ご飯に梅干か味噌漬けで食べた。(小千谷市、女性、50代)
- ・防寒用ジャンパーをいただいたのですが、サイズが合わずに着られなかった(6人中5人が着られず)。(小千谷市、女性、50代)
- ・困ったといっは申し訳ないのですが、安否の電話、特に長電話は困ります。地震で家に入っていられないのを、電話がきて、元気でいるのを知らせなくてはと思いながら電話に出ている。その状況が相手にわからないので、揺れると柱につかまりながら我慢しました。今後自分はこのことに気を付けようと思いました。(長岡市、女性、60代)

第3章 情報伝達と行政の役割

地震後の被災生活にとって、情報が果たす役割はきわめて大きい。前章では、他の支援項目とあわせて、被災者に必要とされた情報とそれがどう満たされたか(満たされなかったか)について、時系列に沿ったかたちで取りあげた。ここでは、調査時点でふり返ってもらい、被災生活において「あてになった情報源」をあげてもらった。ついで、情報の送り手として大きなウエイトを占めるマスメディアについて、意見を求めた。さらに、情報の送り手という点も含めて支援の中心的な役割を期待された行政についても、意見や感想を自由に記入してもらった。マスコミと行政に関しては、自由回答の記入量が多かったので、できるだけ数多く紹介するようにしたい。

3-1 被災生活と情報伝達

あてになった情報源

地震後の生活において実際に役に立つ内容を伝えた情報源、あてにしていた情報源について、あらためて尋ねてみた(図表3-1)。地震被害や家族等の安否などの項目のそれぞれについて、行政の広報、口コミ、テレビ等の選択肢から、あてはまるものをすべてあげてもらっている。

その結果、地震による被害の様子や余震に関する情報については、7割を超える人がテレビをあげ、ラジオと新聞がそれに続いている。家族・親戚・知人の安否は、8割近くの人が(携帯)電話をあげる。電気・ガス・水道といったライフラインの復旧状況については、行政からの情報をもっとも多く、テレビ、ラジオ、口コミの順で続く。交通機関の復旧状況は、テレビが多く、ラジオと新聞が続く。生活情報については、炊き出しと救援物資の配布は口コミ・自治会・行政が多いが、開いている店・病院・銭湯などの情報やゴミの処理に関する情報では、それらに加えてテレビをあげる人も多い。

以上のことから、被害や余震に関してはマスメディアが、身近な生活情報については近隣の人間関係を通じた口コミや行政からの情報が重要な役割を果たしていたことが分かる。またテレビは、その速報性を活かして、交通機関の復旧状況やきめ細かな生活情報などの分野でも健闘していた。

マスコミへの意見

マスコミの報道や対応についての意見・感想を尋ねたところ、記入があったうちの3割が肯定的な評価だった(図表3-2)。具体的には、報道により力づけられた、安心できた、被災者同士の協力の様子などを見ることができてうれしかった、といった精神的支えになったことや、悲惨な状況が報道されることによって全国から義援金やボランティアが集まったという実利的な面、さらには広く詳細、一生懸命、迅速といった報道姿勢などがプラスに評価されている。ケーブルテレビやコミュニティFMなどのローカルメディアについては、ここでも「役だった」という評価がみられた。また、一過性に終わるのではなく、今後も継続的に取りあげていって欲しいという要望もみられた。

それに対して否定的な評価の回答は、肯定的評価の倍近くに達し、記入数の半数を超え

ている。その内容でとくに目立っているのは、特定の場所だけがくり返し取りあげられるなど、報道内容に偏りがあったというものである。また報道内容が作画的、つまり作り手の意図や演出にあう場面やコメントのみを伝えているという指摘も多い。被災者の立場で見ると、いずれも一部のみを切り取った報道となっており、被災の全体像が伝えられていないという不満が残った。さらに、取材の車やヘリコプターによる騒音被害や駐車場の占拠、被災者の心情に配慮しない非常識な質問、プライバシーに対する配慮のなさなど、取材マナーの悪さを指摘する声も多い。一言「大嫌い」という記入もみられた。

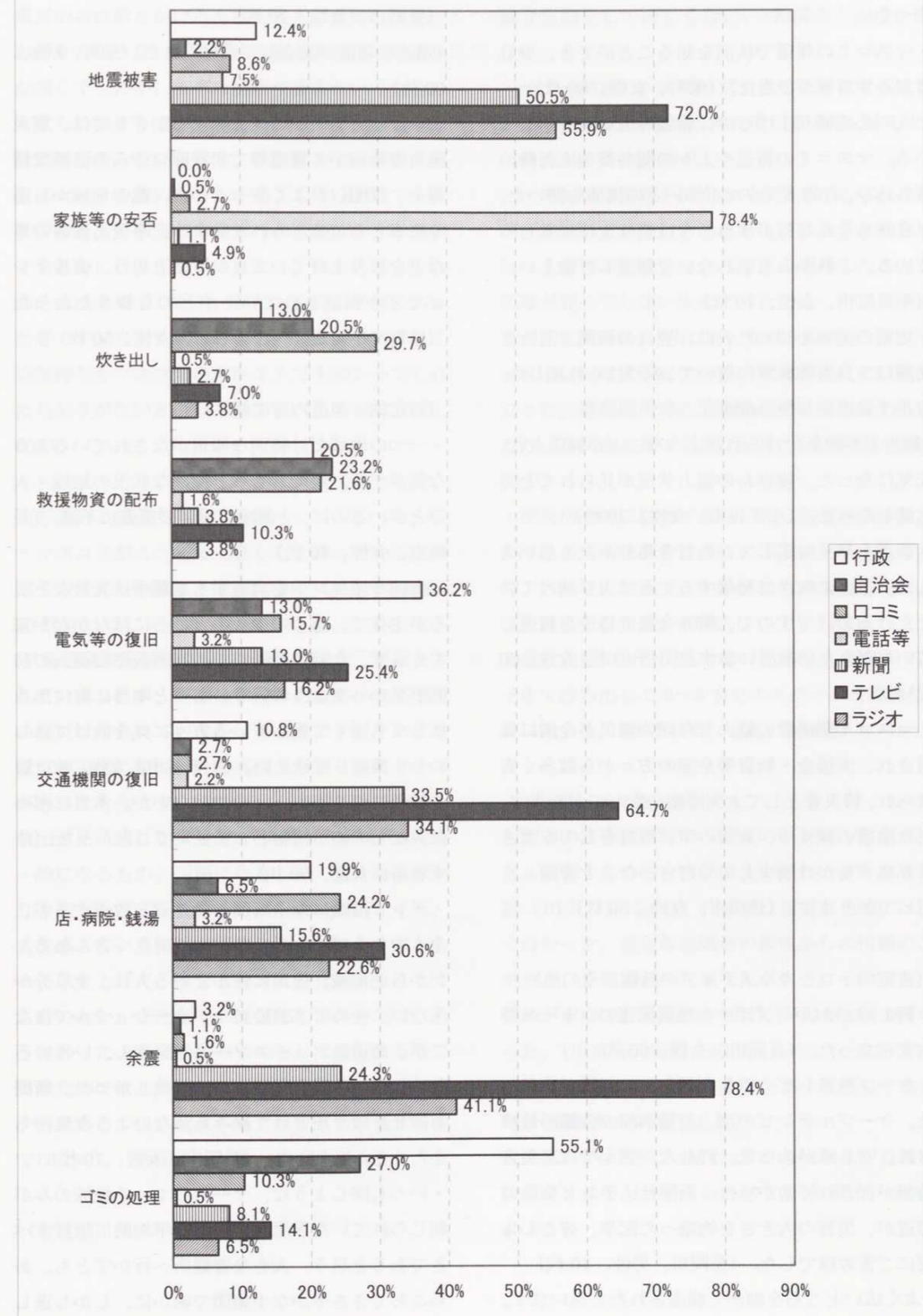
被災者にとって情報は命綱であり、マスコミの果たす役割は大きい。今回の地震被害に関するメディアの精力的な情報発信は、外部の人びとの関心を被災地に引きつける効果をもたら、被災者を元気づける役割も果たした。

しかし他方で、マスコミの報道に対して被災者に多くの不満がみられたことも事実である。もちろん、被災地の様子すべてを隈無く報道することなど不可能であり、どこかで報道されない部分が残るのは仕方のないことかも知れない。また阪神大震災の教訓もあって、地元テレビ局の間では、救援や被災者の行動を妨げないように取材活動が抑制されたとも聞く。とはいえ結果的に、(どこのメディアかは分からないが)被災者の生活や心情に配慮を欠いた取材・報道がみられた。震災で傷ついた人が、報道によってさらに傷つくことのないよう、マスコミ関係者には十分すぎるほどの配慮が求められる。

図表 3-2 マスコミの報道や対応についての意見・感想

順位	肯定的(25)	件数	順位	否定的(45)	件数
1	カづけられた・安心できた	5	1	報道内容に偏りがあった(特定の場所だけ)	21
2	見舞いや手助けが得られた	4	2	取材の車やヘリコプターが迷惑だった	8
3	広く詳細に報道していた	3	3	報道内容が作画的(作り手の意図・演出)	6
3	情報が役に立った	3	4	取材のマナーが悪い・非常識な質問	4
3	一生懸命だった	3	5	情報が不足(隅々まで伝えて欲しい)	3
6	地元のラジオ放送が役立った	2	6	被災者の心情をよく理解して欲しい	2
6	迅速な報道だった	2	7	誤報が気になった	1
8	テレビの情報がよかった	1	7	大嫌い	1

図表3-1 あてになった情報源



◇自由回答から——マスコミへの意見・感想——

〈肯定的：力づけられた・安心できた・支援に結びつく〉

・マスコミの報道で状況を知ることができ、少しは安心する事ができた。(栄町、女性、60代)

・人の心を盛り上げるのに報道の大切さを感じている。マスコミの報道や人々の関心が消えた時の落ち込み、心的トラウマが怖いとの講演を聞いた。私自身もそんな気がする。今は盛り上げてもらっている。これからも忘れないで報道して欲しい。(十日町市、女性、70代)

・地震の全容を知ったのは、翌日の新聞でした。新聞は1日も休まずに届いて、力づけられました。(小千谷市、女性、60代)

・被災者が勇気付けられるようなことが報道され、元気になった。皆さんの協力状況が見られてとても嬉しかった。(小千谷市、女性、70代)

・報道も早く対応していただきありがたく思いました。全国に向けて発信することにより助けていただけるわけですので、時々今後の様子を報道していただきたいと思います。(小千谷市、女性、60代)

・マスコミ関係者の協力で今回の震災が全国に報道され、支援金・物資等全国の方々から数多く寄せられ、被災者として大変感謝いたしております。また余震の続く中、大雪の中、取材をしてくださり私に声をかけ励ましてくださったことを嬉しく思っております。(長岡市、女性、50代)

〈肯定的：ローカルメディアの活躍、その他〉

・FM ながおかのラジオの地震関連のニュースが大変役立った。(長岡市、女性、60代)

・ケーブルテレビ、FM ながおかの報道が良かった。ケーブルテレビでは、対策本部の会議が放映され、安心感があった。FM ながおかでは、災害情報が流されて助かった。新聞社、テレビ会社の報道が、災害の大きさを物語った記事。皆さん大変にご苦労様でした。(長岡市、男性、70代)

・よく広いところを細かく報道されたと思います。(長岡市、女性、70代)

・地震情報が明細に報じられた事が大変良かった。(長岡市、女性、70代)

・迅速な報道が安心して受け取れた。(栄町、女性、60代)

・少なくとも、ここで見聞するかぎりでは、震災後もきめ細かく報道等で相談窓口やらの必要な情報を、NHK がよくやっていた。他の地域から遠くの事として忘れられないよう、事後も雪害の事などを取り上げていて良かったと思う。直後テレビでどう報道されていたかとも知りたかった(停電で不可能)。(小千谷市、女性、50代)

〈否定的：報道内容に偏り〉

・一つの地域だけ特別な報道がなされているような気がする。他でももっと深刻な状況の地域・人びとがいるのに、と思う。扱いの落差に不満。(長岡市、女性、40代)

・慰問やイベントを実施する避難所は大きなところが主体で、遠くの少数のところにはなかなか来てくれない。今回は長岡市での有名人や芸能人の訪問が多かったように思う。もっと本当に町に出るにしても遠くて困っている方々に気を向けてほしいし、報道して欲しい。(小千谷市、女性、60代)

・報道に偏りがあったのではないか。本当に困った人たちの姿が情報として見えてこなかった。(小千谷市、女性、50代)

・テレビは絵になる場面を繰り返し放送するが、全く取り上げてもらえない地域がたくさんある。だから他地域、他県に住んでいる人は、全く分からない。せめて NHK はセンセーショナルではないが、地道にニュースソースを発掘し、いろいろな被災地の状況を電波にのせて欲しかった。新聞も同じ。放り出されて顧みられないような気持ちをたくさん味わった。(長岡市、女性、70代)

・いつも同じような、マークしている地域のみが報じられていたと思う。もっと平均的に取材すべきであると思う。大きな避難所へ行かずとも、あちこちでささやかな小集団で密かに、しかし遅く避難し続けていた市民が多くいたのだから。現

場主義でない。きれいごとを美談として報じすぎる。(小千谷市、女性、60代)

・総合体育館の避難所にはいつもテレビ局がいて、東京からは歌とかいろんな有名人が見舞いに来て、お祭りのような、そこだけ地震があったかのような感じでしたが、当市は農家や商店やいろいろな人たちの集まりです。私たちの住んでいる地域は避難場所すらないのです。夜は車の中、昼間は路上にシートを敷いたりして過ごしていたのです。支援物資も町内会で市役所へわざわざばかりの品物ももらいに行き来して来ていました。山古志村もそれはそれは大変でしたが、私たちも同じ地震にあった者です。自宅も壊れ、苦しいのは同じです。この気持ちをマスコミの方が1人でもわかってくれたらありがたいと祈っています。(小千谷市、女性、60代)

〈否定的：報道内容が作爲的〉

・マスコミがこうあって欲しいと思っている人の様子や意見しか取り上げられない。(見附市、女性、50代)

・“被災地で頑張る高校生ボランティア”が紹介されていましたが、実際は学校のある平日は高校生の受付は行われていなかったようです(テレビを見て被災地に駆け付けた高校生が断られたケースがあったそうです)。作り手(送り手)側の意図と演出が見え隠れしました。(長岡市、女性、40代)

・絵になるもの、話題になるもの、驚く映像ばかりを取り上げず、被災者の実生活から出てくる、また感じている様々な問題や困っていることをもっと取り上げて、次なる被災に役立つようにしてもらいたい。また長期の支援対応があるのに、もう終わったように過去のものとして扱うようなことはやめて欲しい。どんな時・場所でもプライバシーはあるのに、配慮が足りなさすぎる(見せものではない)。(長岡市、女性、40代)

〈否定的：マナーの悪さ〉

・当日からのヘリコプター、うるさすぎる。(十日町市、女性、30代)

・頭の中がパニック状態になっているのに、非常識な質問をしてほしくない。(柏崎市、女性、60代)

・マナーが悪い。スクープを撮ることに必死になり、本来の報道機能から外れていると思いました。(長岡市、男性、20代)

・マスコミは情報を伝えるのが使命かもしれないが、地域の人がやっと通れるようになった道をマスコミの車がたくさん入ってきて迷惑したことや、工事が遅れてしまい大変だったと近くの工事関係者が話していた。(川口町、女性、50代)

・NHK の報道取材チームの横暴な態度には腹が立った。避難場所等の邪魔な場所に車を止め放したり、目に余る様子を目にした。(長岡市、男性、60代)

・市役所の前に駐車できないほど報道車が停めてあり、市民が相談やけが人の保護のために行った時、入れない状態で、いかなるものかと思った。(十日町市、女性、40代)

・混乱状態の市役所駐車場の一角を、大型車で椅子まで持ち出して2~3台分のスペースを確保し、目に余った。(小千谷市、女性、50代)

〈否定的：その他〉

・報道の良否には町の(行政の)対応や体制が大きく影響するので一口には言いがたいが、最も初期(10月23~24日)に必要な報道が当地には全くなかった。東京等遠隔地の親戚からの情報の方が早く、正確であった様な気がする。その後も大都市が中心で、ようやく NHK が入った時は遅かった。(川口町、男性、60代)

・被災している人たちの心情をよく理解して欲しい。(見附市、女性、50代)

・芸能人が大勢、入れ代わり立ち代わりに見舞いに来てくれるが、どうかと思う。(長岡市、女性、40代)

3-2 行政への意見と感想

行政の対応や支援についても、意見や感想を自由に記入してもらった(図表3-3)。その結果、肯定的な評価の回答としては、行政の人も被災者なのによく対応してくれた、という感謝を述べたものももっとも多かった。被災者としての連帯感が底流にあるのだろう。対応が親切、早いなどの評価がそれに続いている。

とはいえ、行政に対してもマイナスの評価が記入数全体の8割近くにみられた。被災者が求めている情報が行き渡らなかった点の指摘がもっとも多い。住民に対して正確な情報を伝達するための、広報や連絡体制の整備が求められている。ついで地域によって、あるいは避難所にいるかどうかで支援に不平等があったという問題がつつく。こちらもすでにみたように、双方向的な情報のやりとりを整備することが急務だろう。

さらに、連絡網やハザードマップの作成など日ごろの地震対策が不十分だったという指摘がみられる。この点では、役に立つマニュアルの準備も求められている。日ごろの準備が不十分だったために、対応の遅さをあげる声も多い。震災にかかわる手続きが複雑で説明も不十分といった問題や、家屋被害の評価、義援金の分配などに関する制度面の改善も切実に求められている。

ただ、みずからも被災者であった自治体職員が自分のことは後回しにして震災への対応に追われ、過労やストレスが蓄積していたとも聞く。実際に過労が原因となった職員の交通事故もあった。自治体が災害に備えた対策を整備することは今後いっそう必要になるだろうが、少なくとも災害直後は行政に多くを期待することはむずかしい。広域合併が進み、いっそうのスリム化・効率化が行政に求められているなかで、行政の対応にも限界があることは直視すべきであろう。行政を補う地域の社会関係(コミュニティ)が必要とされるゆえんである。

図表 3-3 行政の対応や支援についての意見・感想

順位	肯定的(34)	件数	順位	否定的(82)	件数
1	行政の人も被災者なのによく対応	18	1	情報がない・不正確・一部にしか伝わらず	21
2	対応が親切だった	4	2	支援の不平等(地域差・避難所にいるかどうか)	18
3	家の被害調査が早くてよかった	2	3	日頃の地震対策が不十分(連絡網・地図)	10
3	対応が早かった	2	4	対応が遅い・もっときめ細かな対応を	8
3	まあまあよい	2	5	家屋被害の評価への不満(調査が不十分)	6
6	インターネットが便利だった	1	5	義援金への不満(一部損壊の保障が少ない)	6
6	物資等とても助かった	1	5	支援物資に関する不満(偏り・ムダがある)	6
6	広報車がよかった	1	5	震災にかかわる手続き等への不満	6

◇自由回答から——行政への意見・感想——

- 〈肯定的：(職員も被災者なのに) よく対応〉
- ・行政の人も被災者であり、大変な中、住民のために一生懸命対応していたと思う。(長岡市、女性、50代)
 - ・市役所の皆さん、体調崩されませんように。(十日町市、女性、30代)
 - ・1月24日の話ですが、地震から1月24日まで、正月1日と2日休んだばかりと役場の女性が言っていました。同じ被災された方なのに、役場やJAの方は本当に大変でした。ご苦労様。(川口町、女性、60代)
 - ・非常に良くやっていただいたと感謝しています。役所の職員の中には、何日も泊り込みで頑張ってくれたと聞いて、頭が下がります。(小千谷市、女性、80代)
 - ・行政の方々も初めて経験されたことなのに、精一杯やっていたらと感じた(毎朝の市役所での市職員の幹部の会議の様子が、ケーブルテレビで放送されたり、土日のごみ収集は依頼された業者でなく、市役所の方がされたり等を見聞きして)。(長岡市、女性、60代)
- 〈肯定的：その他〉
- ・当時の役所の方々の働きは本当にありがたかったです。その後電話で問い合わせをした時も親切な対応だったので、おおむね良かったと思う。(長岡市、女性、40代)
 - ・インターネットで市の情報を詳しく見られて良かった。広報車が回り(電気、ガス、水道など)、わかったこともあった。簡単でしたが家の被害の調査をしに来てくれた。(長岡市、女性、60代)
 - ・建物の被害状況について、早めの視察があったことはよかったです。(長岡市、女性、70代)
 - ・1人で困ったことばかりでしたが、行政の方々から相談に乗っていただき、ありがたかったです。(十日町市、女性、70代)
 - ・家の判定など、やさしく、よく状況を見て判定してくださった。支援についての説明も丁寧で親

- 切だった。(長岡市、女性、70代)
- ・1人暮らしのため電話で安否の確認を受けた。ささいなことではあるが嬉しかった。(栄町、女性、60代)
 - ・当日の夜の毛布の配布、炊き出しなど、早い対応であった。(塩沢町、女性、60代)
- 〈否定的：情報の問題〉
- ・テレビ情報と実態は違っていた。特にごみ収集に関して。(長岡市、男性、60代)
 - ・地震後は本当に孤立した状態になってしまい、車も使えない、なんの確かな情報も入ってこないの中での生活は大変でした。災害が起こった直後が一番大変なので、そういう時のために、普段から何らかの対応、情報網を把握していただきたいです。(川口町、女性、30代)
 - ・情報過多にならないよう、「風評」に惑わされないように、正確な「箇条書き」で発信してほしい。救援物資に偏りがあり、プーイングがあった。(長岡市、男性、70代)
 - ・市民への広報に力を入れて欲しかった。どこでどんな支援が受けられるのか、大きな避難所にいないと、知る事ができなかった。行事や催し物等の中止や変更を問い合わせたら、インターネットのホームページでお知らせしているとの答えでした。老人世帯では、無縁のものです。(小千谷市、女性、60代)
 - ・避難所が明確でなかった。公共施設で水の配布があると口コミで聞くが、行くと無く、住民サービスの不公平が多かった。町内会が10月24日夕方から機能し始め、3日目くらいから、水、食料が届き始めた。とにかく情報が少なく、不安な日々でした。町内のシステムが機能し始めて、ようやく落ち着きました。(小千谷市、女性、60代)
 - ・広報車等で現状や、住民に望む事なども広報して欲しい。水は十分とか、ガスは使ってよい等。(女性、50代)
 - ・市政事務嘱託員が依頼されているのに、市の伝達が水(水道水)以外ほとんど情報が伝わらなか

った。(十日町市、女性、60代)

・地震情報を住民に知らせる、避難誘導の2つが全くできていなかった。広報車を出す、役員(町内会)連絡網などを使って実施すべきだった。(六日町、男性、70代)

〈否定的：支援の不平等〉

・指定されていない避難所には何ももらえなかった。家の車庫に4世帯がいたのですが、何も支援がなく、行政にこの話をしたが取り上げてもらえなかった。(十日町市、女性、70代)

・避難所へ行っている人には食事、毛布などの支給があったが、車に避難している人にはなかった。そういう人たちの調査をして対処してほしい。(長岡市、女性、70代)

・本当に災害の大きいところにもっと早く支援に入ってほしかった。当地よりも軽い方に早々に支援が行っていたことが後で分かり、いい気持ちはしませんでした。とても惨めな思いをしていました。ライフラインの復旧が遅くて困ったのです。

(長岡市、女性、60代)

・全体から見て、被害の少ない地区には行政の対応や支援はゼロ。市の調査とやらで来た人に家に入ってみたいと言っても、「問診」だけで非常に不満を感じさせられた。最初の地震より日を追って被害が大きくなっていくので、よく調査してほしい。被害が大きくても小さくても簡単に一部破損に片付けなくて欲しい。(長岡市、女性、70代)

・その後の余震が長く続き、徐々に被害が大きくなってきておりますが、本震で被災地とされたところへは過剰な支援があったと聞きました。後から被害が大きくなったところへの支援は何もありませんでした。行政の対応を不公平に思います。

(十日町市、女性、60代)

・自主的な避難で、行政からの指示や連絡が全くなかった。車の中にいたら何も分からない状態で、支援物資は一部へしか行かなかったと思う。(十日町市、女性、40代)

・救援物資は原則として、貰いに行かなければならないため、本当に必要としていた、高齢者や1

人世帯の車のない方などに行き渡らず、貰いにいけない人は何回もたくさん貰ったという。(見附市、女性、60代)

・本当に困っている人を助けてあげて欲しい。例外だってあるはずだ。支援について市役所の窓口で尋ねたところ、知人に聞いたこととは違う回答があった。出る人によって違い、情報が錯綜しているようだという話も多く聞かれた。神戸の時に比べ、政府の対応、見方が冷たいように感じる。田舎、地方だからですか？(長岡市、女性、30代)

〈否定的：日ごろの地震対策〉

・ハザードマップの作成をお願いしたい。(栄町、女性、60代)

・災害時のマニュアルがあったのだと思うが、その時にはあまり機能していなかったのではないかと。できるだけ小さな単位(班単位くらいで)被災の状況をつかんで、もっとキメ細かな対応をしてほしかった。一律配布みたいなものが目に付いた。

(見附市、女性、50代)

・地震情報等、事細かに震度は報じられていましたが、当地方は全く画面に報じられず、心配と不安がありました。隣町と隣町の真ん中になって、全然当町の情報は出ず、自分で隣町の情報を見て想像して判断しており、不安に思いました。こういう時くらい、全町同じく発表してもらいたいと強く感じました。地震計を全町に備えてもらいたいと思います。(塩沢町、女性、60代)

・緊急時のマニュアルが欲しい。たとえば、避難所が開設された場合の対応マニュアル。(見附市、女性、50代)

・住民のみならず行政も地震に対しての備えは不十分であった。地域防災計画の見直しをすること、地域に合った内容にすること、物資の応援協定をする市町村より、自分たちの地域の自主防衛組織を早急に設立するべきである。(十日町市、女性、60代)

・当日は、屋内に入らないようにとの放送のみがあった。食料、毛布などを備蓄しておいて、配布してほしい。(小出町、女性、50代)

・非常時の際の連絡網を充実させてもらいたい。

(川口町、女性、50代)

〈否定的：対応の遅さ・対応の悪さ〉

・行政の対応が大変に遅い。とんでもない防災無線の放送に大変混乱した。(川口町、女性、60代)

・川口町の行政としての対応は最低でした。発生時から3日間は100%自活。緊急用備蓄の毛布を要求しましたがだめでした。避難所はどこかと聞くと、自分でなんとかしてくれとのこと。ただし家の中には入るなどという。頭上にヘリは終日飛んでいるのに、救援物資は何も来ませんでした。子供のオムツ等は買ってくるから金をくれという具合でした。(川口町、女性、50代)

・町の被害が少ないのか、被害届を提出の回覧板が回っただけ。一人老人世帯には何も言って来ない。(栄町、女性、70代)

・ボランティアセンターの体制が不十分(人数、経験、知識)な為に、多くのボランティアの皆さんに不満を与えたと思う。地域全体の主要道路の状況がリアルタイムに把握されておらず、情報が古いが多かった。(川口町、男性、60代)

・高齢者世帯や1人暮らし、障害者の方々に、「大丈夫でしたか？」の一言でよいから、声がけをして欲しかった。(六日町、女性、60代)

・行政のふがいなさを感じた事が残念でした。他市町村に比べ、特にダメだと思うことが多く、上下のつながりの不備だと感じた。(小千谷市、女性、60代)

・ボランティアをする申し込みの電話をしたが、対応が不親切であった。(長岡市、女性、60代)

〈否定的：家屋被害の評価・義援金〉

・義援金200万円を頂きました。これは大変役に立ちました。まだそのまま持っていますが、家を建てる足しにするつもりです。その他は国と市で最高400万円あるそうです。これは金額の半分の役にも立ちません。自分の一番ほしい物が買えないからです。阪神の事が前例となっていると思いますが、必要のないものは買わず、買える物は限定されています。しかし、災害者となって、私の考えると、本当に必要なものはあの制限

された品目の中にはありません。それでも金ももらったほうが得だということで、その中から探して買い物はしています。買い物を制限していくらお金が浮くか知りませんが、それははじめから差し引いても、自由に使えるお金が本当に被災者を助けられると思います。極端な話、食べ物は控えても仏壇を買いたいという人がいます。心の癒しに温泉旅行に行きたい人もあると思います。これらを義援金は拒否するのです。人を本当に助けるといふ事は、その人の一番やりたいことを一度は叶えさせてやることではないか。私は皆様や国から頂いた金は、自分が汗して働いたお金以上に大切に考えています。使った金が正常かどうかチェックする行政の人々の手間も大変だと思います。義援金を受ける側の人は、もらうものについて物を言いにいく、このような声は上がらないかもしれませんが。わたしはあえて言いたい。配分委員会の人の意見を聞きたい。この度私の家は全壊と認定されましたが、面倒をみれば、その崩れた壁の下から掘り出して使えるものは多々あります。とても100万円もそうした物を買うのは勿体ないのです。一番ほしいものはひとそれぞれ違っています。米であったり、股引であったり、自動車の故障を直して動くようにすることだったり。これらまとめて全てに対応できるのが金です。災害者の金の使い道を信じてください。かさねて配分委員会の反論を待ちたい。(記入なし)

・被災家屋のうち一部損壊が85%だそうだが、「一部損壊」といっても、損害状況はまさにピンからキリまでである。しかし一律5万円の支援金が支給された。壁にピーっとひびが入った家も、外壁内壁、床、コンクリート床等々の被害が相当であっても、同じく「一部損壊」。あまりにも実情に合わないのではないかと。またそれらの情報も少なく、この惨状を自力回復しなければならないかと思うと、暗澹たる思いです。(長岡市、女性、70代)

・私の住む所は、小千谷市の中心部よりややはずれであったということで、家屋の損傷がいったいどの程度なのか、皆目わからない。行政は「そちらは農村地だからしない」ということで、家屋調査済みの、緑、黄等の調査用紙を貼らなかった。

仕方がないので、個人個人が大工を頼んで見てもらった。あまりにも一市民とに不平等があると思う。市が何を考えていたのか、声が聞こえてこなかったことが、大きな不満である。義援金の分配についても、県からは一部損壊該当金をいただいたが、当市の行政担当者の方針で、一部損壊以下の程度の住民には1円たりとも配分しない方針と聞いた。程度の強弱はあれ、義援金の文字から考えよと、もっと平等にと考える。この差に大いに不満が残る。近辺にもこの意見が多い。(小千谷市、女性、60代)

・罹災証明の認定が、大変地域格差があると思った。(小千谷市、女性、50代)

・小千谷市は罹災証明書の発行について、市職員が見ただけで非常に厳しい判定で不満である。長岡や川口より厳しい。資格のある人に調査に来てもらいたかった。支援物資を市民全員に分けてくれないで保管しておいて、最近になってバザーでお金を取って売ってそのお金を義援金にするとか。義援金は家屋が半壊以上の人にしか支給されないのに。(小千谷市、女性、60代)

〈否定的：その他〉

・こんな事があってはならないが、はじめての災害なので皆とまどい、町内の役員もみんなどこにいるのか分からない様子で、家に一度家族の様子を見に来たくらいであった。もっと避難場所、連絡などを密にしてほしい。(記入なし)

・書類のことで市役所に何度も通いましたが、もう少し年寄り(女)にわかりやすく説明して欲しかった。車に乗らないので、歩くなりバスなりで大変でした。たくさんの方の相手でも市の方も大変だったでしょう。(十日町市、女性、70代)

・せっかく救援物資が届いていても、それを配布する人員が不足で、隔々まで行きわたらなかつた(町内会長さんなど、自らすすんで本部などに行った人たちがそれなりの物をもたらってきて、町内の人に配布していたが、そうでない町内の方は、連絡を待ってから行っても物が少なかった)。(小千谷市、女性、60代)

・道路の復旧(仮舗装)や支援物資の配布等、対

応は早かった方だと思う。しかし、地震災害に対する法がないため、困っている人が多い。自営業の人で、家が壊れ、同時に仕事ができなくなった人たちや、地震で職を失った人たちへの支援が欲しい。(長岡市、女性、60代)

・欲を言えばきりがないことだと思いますが、私どもは老人で仕事もなく時間がありますが、手続きが色々あって、1つの手続きに1日かかるといったようなことがありました。生活のことも住宅のことも皆一緒になってしまい、役所も大変だったと思います。一生懸命やったださっていると思います。応急修理にも、時間が短かったので、職人さんが来てくれるとか援助していただくことはありがたいのですが、内容把握が十分できずに困っています。1人1人が十分わかるようにとは難しいでしょう。(長岡市、女性、60代)

・生活再建支援制度の説明がわかりにくい。また、支援制度そのもの(内容)に大いに問題あり。(長岡市、男性、60代)

・いくら被害等が少なくても、1軒1軒どうでしたか?と一言くらい声かけしてもらいたかった(行政で)。後日、あなたの家の被害はなどと紙をまわすのではなく、少し長い期間がかかっても、地域ごとにこれくらいはやって欲しいと思います(担当の区の役員等を通じてよいと思う)。(六日町、女性、60代)

・市の責任者、議員の活動が見えなかった。どこで何がどのように機能しているのか、町内の一部の人の動きに従うのみで、いろいろなサービスが末端にまで平等に伝わっていなかった。一番必要な弱者に対する親切味が欠けていたと思う。(小千谷市、女性、50代)

・物資は余ったり時期を逸したり、無駄が多いと思う。最近(2月)になって、また救援物資をもらった(毛布、水、乾パンなど)。もったいないと思う。(長岡市、女性、40代)

第4章 人間関係とコミュニティ

今回の地震のような広域的な被害が突発的に生じる災害では、行政が即座に十分な支援をおこなうことは不可能だろうし、むしろ個人の力で困難を克服することも難しい。そんな場合には、個人と行政の間にある地域的なつながり、コミュニティが一定の役割を果たすことが必要となってくる。本調査では、生活の手助けや精神的な支え、隣近所どうしの助け合いの様子、ボランティア活動などについて尋ね、被災生活を支える人間関係について明らかにしようとした。

4-1 地震後の生活と人間関係

生活の手助け

2章でみたように、人的支援(生活の手助け)のニーズは、時間の経過とともに変化していた。ここでは地震後の生活全体について、手助けしてくれた人を選択肢から3番目まで選んでもらい、手助けの内容についても自由に記入してもらった。1番目にあげられたものとしては、家族が飛び抜けて多く7割を超え、ついで親戚、隣近所の順である。2番目は親戚、隣近所、友人・知人の順で、3番目は隣近所と友人・知人が同数、ついで親戚だった(図表4-1)。

手助けの内容としては、家族は家の後片づけと精神的な支え、が上位にくる(図表4-2)。「足の踏み場もないほど」の家の中を家族で片づけた。「家族がいたから頑張れた」。親戚は家の後片づけと物資・食料の支援が中心だった。一時的な避難場所の提供、という役割も果たしている。

隣近所の人びとが果たした役割は、物資・食料の支援と情報の提供、一緒に過ごすこと、食事をともにする、といった内容である。「お互いが被災者なので、共通の悩みを打ち明けることができた」。ただ一緒にいるだけで安心できたということも、多くの人が記している。友人・知人に関しては物資・食料の支援と声かけ・励ましが上位にあげられている。たとえ遠くにいても、メールや電話でつながっているということが、支えになった。

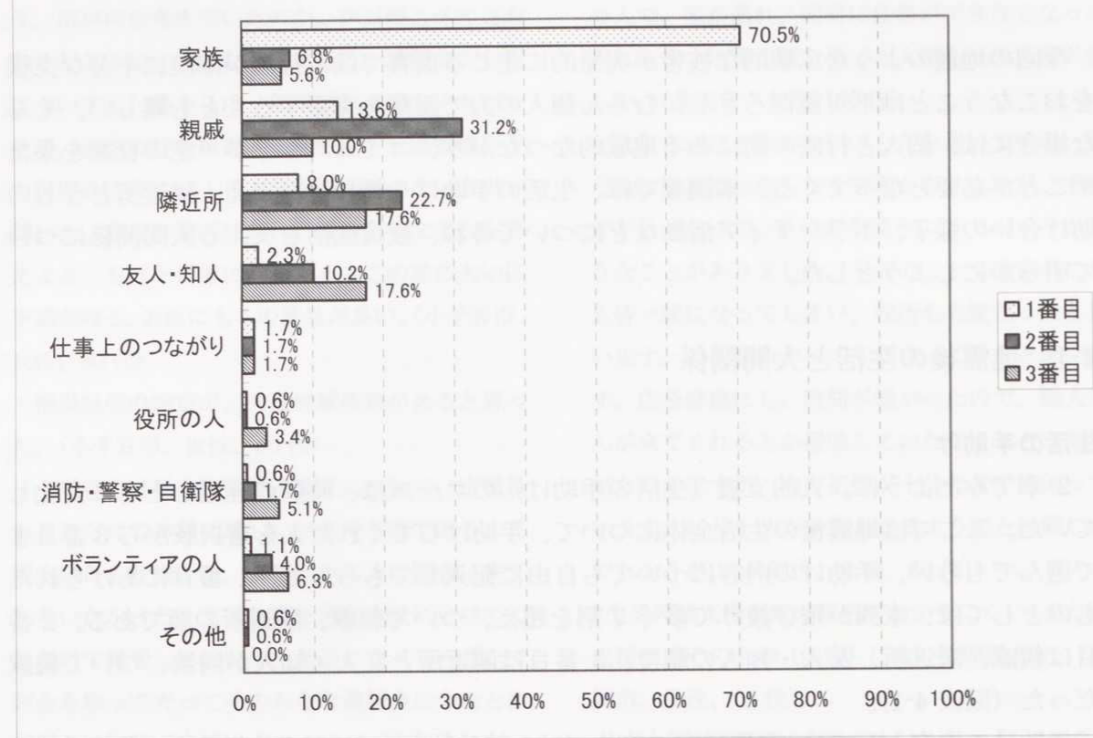
これらの人びとがそれぞれの役割をもって、被災生活の手助けをおこなったのである。

精神的な支え

精神的な支えになった人についても、順に3番目まであげてもらった。ここでも1番目にあげられているのは圧倒的に家族である(9割弱)。隣近所と親戚がそれに続くが、ごくわずかにすぎない。こちらも2番目は親戚、隣近所、友人・知人の順で、3番目は友人・知人、隣近所、親戚の順になった(図表4-3)。

生活の手助けについても精神的な支えについても、すでにあつたなじみの人間関係が上位を占め、仕事の関係や役所、自衛隊、ボランティアなどの機能的なあるいは新たな関係をあげる人はひじょうに少ないという結果になっている。ただし、「仕事上のつながり」が少なかったことには、比較的高齢の女性が多いという対象者の特徴も影響していると考えられる。

図表4-1 生活の手助け

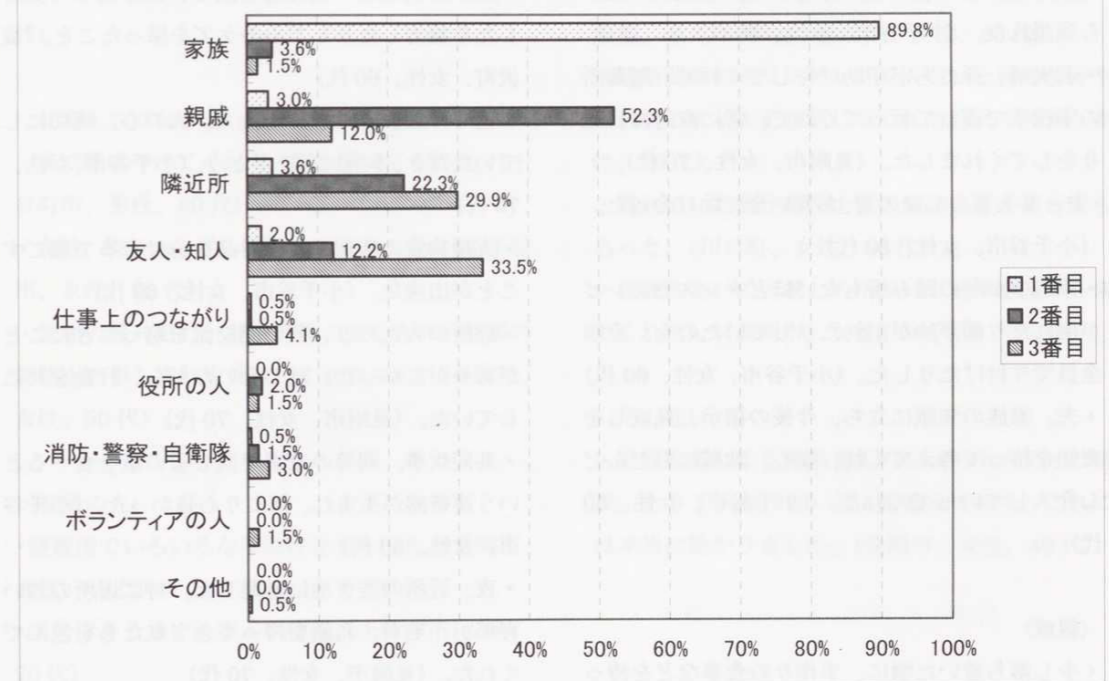


図表 4-2 地震後の生活の手助け

	1 番目 (142)		2 番目 (112)		3 番目 (88)	
	順位	内容	件数	順位	内容	件数
家族	1	後片づけ	48	1	後片づけ	4
	2	精神的支え	18	2	精神的支え	2
	3	生活全般	13	2	宿泊・避難	2
親戚	1	後片づけ	14	1	後片づけ	11
	2	物資・食料の支援	5	1	物資・食料の支援	11
	3	宿泊・避難	4	3	宿泊・避難	7
隣近所	1	一緒に過ごす	5	1	物資・食料の支援	9
	2	物資・食料の支援	2	2	情報の提供	8
	2	食事	2	2	食事	8
友人・知人	1	買い物	1	1	物資・食料の支援	4
	1	声かけ	1	2	励まし	2
	1	宿泊・避難	1	3	精神的支え	1
				1	物資・食料の支援	11
				2	声かけ・励まし	5
				3	精神的支え	4

仕事・商売	1	後片づけ	1	1	食料の支援	2	1	家の修理	1
	1	食事	1				1	物資・食料の支援	1
役所の人	1	ボランティア情報	1				1	物資の手配・配布	1
							1	避難所での対応	1
消防・警察・自衛隊	1	炊き出し	1	1	炊き出し	1	1	炊き出し	3
				1	水の運搬	1	2	風呂	1
ボランティア	1	後片づけ	1	1	後片づけ	4	1	後片づけ	3
	1	子どもの相手	1	2	農作業	1	2	引っ越しの手伝い	2

図表4-3 精神的な支え



◇自由回答から——生活の手助け——

〈家族〉

- ・子どもが新潟市より毎夜食料を運んでくれた。4時間かけて、回り道し、田んぼ道などを通して4日間通ってくれた。当日は11時30分頃に着き、車を出したり布団を出したりしてくれて助かった。(長岡市、女性、60代)
- ・家具類、ガラス(サッシ)、食品類、崩れた壁などの片付けと会話(互いに励ましあう言葉)。(小千谷市、女性、60代)
- ・割れた食器、飛び出した小物等の整理。食事作り。車でなければ行けない所への買い物。銭湯への往復。(長岡市、女性、60代)
- ・力を合わせて後片付け等をした。家族がいたから頑張れた。(小千谷市、女性、60代)
- ・若夫婦、孫たちが手助けをしてくれて、避難所の学校まで連れて行って来て、常に身近に目配りをしてくれました。(見附市、女性、70代)
- ・夫と2人暮らしなので、お互い全て助け合った。(小千谷市、女性、50代)
- ・家の中が足の踏み場もないほどダンスやテレビが倒れたり瀬戸物が割れたりしていたのを、家族全員で片付けたりした。(小千谷市、女性、60代)
- ・夫。家族の先頭に立ち、今後の指示、見直しを責任を持って考えてくれ、安心。地域にもどんどん介入していつてくれた。(小千谷市、女性、50代)

〈親戚〉

- ・少し落ち着いた頃に、手作りの食事などを持って来てくれた。また家の片付けを手伝ってもらった。(長岡市、女性、60代)
- ・実家の両親が、私と子ども2人を引き取ってくれた。その時にこちらの生活に必要な物を持ってきてくれた。(川口町、女性、30代)
- ・お年寄り(ペットも含む)を一時預かってもらったこと。(長岡市、女性、50代)
- ・避難させていただいて、風呂、洗濯、食事とお世話になった。(小千谷市、女性、50代)
- ・電話での励ましや、支援物資の送付。緊急物資

を持って見舞いに来てくれ、孫たちを預かってくれていた。(小千谷市、女性、60代)

・食器棚倒壊で、ガラスの破片や瀬戸物の片付けに手伝っていただき助かりました。仏壇の飾りが飛び出し、線香立ての灰が散乱し大変でした。(六日町、女性、60代)

〈隣近所〉

- ・近所の人たちとお互い情報を分かち合って、周りの事情など、お互い助け合ってその日その日を過ごしました。近所の人と顔を合わせる事も助けになりました。(長岡市、女性、60代)
- ・周りの人たちの情報等を話し、聞きあって安心したり協力したりして心のケアを保ったこと。(塩沢町、女性、60代)
- ・遠くの親戚より近くの他人。人の心。親切にしてください、本当にありがとうございます。(小千谷市、女性、70代)

・支援物資の情報や、食料品を分け合って過ごすことが出来た。(小千谷市、女性、60代)

・近所の人たちと、長い間交流を培ってきたことがありがたかった。話し合いながら、行動を共にしていた。(見附市、女性、70代)

・共同炊事。同等の立場で同じ釜の飯を食べるという連帯感が生まれ、何より心強かった。(小千谷市、女性、50代)

・夜、近所の空き地に避難した。特に近所の若い青年が、毛布、布団を持ってきて私たちを包んでくれた。(見附市、女性、70代)

・やさしい心遣い、助け合い。お互いが被災者なので、共通の悩みを打ち明けることができた。(長岡市、女性、40代)

〈友人・知人〉

- ・訪問して下さり、励ましと支援物資を届けてくれた。(小千谷市、女性、60代)
- ・市内での被害の少なかった地域の友人宅の風呂に入れてもらったこと。(長岡市、女性、60代)
- ・知人の大工さんが、色々な職人を連れてきて、

解体寸前の家を修理に来てくれた。始めてから、戸が開閉できたり玄関の鍵が閉まってきたり、傾いた車庫が立ち直ったりすることで日に日に生活に元気が出ました。屋根に始まり家中直してもらったようです。それでも傾いた住宅は元からは直りませんが。(長岡市、女性、60代)

・ご飯を何回も運んでもらったり、洗濯してもらったり、風呂にも入らせてもらった。(長岡市、女性、40代)

・情報交換、励ましのメールが嬉しかった。(長岡市、女性、40代)

・遠方から万難を排して食料援助、生活物資等持って駆け付けてくれた。見舞い電話もたくさんいただき、みんなが応援、見守ってくれているというだけで勇気づけられた。(小千谷市、女性、50代)

〈仕事上のつながり〉

・車で駆けつけてくれて、餅を届けてくれた。(十日町市、男性、60代)

・食料、飲料水を送っていただきました。(小千谷市、女性、70代)

・家屋の後片付け、昼、夕食の差し入れ。仕事の勤務上の申し入れを受けてくれたこと。(長岡市、女性、50代)

〈役所の人〉

・避難所でいろいろな手助けをもらった。(長岡市、女性、40代)

・手助けしてくれる人の情報。(十日町市、女性、70代)

・町内の人たちが欲しいもの等の手配。(小千谷市、女性、70代)

〈消防・警察・自衛隊〉

・色々な面でお世話になり、感謝の気持ちでいっぱい。(小千谷市、女性、50代)

・自衛隊の炊き出し。真心のこもった料理には心から感謝しています。(川口町、女性、50代)

・姿が見えるだけで安心できた!!(小千谷市、女性、70代)

・食事(炊き出しでの温かい食事は、本当に身も心も温まりました)。(小千谷市、女性、50代)

〈ボランティアの人〉

・人手を要する(力の要る)片付け。特に本棚の整理、家具の移動。(長岡市、女性、60代)

・建築関係のボランティアの人が、土蔵のサオや風呂場のタイルを修理してくれた。(十日町市、女性、70代)

・遅れていた農作業や土嚢の袋詰めを手伝ってもらった。(川口町、女性、50代)

・仮設住宅への引越しの手伝い(日本全国から来てくれた)。(長岡市、女性、50代)

〈その他〉

・介護施設による痴呆老人のショートステイの延長。もう1人動けない老人を抱えており、これには本当に助かりました。(長岡市、女性、40代)



4-2 ボランティア活動のやりとり

ボランティアの手助け

新潟県内外から被災地に駆けつけたボランティアについても、いくつかの項目で尋ねた。まず、ボランティアに手伝ってもらったかどうかという問いには、2割弱の人が手助けを受けたと答えている(図表4-4)。これらの人びとに、手伝ってもらった内容と感想も記入してもらった(図表4-5)。内容では、家の後片づけや整理、家具の移動・搬出、家屋・車庫等の補修といった家の復旧にかかわる事項が上位を占めている。さらには食事の支度やゴミ出し、子守などの生活支援や農作業の手伝いといった回答もみられる。

手伝ってもらった感想

ボランティアに関しては、記入された感想のほとんどが肯定的なものだった(図表4-6)。一生懸命で人柄もよく、がんばってくれたので感謝している、といった内容の回答が目立つ。とりわけ若い男性のボランティアが力仕事を担ってくれたことが、ずいぶん手助けになったようだ。阪神大震災の経験を経て日本社会にボランティアが根づくことにより、「よい意味でボランティア慣れした、質の高い人たち」が育っていることがうかがわれる。

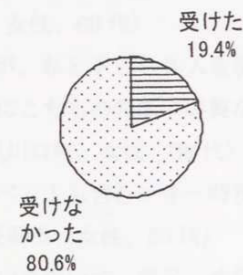
ボランティアに対する不満やマイナスの評価も、ごく少数ではあるが記されていた。場合によっては、ボランティアの人柄や能力に問題があったようだし、被災者のニーズにうまく合わないケースもあった。受け入れる側(行政やコミュニティ)がうまく対応して、ボランティアの善意や能力を最大限活かしていくことが課題となるし、ボランティアの側でも現地のニーズをよく見極めることが必要だろう。

被災者自身のボランティア活動

地震後に対象者自身がボランティア活動をしたかどうか尋ねたところ、回答者の3人にひとりが何らかの活動をしており、ボランティアの手助けを受けた割合をかなり上回っている(図表4-7)。その要因としては、対象者の性格(グループ活動に積極的)や地域性(地域のつながりが強い)といったことが考えられる。

ボランティア活動の内容としては、高齢者やひとり暮らしの人の手助けがもっとも多く、

図表4-4 ボランティアの手助け



回答数の4分の1にのぼっている。災害によってより大きなダメージを受けた人びとが、同じ地域の人びとから支援を受けていたのである。それについて多かったのが支援物資の配布・運搬、炊き出しなどの活動であり、それ以外にも被災生活全般にわたって活動していた様子が見える(図表4-8)。ボランティアというと外部からの人びとが脚光を浴びるが、地域内でのボランティアの役割にも注目し、効果的にコーディネートしていく必要があるだろう。

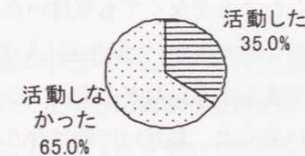
図表4-5 手伝ってもらったこと

順位	内容(38)	件数	順位	内容	件数
1	家の後片づけ・整理	16	5	ゴミの分別	4
2	家具の移動・搬出	12	6	子守り	3
3	家屋・車庫等の補修	7	7	引っ越しの手伝い	2
4	食事の支度	6	7	農作業	2

図表4-6 ボランティアに手伝ってもらった感想

順位	肯定的(45)	件数	順位	否定的(6)	件数
1	一生懸命がんばってくれた	12	1	質が均一でない	1
2	助かった・良かった	10	1	構成が明らかでない	1
3	人柄がよかった・親切	7	1	人数の工夫が必要	1
4	感謝している	4	1	タイミングが大切	1
5	若者・男性が来てくれて助かった	3	1	もっと責任を持ってほしい	1
5	子どもの送迎・子守が助かった	3	1	受け入れ側の不備があった	1

図表4-7 ボランティア経験



図表4-8 被災者自身のボランティア活動

順位	内容(93)	件数
1	高齢者・一人暮らしの人の手助け	24
2	支援物資の配布・運搬	14
3	炊き出しをする・手伝う	13
4	入浴・洗濯のサービス	5
5	避難所の清掃・片づけ	4

◇自由回答から——ボランティアについて——

ボランティアの手助け

- ・家の中の片付け、庭木の片付け、倒れた材木の運搬。(小千谷市、女性、60代)
- ・本棚を起こして本の整理をしてもらった。壊れた重い家具を外に出してもらった(どちらも女手でできない力仕事)。(長岡市、女性、60代)
- ・破損した大きい家具を集積所まで搬出してもらった。力のいる後始末は大変ありがたかったです。(長岡市、女性、60代)
- ・傾いた車庫を立ち直らせる工事が始まって、その日1日で、車庫のコンクリートを剥ぎ取る仕事を手伝いに、頼みもしないのに栃木から息子の大学時代の友人が来てくれて、若者たちがあつという間に仕事を片付けてくれました。老人2人で家の中の片付けにくたびれていた時で助かりました。(長岡市、女性、60代)
- ・小学校への送迎、散髪、就園前の子どもの遊び。(川口町、女性、30代)
- ・食事(インスタントラーメン)を作ってもらいました。(小千谷市、女性、70代)
- ・飛び散った瓦と土壁の崩れた物を、土嚢袋に詰めてもらった。(小千谷市、女性、50代)
- ・自宅の補修をしていた時(雨漏りや、水が壊れた所から浸入しないように、ビニールシートをテープ等で貼り付ける)、富山県の富山市議の方々が当地に来てくださり、手伝ってもらった。(小千谷市、女性、50代)
- ・仮設住宅への引越し、電化製品の設置。(長岡市、女性、50代)

ボランティアに手伝ってもらった感想

- 〈肯定的〉
- ・来てくださった全員(延べ14人)が、とても気持ちよく手伝ってくれて、我がことのように心配してくれたことが嬉しかった。(小千谷市、女性、60代)
- ・余計な事は言わない。すべき仕事は要望通りきちんとする。プライバシーに立ち入らない。良

- い意味でボランティア慣れた、質の高い人たちでした。感謝しています。長野から来たという日帰りのお2人でした。(長岡市、女性、60代)
- ・ボランティアですと、改めて言うことも大事ですが、なんでも今少しだけでも何か助けられることがあればという気持ちで、とても嬉しいことと思います。被害を受けていますので、何をしますといわれても、これもあれもあつて、もうどうでもいいやと思ってしまう部分があり。また、ほんの少しの手伝いも嬉しく、励まされた思いがしました。(長岡市、女性、60代)
- ・小学生の送迎に関しては、やはり道中がとても心配だったので、助かりました。2歳の子どもと遊んでくれた方々も、たくさんの子どもを相手に良く面倒を見、相手をしてくれたなあと感謝しています。(川口町、女性、30代)
- ・家族は気持ちが落ち着かず、家の仕事を手につきませんでしたので、とても助かりました。(小千谷市、男性、50代)
- ・夫が会社に泊まり込みになっていたのが、夫がなくなり、大変助かった。(小千谷市、女性、50代)
- ・お願いしたことでも気付いたことは、しっかりしてくださった。大学生らしいひとなどは、もっとやりましようかなどと言って心から頑張ってくださいました。お互いに助け合うことの大切さを痛感いたしました。(十日町市、女性、70代)
- ・屈強な男性の方々が4人、2回目は2人で来てくださり、てきぱきと手伝ってくださいました。気分の落ち込みがちの私たちの気持ちを、察してくれるように程々に声もかけてくださり、何よりも頼りがいのある人たちでした。(小千谷市、女性、60代)
- ・皆さんがとても親切で、本当に嬉しかった。打ちのめされそうな心に勇気もらった。人々の善意がこれほどありがたく感じた事は、今までにめったになかったことでした。全くの他人に対しての善意は、今度自分ができる立場の時には、きつとお返ししたいと思った。(小千谷市、女性、50代)

- ・お茶や昼食を自分たちで用意され、依頼者に負担をかけないという精神にのっとっての行動で、ありがたく思いました(余裕がなく、助かった)。気持ちよく応じてくださった。(長岡市、女性、40代)

〈否定的〉

- ・ボランティアさんから良く働いてもらってありがたかったが、一度に大勢のボランティアさんに来られても、対処するこちらは1人なので、3、4名くらいで良いと思う。(十日町市、女性、60代)
- ・子どもの相手を毎日していただいて、よく遊んでくれたのは助かったが、寒い中、転んでズボンを汚して、冷たくなってもそのまま泥だらけということが度々あった。みていただくからには、ただ相手をするだけではなくて、責任を持っていただきたかった。(川口町、女性、30代)

被災者自身のボランティア活動

- ・一人暮らしのおじいちゃんの家のガスの所を見に行ったり、私と同年代の人でトイレに行けない人の世話をしたりしました。(十日町市、女性、60代)
- ・町内役員の手伝いとして、班の一人暮らしの人や体の弱い人を中心に物資や食料を配ったり、要望を聞いたりした(ささやかではあるが)。(長岡市、女性、60代)
- ・グループホームのお年寄りと、恐ろしかったこととか、元気で良かったと喜び合い、お茶菓子とお茶を持って行きました。とても喜んでもらいました。(十日町市、女性)
- ・車椅子利用でオムツをしている老婦人のお世話と、避難所のトイレの清掃。(長岡市、女性、70代)
- ・仮設住宅に入居している人で1人暮らしや高齢者の方にお茶を(集会所で)出してやったり、話

- し相手になってやる。今も続いています。(小千谷市、女性、60代)
- ・支援物資の仕分けと配布。倒壊家屋調査をパソコン入力。災害対策本部の電話番。(長岡市、男性、20代)
- ・神戸の方が物資を運んで来てくださったのを仕分け、配布のお手伝いをする。コンサートを聞き、集まった義援金を募金として市へ。(小千谷市、女性、50代)
- ・町の他の地区の避難所の物資配布及び物資の入・出数量の調査、記録。ボランティアの皆さんの道案内、車の運転送迎等。(川口町、男性、60代)
- ・届いた支援物資(町内で役所に取りに行く)を、各家に連絡し、平等に配分して渡す。1日2回、10日間くらいしました。仮設トイレの清掃。(小千谷市、女性、60代)
- ・避難所で、食材の運搬・豚汁の盛り付け。(長岡市、男性、60代)
- ・赤十字のボランティア活動の動員で、おにぎり作りに参加しました。(六日町、女性、60代)
- ・部落の集会場が災害救助センターとなっていたので、その清掃(割れた窓ガラスの破片が広場に散乱していてとても危険だったため)。(川口町、女性、50代)
- ・当日避難所で、避難した人たちの要望を役場の方、消防の方にパイプ役として知らせた。(塩沢町、女性、60代)
- ・職業柄(整体師)家に来た人たちには、整体(施術)をしてあげた。今は仮設住宅へも、一部ですがボランティアで行っています。(小千谷市、女性、60代)

4-3 被災生活とコミュニティ

隣近所の助け合い

地震後の生活の中で、隣近所どうしの助け合いが活発だったかどうかを尋ねた。「非常に活発」「まあまあ活発」を合計すると6割を超えるが、「ほとんどなし」という回答も16%ほどあった(図表4-9)。地域の地震被害の度合いにもよると思うが、後でみるように地域的なつながりの希薄化もその要因になっているようだ。

つづいて助け合いの具体的な様子について、とくに印象に残ったことを自由に記入してもらった(図表4-10)。上位には、声をかけあった・励ましあった、集まった・一緒にいた、という回答があがっている。とりわけ地震直後の不安な状況の中で、広場などに集まり声をかけあうことが、近隣の人間関係が果たした重要な役割だった。つづいて食料や物を分けあう、炊き出し、物の貸し借りなどによって、地域の人が協力しあいながら困難な状況に立ち向かったことが分かる。

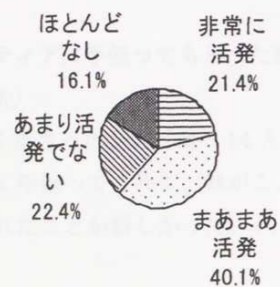
さらには、高齢者や体の不自由な人、ひとり暮らしの人の手助けをあげた人も多く、この点でも近隣関係が果たした役割は見逃せない。「寝たきりのお年寄りのおばあさんを、皆で余震のなか部屋に入り、おぶって家から出した(長岡市、女性、50代)」。突然の災害に遭遇した時、いわゆる「災害弱者」の救援は、近隣の人が事情をよく知っていることによってはじめて可能になるといえる。しかしその一方で、「集落全戸がバラバラ」「近隣同士あまり意思の交流がない」などの記入もみられ、地域による差も大きいようである。

自治会・町内会の活動

コミュニティの基礎的な関係を知るために、自治会・町内会の活動についても尋ねた。地震以前の自治会活動については、とても活発・まあまあ活発を合計するとほぼ半数だが、何もしていないという回答も4分の1あった(図表4-11)。地震後あらためて自治会・町内会が必要だと思ったかという問いには、絶対必要が6割弱、あった方がいいという回答が4割弱で、あまり必要なしとする回答は4%にすぎなかった(図表4-12)。地震と被災生活の経験をへて、自治会や町内会の意義があらためて注目されているといえるだろう。

さらに、地震前の自治会・町内会活動と隣近所の助け合いの関係を探ってみた(図表4-13)。地震前の自治会活動が活発だったと回答した人の8割は隣近所の助け合いが活発だったと答えており、不活発という答えは2割しかない。それに対して、自治会活動が不活発と回答した人で、近隣の助け合いが活発だったとする人は4割にとどまり、不活発が6割弱にのぼっている。もともと自治会や町内会の活動が活発な地域で、地震後の助け合いも活発になるという関係ははっきりと現れている。「関係は急に作れない」ということだろう。

図表4-9 隣近所の助け合い

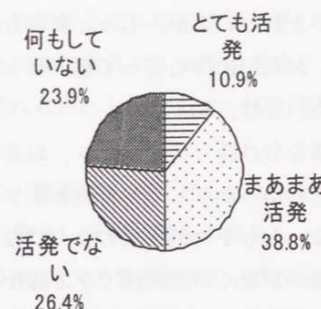


図表4-9のデータは、地震後の隣近所の助け合いに関する回答を示している。最も高い割合を占めるのは「まあまあ活発」(40.1%)と「非常に活発」(21.4%)の合計である。一方で「ほとんどなし」という回答も16.1%あり、地域間のつながりの弱体化が懸念される。

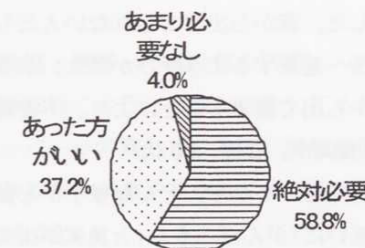
図表4-10 隣近所どうしの助け合い

順位	内容(156)	件数
1	声をかけあった・励ましあった・話をした	33
2	食料や物を分けあった	32
3	広場などに集まった・一緒にいた	24
4	高齢者・障害のある人・1人暮らしの人の手助け	21
5	炊き出し	20
5	情報交換・情報提供・連絡	20
7	物の貸し借り	13
8	支援物資の配布	11

図表4-11 地震前の自治会活動



図表4-12 自治会の必要性



図表4-13 自治会活動と隣近所の助け合いの関係

	隣近所の助け合い			
		活発	不活発	
地震前の自治会活動	活発	76(80.0%)	19(20.0%)	95(100.0%)
地震後の自治会活動	不活発	39(42.4%)	53(57.6%)	92(100.0%)

◇自由回答から——隣近所の助け合い——

〈声かけ・励まし合い・一緒にいる〉

・お互いに被害にあっているのに、自分たちの家や家族を守ることが精一杯。余震のたびに、お互いに集まって励ましあった。持ち合わせの食品をお互いに分け合った。(長岡市、女性、70代)

・一緒に風呂を作ったこと(3軒)。いろんなことを話して不安な気持ちが少しでも落ち着いたこと。おかずやお汁など分けたこと。(川口町、女性、50代)

・雨が降り続き、外での生活に無理があり、農業用のビニールハウスに近隣の家族が(3、4家族)、食事をしたり寝たりを共にした。(川口町、女性、30代)

・23日の夜は、空き地に集まり、家には入れる人は敷物や毛布を持ち出し、寒さをしのぐために貸し借りした。家から出てこられない人たちに、安全な場所へ避難するよう呼びかけた。余震があると、家から出て集まることにより、不安解消になった。(長岡市、女性、50代)

・少し落ち着いてから、どんな様子かを話し合うことで互いに「がんばろうね」と勇気が出てきた。(長岡市、女性、60代)

・23日夜、近所で声を掛け合い、安否確認をした。24日の朝食から28日夕食まで、炊き出しをした(材料は各家から持ち寄った)。食事の時に、行政からの連絡をした。我が家では塀が倒れ、庭石が道路に転げ落ちたが、リフトを持ってきて町内の人が片付けてくれた。町内全体の安全に気を配った。(小千谷市、女性、50代)

・炊事、情報交換。近所に人が居ることだけで、安心感が得られた。(長岡市、女性、60代)

〈食料や物の分けあい・貸し借り〉

・最初外に出た時、毛布やコートなどを持ち寄って助け合った。避難する時、若い人が先導して、道路の危険を知らせてくれた。おにぎりやカイロなどを配ってくれる人もいた。足が悪く、避難所へ行けない人の安否を確認している民生委員もいた。(長岡市、女性、60代)

・近所の空き地に皆で集まった。電池やラジオは持ち出した人の物を皆で利用した。毛布や肌掛け布団等も皆で利用。食べ物も分け合って食べた。避難所への送迎なども持っていた人が助け合い、皆で連絡しあって行動した。(十日町市、女性、70代)

・本当に助けていただいたのは息子と隣の方々です。あのままだったら私は命がなかった。食事、豆炭コタツ、水がなかったらこの世にいなかった。人の心の温かさ、親切、本当にありがたく思っています。(十日町市、女性、70代)

・10月23日の夕食は、とにかく持ち寄ったものを、数軒の隣同士の者たちで分け合って食べた。携帯用ガスボンベを先に入手した人が、ご飯を炊いてくれ、次々に各家でボンベを調達していった。主食は食べきれない人が、もっと食べられる人に回すなど、お互いに持ち寄って補い合ったこと。(十日町市、女性、60代)

・支援物資を分け合って食べたり、お互いに辛い気持ちを慰めあったりした。普段あまり口を利いたことのない人も1つの家族のようになり親しくなった。誰かが近くの避難所で夕方豚汁の支給があると聞きつけると、みんなに情報を流し、全員でもらいに行ったりした。(小千谷市、女性、60代)

・それぞれが自分の所で作った料理を分け合ったり、頂き物を分け合ったりした。我が家の車庫で、3軒で同じ鍋の飯の間柄となり、水汲み、コインランドリー、買出しなどの仕事を分担し合った。道路に椅子を数脚出して、老人に休んでもらい、世間話やらとても仲良くやっていた。(小千谷市、女性、50代)

・飲食物のない人にもお互いに声かけ合って分け合ったり、町内を通じてきた連絡がうまくまわらない中、情報を伝え合う声かけをした。お互いにまた戻って住もうと励ましあった。子どもの多くいる人に優先的に気配りをし合った。(長岡市、女性、40代)

〈炊き出し〉

・この地域は被害が多く、前の家も後ろも横も全壊家屋となっています。その中でも我が家は良い方で、大規模半壊でした。そんななか、避難所は人がいっぱい入るところがなく、車の中等で夜を過ごす人がほとんどでした。幸いなことに電気がついていてくれましたので、3日間(電気がつかなくなる25日まで)我が家で近所の人とご飯を炊き、カセットガスコンロで汁を作って皆で食事をしていました。大勢で一番膳が終わると次の人が来て食べるという状態で、次々誰彼なく食事をしました。近所でも車庫や道路でおにぎり等を作って、来る人や通りがかりの人に食べてもらっていました。人と人の温かい交流が嬉しかったです。(長岡市、女性、60代)

・24日朝食からの炊き出し(自衛隊の炊き出し支援が本格化するまで1週間くらい)。米、野菜を持ち寄り、自然発生的に始めましたが、炊き出しをすることで地域全員が1ヵ所に集まり、余震の恐怖から逃れられたと思います。(川口町、女性、50代)

・車庫に(車3台分)子ども、老人を集め、ストーブ3台置き、交替で誰かが番をし、外の成人は1日3回80人分の食事を作り、夜は子ども、老人は車庫、その他は自家用車。(長岡市、女性、50代)

・共同炊事、手持ち食材を出しあい、支援食を共にみんなで作り共に食べた。共同テント、休憩用テント(老人、弱者用)等を張り、空地や井戸水を提供し、車を出し合い、それぞれが持てる力を出し合い、助け合った。(小千谷市、女性、50代)

〈高齢者・障害者等の手助け〉

・一人暮らしなので、皆さんが心配して、いろいろと話しかけてくださいました。(十日町市、女性、70代)

・体の具合の悪い人には、なるべく負担をかけないように協力してやった。(川口町、女性、50代)
・家々より持ち出したものを、お互いに使いあった。寝たきりのお年寄りのおばあさんを、皆で余震のなか部屋に入り、おぶって家から出した。(長

岡市、女性、50代)

・地震直後に屋外へ避難する際、高齢者を若い人が背負って連れ出してくれた(高床式住宅が多く、階段があるので、余震があると老人は動けなかった)。1人暮らしの老人宅の片付けを、近所の人が手伝った(タンスや物入、食器棚等の倒れたものを起こすのは、1人や老人には無理)。(小千谷市、女性、60代)

・避難時には話し合って、一人暮らしの方や老人たちと、車で行動を共にした。余震時にも、声を掛け合ったりした。(見附市、女性、70代)

・お年寄りや身体の不自由な方への支援、話し合い。自宅に入ることが不安な方へ、大丈夫だった家の車庫の開放。(小千谷市、女性、60代)

・目の不自由な夫婦2人の家庭・・・隣なので、車に連れてきて避難した。老人1人暮らし・・・声をかけて車へ。(六日町、男性、70代)

〈情報交換・連絡・町内役員の活躍〉

・避難所に行くようにと声かけをしてくれた。近所のスーパーが営業していると、情報提供してくれた。飲み物やお菓子を分けてくれた。(長岡市、女性、50代)

・無事を確かめ合った。避難所や救援物資のことなどの連絡をしあった(口コミです)。(長岡市、女性、70代)

・情報を持ち寄り、井戸端会議的な毎日であった。日用品や食品を融通し合った。炊き出しの配給分配には大いに協力的であった。(川口町、男性、70代)

・町役員の皆さんが昼、夜に回ってくる。救援物資の受け取り連絡、給水車の連絡などあらゆることに対して、その都度連絡に回っていただきました。(小千谷市、女性、70代)

・町内の班長さんが、市に物資の人数をすぐ連絡し、皆に十分届いた。役員ではないが、進んで物資を配布。配布のやり方もだんだん上手になる。名簿を作り、物資を平等に配布できた。子どもたちも若い人も年寄りの方も、皆仲間になり、挨拶や話をするようになる。子どもたちが一緒になり、年齢に関係なく一緒に遊んでいた。(小千谷市、女

性、50代)

・町内会長さんが、避難所で色々お話ししてくださった。(長岡市、女性、70代)

・私の家は、150軒くらいの村で(道路ががけ崩れ)孤立状態。村の町内会の人リーダーになり、団地で1ヶ所に集められ、避難所として生活の場を、11月6日まで合同で何もかも仕切っていたので、皆自分のできることを協力し合いながら生活していた。(小千谷市、女性、50代)

(隣近所の難しさ・疎遠さ)

・活発であったと思うが、日が経つにつれて疲れてくると、いろいろな支障があったようだ。しかし、全体にまとまっていたと思う。(小千谷市、女性、60代)

・私の地域ではこのような災害は初めてだと思いますが、今考えると、集落全戸がバラバラで隣の家がどこに避難したかもわからない状態でした。一人暮らしの老人世帯もいるのになあーと不安を感じます。何か非常時の安心のための策がとられているといいと思います。(十日町市、女性、60代)

・積極的な助け合いはなかった。隣組の班長さんが、自分の班の各家ごとに、支給物資や回覧板などを回す程度だった。(小千谷市、女性、60代)

・助け合いというか、具体的なことはなかった。

物資が来ていれば、1日2回分け合う。それは主人が取りに行く役(町内副会長)だったのでずっとやっていたのですが、ある近所の人が、他の町内には何々が来ているのに、なぜ私たちのところにはないのか、と文句を言い始め、攻撃されてしまいました。(小千谷市、女性、60代)

・近隣同士あまり意志の交流がなく、今後のあり方に改めて取り組む必要性を感じました。(六日町、女性、60代)

・土地柄、普段からあまり町内の付き合いはない。他町村から集まった、新しい集合住宅地のため。(女性、70代)

・新住宅地なので、ご近所のつながりがあまりない地域です。テレビ等で山古志村の人たちが放映される場面を見ていて、近所、隣同士のつながりがあり、助け合って生活している姿を見ると、昔の日本が見える気がします。(六日町、女性、50代)

第5章 経験をふまえた提言と感想

地震後ほぼ3ヶ月を経過した調査時点でふり返ってもらい、地震への備えで役に立ったもの・役に立たなかったもの、震災の体験をふまえて今後備えておこうと思ったものを記入してもらった。さらに、調査票の最後で「その他、現在感じておられること、考えておられること、体験をふまえたアドバイスやご意見などについて自由にご記入ください」という形で提言や感想を書いてもらった。この問いに対しても、6割もの方が回答を寄せており、記述も「これだけは言っておきたい」という調子の長文にわたるものが多かった。以下では地震への備えについての提言と、現在感じている問題点の2つに分けて、取りあげることにしよう。

5-1 地震への備え

これまでの備え

地震などの災害に対して、ふだんからの備えがあったかどうかを尋ねたところ、あったという回答は4分の1にとどまっている。対象者の災害に対する危機意識は必ずしも高くなかったようだ。

ここで備えがあったと回答した人に、役に立ったもの、役に立たなかったものをそれぞれ尋ね、役に立たなかったものについてはその理由も記入してもらった(図表5-1)。役に立ったものとしては、懐中電灯、水・飲料、ラジオ、食料品、家具の転倒防止措置などが上位にきている。表にあるもの以外では、携帯電話の充電器やカーナビ、カーラジオを含む車という指摘も目立つ。

逆に備えていたけれども結局役に立たなかったものとしては、非常持ち出し袋や食料、懐中電灯などがあげられている。食料については、乾パンはすぐに配給があったため、インスタントラーメンは調理する際に水がたくさん必要なために役に立たなかった。それ以外のものは、置き場所を忘れていたり電池が切れていたりして使えなかった。備えたものは、常に利用可能な状態にしておかなければならないわけである。

今後の備え

つづいて、今回の地震の経験をふまえて、今後備えておこうと思ったもの(こと)を重要と思う順に3つまであげてもらった(図表5-2)。懐中電灯、水、食料品、ラジオが上位にあげられており、実際に役に立ったもののリストと一致している。さらには家具の転倒防止や配置の工夫、棚からの落下物防止などの備えや、今回あまり役に立たなかった非常持ち出し袋、また防寒着と衣類、現金・貴重品などが重視されている。それ以外に、家族内での連絡体制、家屋の耐震補強、車のガソリン、カセットコンロ、水を入れる容器、風呂の水はいつも入れておく、といった回答がみられた。

備えについての提言

調査票の最後で、現時点での感想や考え、体験をふまえたアドバイスや意見などについて、自由に記入してもらったが、ここではそのうち「災害への備え」にかかわる記述を取りあげる。以下ではそれを、個人的な備え、つきあい・関係・地域の備え、行政による備えに分類して紹介している。

個人的な備えについては、前述したもの以外では、貯金や災害ダイアルの活用、職場での備えといった記述がみられた。とくに印象深かったのは、多くの人がライフスタイルの見直しに言及していたことである。地震では食器や家具、電化製品など多くの物が壊れ、結局ゴミと化した。また、揺れにより物が飛んできて、ケガのもとになりかねなかった。こうした体験を経て、被災者は物に囲まれたこれまでの生活のあり方を見直そうとしている。「物の所有」から「シンプルな暮らし」「人とかかわり」を重視するあり方への価値観の転換が語られている。

つきあい・関係・地域の備えについては、「普段からの近所づきあい」の価値があらためて見直されている。そうしたつきあいを基礎として、町内会などの小さな単位が緊急時に機動的に対処できるようなシステムを整えることが求められる。そのために「地域リーダー」の育成や、情報の流れを整備しておくことが提言されている。

行政に対する意見については、すでに3章でも取りあげた。突発的な災害に対して迅速にかつ不公平なく対応できるような、日ごろの対策の積み重ねが求められていた。町内会等の地域的な組織との連携を含めて、きめ細かな体制の整備が必要とされる。

図表 5-1 地震への備え

順位	役に立ったもの(52)	件数	順位	役に立たなかったもの(その理由)(25)	件数
1	懐中電灯	23	1	非常持ち出し袋(取り出せなかった・忘れていた)	7
2	水・飲料	17	2	食料(乾パン、インスタントラーメン、など)	6
3	ラジオ	12	3	懐中電灯(見つからなかった・電池切れ)	5
4	食料品	10	4	ラジオ(電池切れ)	2
5	家具の転倒防止	7	4	携帯トイレ(置いた場所を忘れた・必要なかった)	2

図表 5-2 今後の備え

順位	1 番目(188)	件数	順位	2 番目(176)	件数	順位	3 番目(152)	件数
1	懐中電灯	49	1	食料品	42	1	食料品	25
2	水	42	2	懐中電灯	33	2	懐中電灯	20
3	食料品	26	3	水	24	3	ラジオ	17
4	ラジオ	20	4	ラジオ	16	4	衣類	14
5	家具の転倒防止	17	5	衣類	12	5	薬・救急箱	12

◇自由回答から——地震への備え——

これまでの備え

- 〈役に立ったもの・こと〉
- ・食器棚・タンス等が倒れないような措置。ペットボトル(水・お茶)の買い置き。飲料水用タンクの準備。(長岡市、女性、40代)
 - ・常に貴重品、常備薬、ビニール袋、布袋などをバックに入れておいたため助かりました。(見附市、女性、60代)
 - ・地震に強い家造ったこと。地震の経験をしていたので、水と食料をいつでも用意していたこと。(十日町市、男性、60代)
 - ・寝室にタンス、鏡台等、転倒するものを置かない。額等も頭上に置かない。テーブルの椅子に座布団を置く。(栄町、女性、60代)
 - ・棚の観音開きの戸にあおり止めをつけておいたので、戸が開かず、茶碗類、他の瀬戸物類は落ちなかった。水を風呂にためておいたこと。リュックに着替えのもの等を入れておいたこと。(長岡市、女性、70代)
 - ・日頃から携帯ラジオと懐中電灯は必要だと思って用意しています。食料や水は備えていません。昔と違ってものがあり、インスタント物が役に立つと思います。情報が行き届いているので、全国から支援が半日～1日ですぐに来て助かりました。(長岡市、女性、60代)
 - ・①電池(懐中電灯)の替えは常に予備しておく(常に枕元、玄関、携帯用として車の中等へ)。②食品類(瓶詰め、缶詰、即席食品、梅干、のり等)をまとめて置いておく。水(ペットボトル)。③常時、白米は炊いておく(残るくらい多めに)。薬類。④下着類はセットにして整理しておく。(十日町市、女性、60代)
 - ・携帯電話用充電器(自動車バッテリー用)、カセットコンロ、ガスボンベ、自家用野菜、自動車テレビ(ナビゲーション)、懐中電灯、ラジオ。(川口町、男性、60代)

- ・懐中電灯。車の中に毛布を積んでおいたこと。ガソリンを空にしない。近所づきあい。(小千谷市、女性、50代)
 - ・非常持ち出し(重要なもの)をリュックにまとめておいた。懐中電灯はいつも決めた場所に置いていたので、停電していても持ち出せた。卓上ガスコンロ、石油ストーブ、風呂の残り湯。(小千谷市、女性、50代)
 - ・車用の携帯の充電アダプターをつけておいた。家具に転倒防止金具をつけていた(食器棚だけ忘れていた)。カセットコンロのセットと、飲食品(水と缶詰他)の日持ちするものを用意しておいた。懐中電灯を家族分用意し、置き場所を決めておいた。車の中に防寒敷物を余分に置いておいた。ホッカイロを車に積んでいた。電池の予備を置き、その場所も家族で決めておいた。(長岡市、女性、40代)
 - ・車(寝泊りOK、ラジオOK、移動可)。水(少しでもあると思うだけで安心)。傷バン、カップラーメン、即席味噌汁、携帯電話、ガスコンロ、携帯コンロ、ポリタンク(水入れ用)、懐中電灯、ウイナー・さば等の缶詰。(小千谷市、女性、50代)
- 〈役に立たなかったもの・こと(その理由)〉
- ・持ち出し袋(大きすぎた)。(長岡市、女性、40代)
 - ・下着(避難所に長期間いかなかった)、乾パン(2日目の夕食からは避難所で支給された)、小銭(公衆電話がなかった)。(長岡市、女性、50代)
 - ・電池切れの懐中電灯。(長岡市、男性、60代)
 - ・非常持ち出し袋(物が倒れて取り出せなかった)。懐中電灯(戸棚の扉が開いて飛び出し、暗い中で見つからなかった)。(長岡市、女性、60代)
 - ・懐中電灯(玄関に置いておかなかったので、すぐに取り出せなかった)。携帯用ガスコンロ(台所

の棚の中に置いたため、余震が怖くて取り出せなかった。(長岡市、女性、70代)

・携帯トイレ(風呂の水を汲んで流す事ができた。仮設トイレが随所にできた)。(小千谷市、女性、50代)

・七輪、木炭(卓上コンロでまかなえた)。乾パン(自宅で過ごすことができたから)。(長岡市、女性、60代)

・インスタントラーメン(お湯がないため使用できない)。(六日町、女性、60代)

・携帯用簡易トイレ(どこに置いたかみんな忘れたから。車に入れておかなかったから)。(長岡市、女性、40代)

・α米(登山食など)(そこまででなく、食材が手に入った)。トランジスタラジオ(電池切れ、性能がよくない)。インスタントラーメン(家族分となると水や火を大量に使いそうで避けた)。(小千谷市、女性、50代)

今後の備え

(物の備え)

・緊急用品(電池など)を一括して、別棟の車庫に保管する。(長岡市、男性、60代)

・非常持ち出し袋を出入り口の近くに置く。中にいれるものを再確認する。(長岡市、女性、60代)

・携帯ラジオ、カセットコンロ(ガスが止まったので給水車から水をもらい、煮炊きに活躍しました)。(長岡市、女性、60代)

・懐中電灯(家族の人数分必要だと思う)。(川口町、女性、50代)

・電池、ラジオ、寒さ対策、貴重品、水、病気の薬。(十日町市、女性、60代)

・水を入れる容器。ペットボトルだけではなく、10~20リットルくらい入る容器が必要。(長岡市、女性、60代)

・車のガソリンは満タンにしておく(半分以下にしない)。(見附市、女性、50代)

・風呂の水はいつも入れておく。(十日町市、女性、60代)

・携帯電話、湯たんぼ(車に避難している時、寒さから逃れる大変役に立ちました。火を使わずで危なくないし、お湯がまた使えます)。(長岡市、女性、60代)

・現金(スーパーがすぐに営業を開始したのはびっくりしたし、助かった)。(十日町市、女性、70代)

・ブルーシート(敷いたり掛けたり、風除け、雨除けに必要)。(川口町、女性、50代)

・寝袋(布団)。車の中でも暖かく眠れるよう。(六日町、女性、70代)

・今回の地震のように寒くなってからですと、第一に体を暖める手軽なホッカイロといったところでしょうか。(柏崎市、女性、60代)

・懐中電灯、ローソク、蛍光カンテラ(これが明るくて役に立ちました)。(長岡市、女性、60代)

・ラジオ(常に電池を補充し、いざという時電池切れのないよう)。(川口町、女性、50代)

・金銭、タオル、ポケットティッシュ。火災保険、生命保険、自動車保険証書の番号、親類の電話番号をノートにしておく。(小千谷市、女性、60代)

・着替え(整理ダンスが倒れて、肌着を取り出せなかった)。(長岡市、女性、60代)

・預金、保険、はんこ、大切な書類。(見附市、女性、70代)

(家屋・家具の危険防止)

・たんすなどを一部屋に集めて置いておこうと思う。(十日町市、男性、60代)

・台所などに高い棚や不安定な棚はつけない。食器は最小限。(十日町市、女性、30代)

・家具類は倒れないようにしっかりとめておくこと。(長岡市、女性、60代)

・家の基礎工事が一番大切! 民家であっても、ビルディングの基礎のようにやるべき!! 子どもたちに言い聞かせています。(長岡市、女性、60代)

代)

・下部に重い物を入れ、上部に軽い品を置くなどの工夫をする。(十日町市、女性、70代)

・観音開きの棚は、本体を固定しておいても扉が開いて、中のものが飛び出して壊れてしまったので、扉に止め具をつけること。(小千谷市、女性、60代)

(連絡、その他)

・災害時の家族との連絡の取り方。(小千谷市、女性、70代)

・夫と常日頃、「~だったら」という仮想の前提で、行動のA、B、Cというマニュアルを作り、共通に理解しておくこと。(小千谷市、女性、60代)

・携帯電話のメール番号の交換(子どもたち、友人、親戚)。(川口町、男性、60代)

・不要品を購入しない心構え。(長岡市、女性、60代)

備えについての提言

(個人的:ものの備え)

・食べる事に関しては、1回我慢したら支援が得られるので、多くの用意はいらない。避難所に定められた所が使えないことがある(体育館が壊れて入れなかったり、人がいっぱいだったり)。支援をする人も被災者なので、人を頼らず自分たちで対処することが大切。(長岡市、女性、50代)

・家具や食器の破損が多かったので、安全または最小にするための方策が必要でした。(長岡市、女性、70代)

・今回の地震を体験して、自然災害はいつ、どこで、どのように起きるかわからず、大変恐ろしく、防ぐことのできないものである。そのために少しでも辛く悲しい出来事を小さくするよう、日頃から備えが大事であることを知りました。私は常に常備食(保存用)や常備菜、電池の買い置き等はしていましたが、これからは衣食、必要な常備(電

池、薬等)はリュック等に入れて持ち出しやすい場所を決めておくことが、いざという時慌てないで冷静に行動できるものと思う。(十日町市、女性、60代)

・タンスは倒れないように止めておくこと。電池は枕元に置くこと。水のある場所の確認(清水の出る場所)。広場を決める。近所づきあいを良くしておく。(川口町、女性、60代)

・いつ災害が起きるか分かりませんので、少しの貯金は必要だと特に感じます。(今回の地震の修理費は200万円弱かかる予定です)。(小千谷市、男性、50代)

・家の中の収納の仕方の見直し(押入れの品物が、飛び出して壊れた。なるべく重いものを下の段に、などの工夫)。家具もロータップを選びたい。キッチン戸棚は、引き戸の品物は壊れなかった。引き出し式の戸棚もOK。観音開きの戸棚の食器は壊れた。システムキッチンは無被害でした。(小千谷市、女性、60代)

・職場にいた時の被災を考えていなかったのも、職場に衣類、運動靴などを準備しようと思った。行政の災害時の準備があまりないことを感じた。災害への備えをするべきだ。(小出町、女性、50代)

(個人的:ライフスタイル等)

・物を所有する事の無意味さを実感。地震後、車庫で家族みんなで温かいものを食べ、足を伸ばして寝ただけで幸せだった。これからは不要なものなるべく買わず、もらわず、シンプルに暮らしていきたい。(十日町市、女性、30代)

・自分の一生でまさか震度7の地震に見舞われるとは想像だにしませんでした。今つくづく感じることは、生きていくうえで必要な物はごく僅かだということです。家族仲良く、健康に暮らせればそれだけで十分です。無駄を省き、すっきりと整理整頓して暮らすこと。1日1日をいとおしんで生きること。人に優しく、自分に厳しく、困った

時はお互い様の精神で、災害を撥ね除けようと思っております。(川口町、女性、50代)

・地震にあっけしきみじみと、身の回りの生活用品の整理をすることの必要性を学んだ。要はとにかく物品を少なくして、余計なものは不要とする心構えである。子供3人のさまざまな品と、家に送りつけられた3人の子どもたちのあれこれの品(大学卒でいったん家へ物を送りつけ、自分は就職、結婚～現在となる)などは不要品となるのだが、なかなか片付けられなかった。生活のスタイルをもっと改めて、良質な価値ある生活空間を作り出すことに、今春から夫と心がけるよう、1つ1つを行動していくことを、今は話し合っています。(小千谷市、女性、60代)

・災害ダイアルの活用がもっと広がってほしい。高齢者は知らない人が多い。ブレーカーを切って避難したが、あまりブレーカーに注意する人がいなかったのも、もっとPRした方がいいのかなと思った。今回は地盤被害が大変だったが、土地に建物を建てる場合の地盤調査や改良が義務化されるといいと思う。(見附市、女性、50代)

・小学3年の時、三河地震で被害を受けました。今の小学生にこのことを、特に消費者協会の調べた事を教えてやってください。私は神戸のトイレパニックのことを聞きました。地震すべてのエキスパートにならなくてもいい。一つだけでいいから専門家になってもらいたい。大工になりたい小学生が多いと聞きます。手抜きをしない大工になってもらいたい。あまりにも手抜き工事が多いと思います。(十日町市、男性、60代)

〈つきあい・関係・地域の備え〉

・病弱な人の手助けとなる避難所が必要(家の近くに)。普段からの近所づきあいが大切。自分の殻にこもらないこと。友人も大切。困っている時の手助け、本当に助かった(友人は当日、山古志に行っていたのでヘリで助かったのに、駆けつけて来てくれた)。(長岡市、女性、60代)

・住んでいる村の中に1人暮らしの人がいるが、近所の誰かが声を掛けるとか、普段から緊急の場合を考えておく必要があった。(見附市、女性、50代)

・町内会による避難体制の徹底。町内会長による町内の避難者の把握、支援の方法等。風呂に水をはっておくこと。家具類をとめておくこと。ライフラインが直るまでの間、家庭に避難している人たちの食事の配布方法。(長岡市、女性、70代)

・家族との話し合い、地域の方々との交流など、人とのかかわりが一番大切だなと感じました。感謝の気持ちを忘れないこと。自分でできることがあったらお手伝いしていきたい(助けていただいたお礼として)。(小千谷市、女性、50代)

・避難の安否確認、避難誘導など地域ごとにリーダーを決めておく必要がある。救援物資の配分、情報伝達など、市の震災対策本部との連携のためにも、誰がその役目をするのが決まっていると良いと思った。連絡がうまく取れていたところには物資も届いたが、町内、地域の体制が取れなかったところへは届かなかった。リードする人がいなかったところは、個人個人で車に避難したり、2～3世帯で寄りたり、各々で行動したようだ。避難場所も、第一は小規模で隣近所で安否を確認し、次は寝ることができる場所、と段階を踏むことも必要だと思った。十日町市の場合、県立の十日町病院、厚生連中条第2病院(精神科)が被災患者の移送などに大変困った。(十日町市、女性、70代)

・各集落、町などに、非常用品の備蓄をしておくべき。情報が隔々まで届くようにして欲しい。できるだけ大勢の人が集まれるようにすると、精神的に楽になる。非常持ち出し品は、2箇所に置く。(川口町、女性、50代)

・町内で(また各班単位で)の危機管理体制をしっかり日頃からとっておくことが大切。情報を途絶えることなく伝える努力をしないとしないのでは、大きくちがってくると思う。ただプライバシーの

問題があるので、いざという時のことを前提として、自主的に各自の連絡内容を申し出ておくのがよいかと思う。(長岡市、女性、40代)

・地域で防災組織を持っている町内は、防災庫を持っていて、救急用品、担架、照明器具、シャベル、のこぎり、パール、ジャッキなどをそこに備えていて心強い(今回は使う必要がなかったが)。地域で年1回防災訓練をしているが、高齢者をどう避難させるかという、1番大切な訓練をやっていないので、今後はする必要がある。町内会単位で避難所を決めておけば、安否の確認が簡単だし、家が倒壊したり火災が起きたりした場合、救出がより早くできる。今回は3ヶ所ほどに分かれて避難したので、確認に手間取った。(長岡市、女性、60代)

〈行政による備え〉

・長岡市には、「長岡市の地震対策」(平成8年に作られたもの)というリーフレットが各戸に配布されています。また町内会には、防災委員会も組

織されています。年1回何かのイベントの際に、消火器の使い方程度の訓練はなされていますが、今回これらの組織があまり機能しなかったと思います。もう少しきめの細かい対策、例えば、どここの何軒が声を掛けあって安否を確認する、といったような手立てが必要だったと思っています。そうすれば、避難所へ行けない人に食料が行かなかったといったことは防げた気がします。避難訓練も、身近な人たちに声を掛けあうようなことが大切ではないでしょうか。顔も知らない人も多いのが現状です。(長岡市、女性、60代)

・今回の大地震は初めての経験のため、準備や対策が町の方でもできていなかった。各自自主避難しましたが、地震5日後になって、回覧で避難場所の指示が来ました。今後はすばやい対応をお願いしたいと思います。(六日町、女性、60代)

・避難所に自家発電装置を設置してあれば、照明、テレビでの情報が入ることで安心感があると思う。避難所に指定されている所にはぜひ設置して欲しい。(塩沢町、女性、60代)

5-2 問題点と不安

同じく調査票の最後に置いた自由回答欄への記入のうち、ここでは現在感じている問題点や不安にかかわるものを取りあげる。

10年前の阪神大震災の際には、避難所においてさまざまなトラブルが続出したことが報告されている。それと比較して今回の被災者は、避難所できわめて秩序だった行動をとっていたことがマスコミなどでも注目されていた。しかしごく一部かもしれないが、調査票には身勝手な行動をする被災者の様子が記入されている（それぞれに事情があったのかも知れないが）。また気になったのは、大人がそれぞれに苦労しながら役割を果たしていた避難所での生活において、中学生や高校生がただ遊んでいるだけだったという声が聞かれたことである。「食べて、寝て、携帯電話、ゲームボーイの毎日。何かどこかおかしいですね」。子どもや若者が地域のなかで十分に「生活者化」していないことが、背景にあると思う。

支援については、その不備や不十分さが指摘される一方で、いつまで支援に頼るべきなのかという問題も提起されていた。初期の支援が肝要なのであり、その後は適度の支援で十分ということである。そうでないと被災者に「甘え心」が芽ばえて、自立した生活に踏み出すことがむしろ妨げられるのではないかと、という指摘だった。問題はこの「適度」という判断が、それぞれの被災者や地域がおかれている状況が異なるために非常に難しい、ということである。それぞれの事情を把握しながら、不公平感を抱かれないような支援をして、必要がなくなった段階で早急に切り上げることが望ましい。ここでも「情報の流れ」をいかに適切に構築するかが問われるだろう。

また支援制度についても、多くの問題点の指摘と不満がみられた。被災者が不公平感を抱くことなく将来に展望が持てるような制度設計と、対象者へののていねいな説明が必要とされる。家屋被害の判定や住宅再建のための支援金支給が早急に適切になされてこそ、被災者は「避難所モード」を抜けだして、将来に向けて一步を踏み出すことができる。個々の被災者が大切にされずに、震災からの復興はありえない。

自由回答の記述でもっとも心が痛んだのは、心身の不調を訴える声が多かったことである。調査時点の2005年1月～2月は、被災地の中越地方で大雪が降り続き、地震の被害に加えてダブルパンチとなっていた。そうしたなかで、「何も手につかない」「やる気が起きない」「眠れない」といった精神的・身体的不調や将来に対する不安を抱えて暮らしている様子がうかがえる。くり返された余震を含む地震によるショック、住宅の補修にかかわる経済的な困難さなどが、被災者の心身をむしばんでいる。

短期的には「心のケア」を含む適切な医療が必要とされるだろうが、長期的・根本的には住宅と職業を軸とした「生活の見通し」を、いかにして個々の被災者がもつことができるかにかかっていると思う。まさに「政治の力」の出番なのである。

◇自由回答から——問題点と不安——

〈避難生活・人間関係の問題〉

・今日に至ってはあきれ行動をしていた人の多いことにびっくり。避難所で酒を飲む人、食事が届かぬとわめく人々、自分の家が傷んでいないのに若い人が多く食事の配達を待つ人、あきれ。最近になって援助物資が多くあるからと学校職員が分け合ったとも、ある家族の人から聞いている。人様の善意を何と思ったのか聞いてみたい。このようなことは、今度あつてはほしくないが、他人様より先にボランティアができる人物になるよう希望する。(長岡市、女性、70代)

・避難所での生活の中で、中高生は携帯電話をいじっているだけだった。子どもたちに、地域の力になれるようなお手伝いをさせるべきだったと思います。食べて、寝て、携帯電話、ゲームボーイの毎日。何かどこかおかしいですね。(女性、50代)

・物資をもっと公平に配布できないか？ 自宅で生活できる人まで避難所で食事をしている。(見附市、女性、60代)

・家もきちんとしているのに、物資を目当てに避難所通いをしている人がいると聞きますが、困っている方にあげるべきだと思いました。(長岡市、女性、70代)

・老人になると都市の方が便利で良いと思う。農村は人間関係が薄くなった。(栄町、女性、70代)

〈行政・支援の問題〉

・市の中心部より12kmくらいの山間地にあるので、支援物資などは、10日くらいしてペットボトルの水2ケース、軍手1双が届いただけです。強制的に学校のグラウンドに避難するように指示されても、1周200mのグラウンドでは身動き出来ないくらいの場所に駐車させられ、その中で余震に怯えていたことは、思い出すのさえ嫌です。私自身、10月28日にエコノミー症候群の一步手前

で足首が腫れ正座出来なくなり、当時は精神的に苦しみました。(十日町市、女性、60代)

・地震の被害状況を調べるにあたり、市役所の職員だけでなく、もっと知識がある専門家と共に調査してほしいと思った。(質問すると、自分は専門家ではない、税務課のものである等々…答えてもらえなかったが、評価は出された)。障害者に対する対応がされなかったのでは(初期段階ですが)? 市が動くべきではないかと思いました。(小千谷市、女性、60代)

・地震によって被害を受けた田畑のポンプ、側溝がいつ元通りになるのか。田畑のしつけは無事に行えるのか。応急処置の道路(下は川で、またいつ崩れて通れなくなるやら不安がつる)をきちんと直して欲しいがどうなのか。(川口町、女性、50代)

・地震のための支援は特に何も(物資、特別の情報)なかった。テレビと新聞だけが情報源だった。賞味期限切れのパン等を捨てたということが聞こえたが、被害の少ない所でも恐ろしくて、火を使うのが不安で、作り置きのものや簡単な食事しか出来なかったのも、何とかして皆にやることはできなかったのかと思った。(十日町、女性、70代)

・ライフライン、インフラが整いはじめ、なんとか自立生活ができるようになってから支援品がどんどん支給され始め、ほっと安心しましたが、そういうものへの甘え心が出始め、被災生活への踏ん切り、決断が少し遅れたと思う。最初の2日ほどを自力でしのげれば、この度はなんとかなった。初期の支援が肝要。その後は適度の支援で十分なのに、どうしても余り過ぎる。(小千谷市、女性、50代)

・行政からの支援物資、自衛隊員の炊き出し、自治会役員、多数の協力で乗り越えられ、感謝しておりますが、避難所での生活でなかったため、乳

児のミルク、オムツ、水は待つ事ができないわけです。そういった家庭に戸別の対応情報が届かず、地震直後は大変でした。(小千谷市、女性、50代)

〈支援制度の問題〉

・国の支援はもっと条件を緩くして被災者に支援してほしい。例えば、収入の上限があり、家が全壊しても援助してもらえないなど、とても困っている家庭がある。(長岡市、女性、70代)

・破損した家屋等を補修する費用が、国や県から支給されると言う事は大変ありがたいことであるが、その期間が2月末までというのは実情に合わないことです。大工さんや左官屋さんは夜も休まず仕事をして、期日までに仕上げることが難しいというのも当然のことである。県の方は、3月末に期限を延ばしてくれたとのことであるが、国の方は延ばしてくれず、工事する人は大変である。特に雪の多い地方は無理である。もっと余裕を持って工事できる制度にしてほしい。(長岡市、女性、70代)

・表題に、今後に活かす、今後に残すとありましたが、現在にも是非活かしてほしい。声を集約してお役所に要求してください。85%の「一部損壊」に対する血の通った目配りを要求してください。知人の老人家庭は全壊。今は借上げ住宅に入っている。銀行は、この先働いて返せませんかと言ひ、貸さない。2年後どうなるのかと心配している。半壊、全壊家屋の修理を2月中に終えなければ、支援金が出ないとのこと。職人が払底して仕事をやってもらえない。3月まで期間が延長されたという噂もあるが、非常に不安がっている人は多い。(長岡市、女性、70代)

・小千谷市に義姉(一人暮らし)が住んでおり、2日間手伝いに行ってきました。黄色の紙が貼られ、不自由な体で半月ほど避難所生活をして、何とか生活をしていました。家を修理するのに、かなりのお金がかかるようですが、5万円の補償金しか出ないとのこと。全壊した人たちはもっと大変で

すが、この差は何とかならないものかと思いました。絨毯はガラスの破片で使用できず、瀬戸物類は壊れ、風呂場も修理しないと入れない状態でした。ボランティアの人たちが来るのは、入居するまでに間に合わず、親戚で行き、何とか住めるように片付けるのを手伝った次第です。弱者を助けて欲しいです。(六日町、女性、60代)

・国や県の支援金を受けたくて、家が壊れていても仮設に入らず不自由な生活をされておられる方がたくさんおられます。仮設に入っても入らなくても同じように支援金が受けられないものでしょうか。全壊300万、大規模半壊200万(半壊25万にも納得できません。なぜ100万にならないのでしょうか)。現在、市には支援物資がまだたくさん残っているようですが、なぜ支給してくださらないのでしょうか。(長岡市、女性、50代)

〈今後の不安・体調の悪化〉

・日を迫うごとに精神的に不安、体の不調を感じています。話し相手がいる時は気持ちが紛れるのですが。地区の皆さんとの集まり等を多く持つようにし、そのようなことを先頭に立ってやってくれる人ややる必要があると思います。うちの地区ではそのようなことはありません。(川口町、女性、50代)

・年金生活で、壁の修理と風呂で500万と言われたが、これからどうしてよいか分からない。心配だ。築80年の土壁は落ち、風呂のタイルはめっちゃめっちゃ、1寸程傾いているが土台と瓦が動かないということで一部損壊という。戸と柱の空き間は3~5cm。この冬、風が冷たく、身も心も凍りそうです。(小千谷市、女性、60代)

・地震後の精神的なケアが大切かと思ひます。子どもはもちろんですが、高齢の方々のケアも重要であると思ひます。被災者の方々と話をする、ほとんどの方がまだまだショックが残っております。前向きに生きて行こうという気や心が晴れるということがなく、少しの音や揺れに非常に敏感

になっております。これがなくなるには時間が必要かと思ひますが、何らかの手だてがあれば少しは救われるのではないかと思ひます。現在被災地に大雪が重なり、今後自殺者や孤独死が増加する可能性大だと考えられます。(小千谷市、女性、60代)

・地震があつてから毎日怖くて一人で家に居られない。何も手につかない。作ることも考えることも何もかも嫌だ。(小千谷市、女性、60代)

・アンケートを書きながら、悪夢のような日々、そして不安を感じ、暗い気持ちになりました。周りの人たちには、「大丈夫?頑張りましょう」と言いながら、地震を体験し、自分の弱さを知りました。家が倒壊し、1人でアパート暮らしの友人、入院中の叔母、家もなく、これからの生活に不安を抱えている人々のことを考えると、心が痛みます。まだこれからが大変なのです。(見附市、女性、60代)

・まだ以前のようなやる気が起きない。風呂でシャワーしている時に、地震が今来たらどうしようかと思う。半壊だったため、家の事を考えると眠れないこともある。雪も多く、もう4回雪降ろしをした。避難する時は大きいところがいいかも

と思ひている。自分の足で情報を集めることも重要。心のケア。誰かに話を聞いてもらうことは大切です。私自身赤十字の先生に聞いていただき、その時初めて涙が出て気持ちが少し楽になりました。(小千谷市、女性、50代)

・震災後100日をすぎた今、半壊の家の雪下ろしに苦労しています。今冬は元日の第1回目からほぼ1週ごとに、これで4回の屋根の雪下ろしでした。この数年は多い時でも2回くらいで済んでいたもので、地震の後で「踏んだり蹴ったり」という思いです。特に人手が足りず、いつも頼む建築関係の多忙さから、自分の手で重労働を否応なくしており、ほとほと疲れているのが現状です。自宅を出て生活している人の心配も、他人事でなく、本当に気の毒でなりません。公の援助で住まいを直す必要を感じています。大切な国民の生活を国がしっかり助けて欲しい。政治の力を今こそ見せてください。(小千谷市、女性、50代)

・現在感じていること。余震の中、現在まで不安(おびえ)が大きく、少しの物音で体が揺れるような感覚も度々でした。こんな時は1人でなく、グループや近所の方とお茶飲みしながら、共通理解が必要と思うのですが。(六日町、女性、70代)

第6章 結論と課題

本章では、ここまで紹介してきた内容をふり返って、いくつかのポイントから整理し、課題を指摘する。そして最後に、アンケート調査の結果からいえることを簡単な「提言」の形でまとめておきたい。

6-1 ニーズの変化に対応した支援の必要性

被災者ニーズの時系列的な変化

今回のアンケートでは、地震後の時間の経過に従って、困ったこと・役に立った支援・もっと必要（あるいは不必要）だった支援について、詳細に記入してもらった。そこから浮かび上がってくるのは、被災者のニーズが刻々と変化し、したがって支援もそれに対応して変わっていかざるをえない、ということである。

地震直後の段階では、被害の状況や取るべき行動に関する情報がもっとも必要とされ、同時に生命や体調の維持にかかわるような基礎的ニーズ（食料と飲料水、気温への対応）を満たすことが求められた。加えてショックを受けている被災者にとっては、誰かと一緒にいる、声をかけあうといった家族や地域の人間関係が支えとなる。避難指示等の情報伝達や避難所の準備などは行政の役割になるだろうが、それ以外の部分では、個人や家族・地域（コミュニティ）による備えも必要とされる。

1週間目までの段階では、食料・飲料水に加えて、避難所や仮設トイレ・仮設風呂、生活用水などの支援が必要とされた。こうした分野では、行政や自衛隊などが主要な役割を果たした。この時期には多くの支援物資が寄せられたが、たとえば野菜や果物などの新鮮な食料は不足しがちだった。ビタミン類の不足は、被災生活が長びくと健康面に深刻な問題をもたらすので注意が必要である。モノの支援（援助物資）は、どうしてもタイムラグが生じてむずかしい。基礎的な物資の備蓄とその都度のニーズに合わせた購入により対応するのがよいだろう。

その次の段階（1ヶ月目まで）には、とりわけ被害を受けた住宅をどうするかという問題が切実になってくる。後片づけや補修、引っ越しなどの人手が必要になるので、ボランティアに対するニーズも大きい。またこの時期になると、疲労が蓄積し、精神的に不調を訴える被災者も増えてくる。症状が顕在化する前に、先回りして医療関係者等が対応していく必要がある。

この時期には商店もほぼ通常通り営業を再開し、被災地に必要な物資は出回るようになる。この段階で全国から届いた援助物資は、引き取り手がなくて避難所や役所の倉庫に積み上げられていたというし、援助物資の仕分け等にかかなりのボランティアの労力を要したとも聞く。被災者のニーズと援助物資との間にどうしてもタイムラグが生じることを考えると、被災直後の段階を除いては、物資を送るよりもその分義援金を送った方が、被災地にとっては望ましいと思う。

「情報」の決定的な重要性

前述したように、地震当日の夜にもっと欲しかった支援で飛び抜けた多かったものは「情報」であり、その夜に役立ったもの・助かったもののトップも同じく情報だった。さまざまなメディアを通じて被災者のもとに届けられた情報は、彼らを支え、励ます役割を果たすとともに、情報の不足は被災者を不安な、途方に暮れた状態に置いた。被災直後の段階で、どうすれば最低限必要な情報を被災者に届けることができるか。そのための条件整備が行政には求められるだろう。

そして情報に対するニーズも、時間の経過とともに移り変わる。地震当夜は、被害の状況と避難の指示についての情報がもっとも必要とされた。1週間目までは、被害や余震、交通についての情報が必要とされ、炊き出しや入浴、救援物資などの生活情報が続いている。それ以降1ヶ月目までの時期では、生活情報や復旧のための支援・ボランティアの情報などが求められている。

今回の震災では、さまざまなメディアがそれぞれの特性を活かして被災者に情報を届けたが、2章でみたように身近な生活情報を中心に不十分な点もみられた。とりわけ、もっときちんとした「広報」という要求が、行政に向けて出されている。また、マスメディアの報道姿勢を問う意見も多数寄せられた。

被災者のニーズは時系列的に変化し、また時間の経過とともに被害や地域の状況によるばらつきも大きくなる。こうした一様でない条件のもとにおかれた被災者に、どのようにして的確に支援をおこなうかが問われる。その際にも「情報」は決定的な重要性をもつ。今回もそれぞれの段階で、被災者のニーズと行政やボランティアによる物的・人的な支援とのミスマッチやタイムラグがみられた。両者を結んで、情報の双方向的なやりとりをおこなう必要がある。現場の要求と「善意」とを取り結ぶ情報とコミュニケーションの回路が求められているのであり、この仕組みをどう作るかが課題となる。

われわれは日ごろ、過剰なほどの情報のもとで暮らしている。そうした情報化社会としての現代を生きる者にとって、情報の不足は（おそらくかつてよりも）心身にこたえる出来事なのである。さまざまな水準で情報のニーズを満たしていくことが、被災生活を支える重要なポイントとなる。

6-2 コミュニティの意義

コミュニティが果たした役割

行政は住民の安全に関して責任を負っているが、地震などの突発的で広範囲にわたる災害に際しては、どうしてもその対応に限界が生じる。そこで、個人的な備えとともに、地域の人間関係（コミュニティ）の役割が重要になってくる。

今回の調査でも、コミュニティは地震後のそれぞれの段階で重要な機能を果たしていたことが分かる。地震直後には、近隣で食料や水を融通しあい、また精神的に支えあった。引き続き被災生活においては、炊き出しや救援物資の配布など身近な生活情報が近隣の口コミによって伝えられ、また物の貸し借りや家の後片づけなどで助け合いがみられた。

見逃せないのは、高齢者や障害者など災害でよりダメージを受けやすい人びとに対する支援が、コミュニティの人間関係のなかで取り組まれていたことである。とくに地震直後の混乱した状態のなかでは、事情をよく知る関係があつてはじめて適切な救出や支援が可能となるはずである。実際に、消防や警察などが救出にあたるのを待つことなく、地域の人びとが高齢者や障害者を被災家屋から助け出していたのである。さらに、外部からボランティアを受け入れる際にも、地域のなかでボランティアが機能するためにも、近隣関係が果たす役割は重要である。

コミュニティは、個人と行政等を媒介して、被災者のニーズとさまざまな支援を取り結ぶ役割を果たした。地域でコミュニティがうまく機能している場合は、コミュニティのリーダーやその支え役の人びとの努力もあつて、支援物資を必要な人のもとに届け、また生活情報やボランティアに関する情報などを的確に伝達することができた。逆にコミュニティが十分に機能していないと、個々の被災者のニーズも支援にかかわる情報もうまく把握できずに、被災者の間に不満や不公平感が蓄積していくことになった。

この意味でコミュニティは、うまく機能すれば情報の結節点となつて、ニーズと支援のタイムラグやミスマッチを埋めるはたらきをする。被災直後の段階でコミュニティが果たした役割とともに、その後に引き続き被災生活においてもコミュニティに期待される役割は大きい。

コミュニティの課題

阪神大震災の際の都市化された神戸のコミュニティと比較すれば、全体として中越のコミュニティは有効に機能していたといえる。危機的な状況においても人びとが整然と秩序だつて行動できたのは、コミュニティによる結びつきが支えになっていたことが、今回の調査からもうかがえた。また調査からは、不幸にして災害に見舞われた時にコミュニティがその力を発揮するためには、たとえば自治会・町内会などの日ごろの活動の蓄積が重要であることも分かった。

とはいえ同時に、コミュニティはいくつかの点で課題を抱えてもいる。ひとつは、コミュニティの団結や統制が優先されると「個人」として意見をいったり不満をいったりしにくくなるのではないか、ということである。被災直後からのマスコミの報道や政治家の発

言のなかで、常に支援に感謝し、けつして怒らず、がまん強い被災者の姿がくり返し取りあげられ、「がまん強い県民性」などと評価された。そうした健気さにうたれて「何とか助けて」と支援が寄せられ、政治が動くのはよいことだろう。だがその一方で、被災者の側もそうした枠組み（被災者像）に自分を合わせてしまい、無理をする危険性もあると思う。

今回の調査結果には、行政やマスコミの対応、支援制度などについて、不満や怒りの声が数多く現れていた。いいたいことをたくさん抱えて、それをいわずにがまんしてしまうことは、けつしてよいことではない。本音を語り、文句をいい、要求すべきはきちんと要求する場や関係が必要だろう。「コミュニティの強い絆」が、どこかでそうした本音を押しえてしまっているのではと気になる。

さらに調査からは、ショックから抜けきれずに精神的に落ちこむ、何も手につかない、疲れたという声も多数聞かれた。この場合、弱音を吐ける関係、「見栄」を張らずに弱さをさらけ出せるような関係が身のまわりにあるかどうかが重要になるだろう。被災生活においては、家族や近隣、各種のグループや団体など、さまざまなことがいえるような重層的で多様な関係が人びとを支えるのではないか。こうした関係の蓄積こそがコミュニティの実体なのであり、関係の網の目が幾重にも張りめぐらされていることが、結果的に「災害に強い」地域社会・コミュニティを可能にする基盤となるだろう。

もうひとつの課題は、コミュニティの〈担い手〉の問題である。調査からは、多くのコミュニティ・リーダーたちの活躍をうかがい知ることができる。しかしその多くは、男性であるようだ。今回の調査対象者の多くを占める地域に根づいた女性たちが、もっと中心的な役割を担ってもいいのではないかと感じた。地域の主役としての女性たちに、その蓄積を活かしてリーダーシップをとれるような場が、もっとあたえられるべきだろう。また避難所で「携帯電話をいじっているだけ」の中高生の姿も報告されていた。必ずしも地域に根づいているとはいえない彼らを含む若者を、地域の担い手として位置づけていくことも課題といえる。

都市化が進み、インターネットの時代になって、地縁的な関係はともすれば古くさいもの、煩わしいものとみなされがちである。現在では、気の合う人と自由気ままにつきあうことが好まれている。しかし今回の経験をふまえると、災害時においてコミュニティが果たす役割は大きい。そう考えると、地縁的なつながりをたんに古くさいものとして切り捨てるべきではないし、かといって旧来のコミュニティをそのまま維持したり強化することにも無理がある。時代に合わせて柔軟に作り替えながら、地域のつながりとしてコミュニティを活かしていくことが必要だろう。

コミュニティのみに過度に期待することには問題があるが、災害を〈生きのびるためのリソース〉のひとつであることは間違いない。つきあいが義務的になると不自由だが、いざという時に助け合える関係は維持しておきたい。この場合、行政による一方的な上意下達の組織としてではなく、生活者自身にとって意味のある関係を考えることが重要である。地域で生活する人びとにとって、コミュニティのよさを活かす、〈いいとこ取り〉はどうかすれば可能か。これも経験をふまえて考察されるべき課題である。

6-3 「生活アンケート」からの提言

本章では、アンケート調査の結果を、①被災者ニーズの時系列的变化、②ニーズと支援をつなぐ情報とコミュニティの重要性、という視点からまとめてきた。まとめから抜け落ちている詳細については、本報告書の全体と、とりわけ自由回答に寄せられた被災者の生の声を読んでいただきたい。

ここでは最後に、調査の全体から読みとれることを「提言」のかたちで簡潔に述べておくことにしよう。

(個人の備え)

1. 物の備え～懐中電灯、水、食料品、ラジオ、家具の転倒防止
2. 情報の備え～家族の連絡体制、停電時にも使える情報機器
3. 物よりも関係～物に囲まれたライフスタイルを見直す

(関係の蓄積)

4. 地域の備え～日ごろのコミュニケーション、避難と連絡の体制
5. 多様な「つきあい」～助け合い、本音が言え、弱音を吐ける関係

(行政への要望)

6. 避難所の準備と連絡体制～車への避難は1,2日が限度
7. 情報の双方向的な流れ～ニーズと支援を適切にかみ合わせるシステム
8. 住宅と仕事の支援～「生活の見通し」が可能になるような施策

(外からの支援)

9. 被災地に、やたらに物を送らない～被災直後以外は義援金でサポート
10. ボランティアは被災者を支える～ニーズを把握し被災者の自立も考える

資料：調査票および単純集計結果

資料：調査票および単純集計結果

(凡例)

1. 以下は、調査票に単純集計結果（選択肢を用意した設問のみ）を加えたものである。
2. 調査票は、紙幅の関係で実際に用いたものよりもややポイントを落とし、自由回答欄は省略してある（自由回答方式の設問には*をつけておいた）。
3. 単純集計のパーセンテージは、無回答を除いて集計してある。

2005年1月

中越地震後の生活についてのアンケート

新潟県消費者協会
新潟大学人文学部社会学研究室

この度の新潟県中越地震で被害にあわれた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
今回は皆様に、地震被災者としての体験を、生活者の立場から記していただくアンケートをお願いすることになりました。災害救援に必要な物資や支援、情報などを、後で役立つ記録として残すことが目的です。まだ大変なこと、ご不自由なことがおありの中でこのようなお願いをすることは恐縮なのですが、今後予想される各種災害に備えるためにも、ぜひ皆様の貴重なご体験をお聞かせいただければと考えております。なにとぞ趣旨をおくみとりのうえ、ご協力いただければ幸いです。

*****記入上のお願い*****

1. ご自身が体験して感じたこと、考えたことなどを難しく考えず気軽にご記入ください。はっきり憶えていらないことについては、おおよその記述で結構です。
2. 選択肢のあるものは、あてはまる番号に直接○をつけてください。なお、質問により数字を記入していただく場合もあります。
3. 回答は統計的に処理しますので、ご迷惑がかかるようなことはありません。また、個人情報については厳重に管理します。
4. 恐れ入りますが、回答は2月10日ごろまでに同封の返信用封筒でご返送ください。
5. ご不明の点は、以下の連絡先までお問い合わせください。

連絡先 新潟県消費者協会
〒950-0994 新潟市上所 2-2-2 新潟ユニゾンプラザ 1階
電話 025-281-5558

【まず、全般的なことについておうかがいします】

問 1 今回の地震によって、あなたのお住まいになっていた家屋にどのような被害がありましたか。1つ選んで○をつけてください。

1. とくに損傷はなかった	18 (8.8 %)
2. 軽い損傷なので住むには支障なかった	112 (54.9 %)
3. なんとか住めるが、かなりの補修を必要とする損傷があった	64 (31.4 %)
4. 全壊あるいはそれに近い状態で、建て直さなければ住むことができない	10 (4.9 %)

問 2 現在はどこにお住まいですか。1つ選んで○をつけてください。

1. 地震前から住んでいた自宅（アパート・借家等も含む）	197 (96.1 %)
2. 両親、子ども、親戚の家	1 (0.5 %)
3. 仮設住宅	2 (1.0 %)
4. 地震後に借りた賃貸住宅（アパート・借家等）	2 (1.0 %)
5. その他	3 (1.5 %)

問 3 【問 2 で 1 を選んだ方におうかがいします】地震後、電気、ガス、水道が利用できるようになったのはいつごろでしたか。それぞれあてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。

〈電気〉			
1. 最初から問題なし	35 (17.6 %)	4. 4～7日後	65 (32.7 %)
2. 当日中	18 (9.0 %)	5. それ以降*	16 (8.0 %)
3. 2～3日後	64 (32.2 %)	6. 分からない	1 (0.5 %)

〈ガス〉			
1. 最初から問題なし	46 (23.4 %)	4. 4～7日後	41 (20.8 %)
2. 当日中	11 (5.6 %)	5. それ以降*	71 (36.0 %)
3. 2～3日後	26 (13.2 %)	6. 分からない	2 (1.0 %)

〈水道〉			
1. 最初から問題なし	66 (33.5 %)	4. 4～7日後	51 (25.9 %)
2. 当日中	10 (5.1 %)	5. それ以降*	49 (24.9 %)
3. 2～3日後	21 (10.7 %)	6. 分からない	0 (0 %)

【地震当日（10月23日）のことについて、おうかがいします】

問 4 この日の夕食は、どうなさいましたか。以下から1つ選んで○をつけたうえで、その番号にある質問にもお答えください。

1. 地震発生前にすませていた	26 (12.6 %)
2. 発生後に食べた（いつ* /どこで* /何を*）	98 (47.3 %)
3. 食べることができなかった（その理由*）	81 (39.1 %)
4. その他（どうなさいましたか*）	2 (1.0 %)

問 5 当日の夜は、どこで過ごしましたか。以下から1つ選んで○をつけたうえで、その番号にある質問にもお答えください。

1. 自宅の居間・寝室など	42 (20.0 %)
2. 自宅のそれ以外の場所（車庫・物置など）	14 (6.7 %)
3. 自家用車	84 (40.0 %)
4. 自家用車以外の車（どなたの車ですか*）	7 (3.3 %)
5. 庭や近所の空き地など家の外	11 (5.2 %)
6. 学校や公共施設などに避難した（どこに*）	37 (17.6 %)
7. その他（どうなさいましたか*）	15 (7.1 %)

問 6 その場所で横になって休むことはできましたか。どちらかに○をつけてください。

1. はい	106 (51.0 %)	2. いいえ	102 (49.0 %)
-------	--------------	--------	--------------

問 7 当日の夜に自宅からどのようなものを持ち出しましたか。持ち出さなかった場合は、「なし」とご記入ください。*

問 8 当日の夜に困ったことはどのようなことでしたか。困った順に2つまで記入してください。 1番目* / 2番目*

問 9 当日の夜に欲しかった支援（もの、手助け、情報など）にはどのようなものがありましたか。欲しかった順に2つまで記入してください。 1番目* / 2番目*

問 10 当日の夜に役に立ったもの、助かったことなどがあれば記入してください。*

【地震の翌日（10月24日）から1週間目（10月30日）あたりまでのことについて、おうかがいします】

問 11 この時期は、どこで寝泊まりしていましたか。下の欄に数字を記入してください。この期間内で移動があった場合は、順番に記入してください。

□ → □ → □

- | | |
|------------------------|---------------|
| 1. 自宅の居間や寝室 | 5. 避難所 |
| 2. 自宅のそれ以外の場所(車庫・物置など) | 6. 両親・子ども・親戚宅 |
| 3. 自家用車 | 7. 友人・知人宅 |
| 4. 自家用車以外の車 | 8. その他 |

空欄 1 : 1. 自宅居室 73(34.6%) 2. 自宅それ以外 15(7.1%) 3. 自家用車 72(34.1%) 4. 自家以外車 4(1.9%)
5. 避難所 37(17.5%) 6. 両親等の家 5(2.4%) 7. 友人宅 1(0.5%) 8. その他 4(1.9%)

空欄 2 : 1. 自宅居室 40(19.0%) 2. 自宅それ以外 14(6.6%) 3. 自家用車 13(6.2%) 4. 自家以外車 0(0%)
5. 避難所 13(6.2%) 6. 両親等の家 18(8.5%) 7. 友人宅 2(0.9%) 8. その他 9(4.3%) 非該当 102(48.3%)

空欄 3 : 1. 自宅居室 12(5.7%) 2. 自宅それ以外 0(0%) 3. 自家用車 3(1.4%) 4. 自家以外車 1(0.5%)
5. 避難所 5(2.4%) 6. 両親等の家 6(2.8%) 7. 友人宅 0(0%) 8. その他 2(0.9%) 非該当 182(86.3%)

問 12 地震後、最初にお風呂に入ったのはいつでしたか。以下から 1 つ選んで○をつけてください。

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. 地震当日 11 (5.2%) | 4. 4 日目 38 (18.0%) |
| 2. 2 日目 29 (13.7%) | 5. 5 日目以降 95 (45.0%) |
| 3. 3 日目 38 (18.0%) | |

問 13 地震後、最初にお風呂に入った場所はどこでしたか。以下から 1 つ選んで○をつけてください。

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. 自宅 87(41.2%) | 4. 自衛隊が設置した仮設風呂 22(10.4%) |
| 2. 両親・子ども・親戚宅 39(18.5%) | 5. 銭湯・温泉・ホテル等 48(22.7%) |
| 3. 知人・友人宅 9(4.3%) | 6. その他 6(2.8%) |

問 14 この時期の食事は、どのようになさっていましたか。主なものに 3 つまで○をつけたうえで、その右側の欄にどんなものが多かったか例をあげてください。

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. 自分の家で作った* 141 (67.5%) | 4. 避難所の炊き出し* 42 (20.1%) |
| 2. 自分・家族が買った* 93 (44.5%) | 5. 近所での炊き出し* 31 (14.8%) |
| 3. 配布された支援物資* 92 (44.0%) | 6. その他* 29 (13.9%) |

問 15 この時期に困ったことはどのようなことでしたか。困った順に 2 つまで記入してください。 1 番目* / 2 番目*

問 16 この時期に役に立った(助かった)支援にはどのようなものがありましたか。それぞれの項目について、主として役に立ったものをご記入ください。

物資の支援(どんな)* / 手助け(誰の、どのような)* / 情報(どんな)* / その他*

問 17 この時期にもっと欲しかった(必要だった)支援にはどのようなものがありましたか。それぞれの項目について、欲しかった(必要だった)順に記入してください。

物資の支援(どんな)* / 手助け(誰の、どのような)* / 情報(どんな)* / その他*

問 18 逆に、この時期に不必要だった支援(もの・手助け・情報など)にはどのようなものがありましたか。記入してください。*

【地震から 8 日目(10 月 31 日)以降、1 ヶ月目(11 月 23 日)あたりまでのことについて、おうかがいします】

問 19 この時期は、どこで寝泊まりしていましたか。あてはまる項目を、下の欄から選んでその番号を記入してください。この期間内で移動があった場合は、移動した順番に記入してください。

□ → □ → □

- | | |
|------------------------|---------------|
| 1. 自宅の居間や寝室 | 5. 避難所 |
| 2. 自宅のそれ以外の場所(車庫・物置など) | 6. 両親・子ども・親戚宅 |
| 3. 自家用車 | 7. 友人・知人宅 |
| 4. 自家用車以外の車 | 8. その他 |

空欄 1 : 1. 自宅居室 133(64.6%) 2. 自宅それ以外 16(7.8%) 3. 自家用車 16(7.8%) 4. 自家以外車 0(0%)
5. 避難所 18(8.7%) 6. 両親等の家 14(6.8%) 7. 友人宅 2(1.0%) 8. その他 7(3.4%)

空欄 2 : 1. 自宅居室 43(20.9%) 2. 自宅それ以外 8(3.9%) 3. 自家用車 1(0.5%) 4. 自家以外車 0(0%)
5. 避難所 3(1.5%) 6. 両親等の家 8(3.9%) 7. 友人宅 1(0.5%) 8. その他 4(1.9%) 非該当 138(67.0%)

空欄 3 : 1. 自宅居室 9(4.4%) 2. 自宅それ以外 1(0.5%) 3. 自家用車 0(0%) 4. 自家以外車 0(0%)
5. 避難所 0(0%) 6. 両親等の家 2(1.0%) 7. 友人宅 1(0.5%) 8. その他 0(0%) 非該当 193(93.7%)

問 20 この時期に困ったことはどのようなことでしたか。困った順に 2 つまで記入してください。 1 番目* / 2 番目*

問 21 この時期に役に立った(助かった)支援にはどのようなものがありましたか。それぞれの項目について、主として役に立ったものをご記入ください。

物資の支援(どんな)* / 手助け(誰の、どのような)* / 情報(どんな)* / その他*

問 22 この時期にもっと欲しかった(必要だった)支援にはどのようなものがありましたか。それぞれの項目について、欲しかった(必要だった)順に記入してください。

物資の支援(どんな)* /手助け(誰の、どのような)* /情報(どんな)* /その他*

問 23 逆に、この時期に不必要だった支援(もの・手助け・情報など)にはどのようなものがありましたか。記入してください。*

【現在(2005年1月)の時点で、感じておられることやご意見についておうかがいします】

問 24 地震などの災害に対して、ふだんからの備えがありましたか。どちらかに○をつけてください。

1. はい 52 (25.4%) 2. いいえ 153 (74.6%)

問 25 【問 24 で 1 を選んだ方におうかがいします】その備えは役に立ちましたか。役に立ったもの(こと)、役に立たなかったもの(こと)をそれぞれ記入してください。役に立たなかったものについては、かつこの中にその理由もお願いします。

役に立ったもの(こと)* /役に立たなかったもの(こと)* / (その理由)*

問 26 地震の経験をふまえて、今後備えておこうと思ったもの(こと)は何ですか。重要と思う順に3つまで記入してください。 1番目* /2番目* /3番目*

問 27 地震後の生活で、あなたの手助けをしてくれた人はどなたでしたか。あてはまる項目を、下の欄からもっとも助けてもらった順に3つまで選んでその番号を書き、それぞれの手助けの内容も記入してください。*

1 番目: 1. 家族 124 (70.5%) 2. 親戚 24 (13.6%) 3. 隣近所 14 (8.0%) 4. 友人・知人 4 (2.3%)
5. 仕事関係 3 (1.7%) 6. 役所の人 1 (0.6%) 7. 消防ほか 1 (0.6%) 8. ボランティア 2 (1.1%)
2 番目: 1. 家族 12 (6.8%) 2. 親戚 55 (31.3%) 3. 隣近所 40 (22.7%) 4. 友人・知人 18 (10.2%)
5. 仕事関係 3 (1.4%) 6. 役所の人 1 (0.6%) 7. 消防ほか 3 (1.7%) 8. ボランティア 7 (4.0%)
3 番目: 1. 家族 1 (0.6%) 2. 親戚 18 (10.2%) 3. 隣近所 31 (17.6%) 4. 友人・知人 31 (17.6%)
5. 仕事関係 3 (1.7%) 6. 役所の人 6 (3.4%) 7. 消防ほか 9 (5.1%) 8. ボランティア 11 (6.3%)

1. 家族 6. 役所の人
2. 親戚 7. 消防・警察・自衛隊の人
3. 隣近所の人 8. ボランティアの人
4. 友人・知人(隣近所の人以外) 9. その他
5. 仕事や商売上のつながり

問 28 地震後の生活で、あなたの精神的な支えになったのはどなたでしたか。あてはまる項目を、下の欄からもっとも支えてもらったと思う人から順に3つまで選んでその番号を書いてください。

1 番目: 1. 家族 177 (89.8%) 2. 親戚 6 (3.0%) 3. 隣近所 7 (3.6%) 4. 友人・知人 4 (2.0%)
5. 仕事関係 1 (0.5%) 6. 役所の人 0 (0%) 7. 消防ほか 1 (0.5%) 8. ボランティア 0 (0%)
2 番目: 1. 家族 7 (3.6%) 2. 親戚 103 (52.3%) 3. 隣近所 44 (22.3%) 4. 友人・知人 24 (12.2%)
5. 仕事関係 1 (0.5%) 6. 役所の人 4 (2.0%) 7. 消防ほか 3 (1.5%) 8. ボランティア 0 (0%)
3 番目: 1. 家族 3 (1.5%) 2. 親戚 25 (12.7%) 3. 隣近所 59 (29.9%) 4. 友人・知人 66 (33.5%)
5. 仕事関係 8 (4.1%) 6. 役所の人 3 (1.5%) 7. 消防ほか 6 (3.0%) 8. ボランティア 3 (1.5%)

1. 家族 6. 役所の人
2. 親戚 7. 消防・警察・自衛隊の人
3. 隣近所の人 8. ボランティアの人
4. 友人・知人(隣近所の人以外) 9. その他
5. 仕事や商売上のつながり

問 29 地震後、あなたがお住まいの地域では、隣近所どうしの助け合いは活発でしたか。1つ選んで○をつけてください。

1. 助け合いはほとんどなかった 31 (16.1%) 3. まあまあ活発だった 77 (40.1%)
2. あまり活発ではなかった 43 (22.4%) 4. 非常に活発だった 41 (21.4%)

問 30 隣近所どうしの助け合いは、具体的にはどんな様子でしたか。とくに印象に残ったことをご記入ください。*

問 31 あなたはボランティアの人に何か手伝ってもらいましたか。どちらかに○をつけてください。

1. はい 39 (19.4%) 2. いいえ 162 (80.6%)

問 32 【問 31 で 1 を選んだ方におうかがいします】ボランティアの人にどのようなことを手伝ってもらいましたか。*

問 33 【問 31 で 1 を選んだ方におうかがいします】ボランティアの人に手伝ってもらった感想をお聞かせください。*

問 34 地震後、あなた自身はボランティア活動をなさいましたか。どちらかに○をつけてください。

1. はい 72 (35.0%) 2. いいえ 134 (65.0%)

問 35 【問 34 で 1 を選んだ方におうかがいします】それはどのような活動でしたか。*

問 36 行政の対応や支援について、ご意見やご感想がありましたら記入してください*

問 37 マスコミの報道や対応について、ご意見やご感想がありましたら記入して下さい*

問 38 地震以前、あなたがお住まいの地域では自治会や町内会の活動は活発でしたか。
1つ選んで○をつけてください。

1. ほとんど何もしていなかった 48 (23.9%) 3. まあまあ活発な方だったと思う 78 (38.8%)
2. どちらかといえば活発でなかった 53 (26.4%) 4. とても活発だった 22 (10.9%)

問 39 地震後、あらためて自治会や町内会の活動は必要だと思いませんか。1つ選んで○をつけてください。

1. 絶対に必要だと思った 117 (58.8%) 3. あまり必要だと思わなかった 8 (4.0%)
2. あった方がいいと思った 74 (37.2%) 4. ない方がいいと思った 0 (0.0%)

問 40 以下にあげる情報について実際に役に立つ内容を伝えてくれる情報源(あてにしていた情報源)はどれでしょうか。(ア)~(ケ)のそれぞれについて、あてになった情報源をすべて、下の欄から選んで番号を記入してください。

(ア) 地震被害の様子 1. 行政 23 (12.4%) 2. 自治会 4 (2.2%) 3. 口コミ 16 (8.6%)
4. 電話 14 (7.5%) 5. 新聞 94 (50.5%) 6. テレビ 134 (72.0%) 7. ラジオ 104 (55.9%)
(イ) 家族・親戚・知人の安否 1. 行政 0 (0%) 2. 自治会 1 (0.5%) 3. 口コミ 5 (2.7%)
4. 電話 145 (78.4%) 5. 新聞 2 (1.1%) 6. テレビ 9 (4.9%) 7. ラジオ 1 (0.5%)
(ウ) 炊き出しに関する情報 1. 行政 24 (13.0%) 2. 自治会 38 (20.5%) 3. 口コミ 55 (29.7%)
4. 電話 1 (0.5%) 5. 新聞 5 (2.7%) 6. テレビ 13 (7.0%) 7. ラジオ 7 (3.8%)
(エ) 救援物資の配布に関する情報 1. 行政 38 (20.5%) 2. 自治会 43 (23.2%) 3. 口コミ 40 (21.6%)
4. 電話 3 (1.6%) 5. 新聞 7 (3.8%) 6. テレビ 19 (10.3%) 7. ラジオ 7 (3.8%)
(オ) 電気・ガス・水道の復旧状況 1. 行政 67 (36.2%) 2. 自治会 24 (13.0%) 3. 口コミ 29 (15.7%)
4. 電話 6 (3.2%) 5. 新聞 24 (13.0%) 6. テレビ 47 (25.4%) 7. ラジオ 30 (16.2%)
(カ) 交通機関の復旧状況 1. 行政 20 (10.8%) 2. 自治会 5 (2.7%) 3. 口コミ 5 (2.7%)
4. 電話 4 (2.2%) 5. 新聞 62 (33.5%) 6. テレビ 119 (64.7%) 7. ラジオ 63 (34.1%)
(キ) 開いている店・病院・銭湯などの情報 1. 行政 37 (19.9%) 2. 自治会 12 (6.5%) 3. 口コミ 45 (24.2%)
4. 電話 6 (3.2%) 5. 新聞 29 (15.6%) 6. テレビ 57 (30.6%) 7. ラジオ 42 (22.6%)
(ク) 余震に関する情報 1. 行政 6 (3.2%) 2. 自治会 2 (1.1%) 3. 口コミ 3 (1.6%)
4. 電話 1 (0.5%) 5. 新聞 45 (24.3%) 6. テレビ 145 (78.4%) 7. ラジオ 76 (41.1%)
(ケ) ゴみの処理に関する情報 1. 行政 102 (55.1%) 2. 自治会 50 (27.0%) 3. 口コミ 19 (10.3%)
4. 電話 1 (0.5%) 5. 新聞 15 (8.1%) 6. テレビ 26 (14.1%) 7. ラジオ 12 (6.5%)

1. 行政の広報 5. 新聞
2. 自治会の広報 6. テレビ
3. 隣近所の口コミ 7. ラジオ
4. 電話・携帯電話・メール 8. その他 []

【最後に、あなたご自身のことについてうかがいます。立ち入ったことをおたずねしますが、統計処理に必要なことですので、なにとぞご協力ください。】

問 41 あなたの性別に○をつけてください。

1. 男性 16 (7.7%) 2. 女性 191 (92.3%)

問 42 あなたの年齢はおいくつですか。

20-29 歳 1 (0.5%) 30-39 歳 6 (2.9%) 40-49 歳 9 (4.4%) 50-59 歳 39 (18.9%)
60-69 歳 106 (51.4%) 70-79 歳 42 (20.4%) 80-89 歳 3 (1.5%)

問 43 あなたは新潟県消費者協会の会員ですか。どちらかに○をつけてください。

1. はい 136 (68.7%) 2. いいえ 62 (31.3%)

問 44 次にあげる団体やグループのうち、あなたが現在加わっているものすべてに○をつけてください。

1. 町内会・自治会 121 (60.5%) 6. 生活協同組合や消費者団体 141 (70.5%)
2. 趣味・スポーツ・学習などのサークル 136 (68.0%) 7. 職能・同業者団体 15 (7.5%)
3. 地域の婦人会や青年団、老人クラブ 66 (33.0%) 8. 宗教団体 5 (2.5%)
4. ボランティアグループ 59 (29.5%) 9. 政党や政治団体 6 (3.0%)
5. 労働組合 6 (3.0%) 10. その他 10 (5.0%)

問 45 現在あなたが暮らしている家族形態は以下のどれにあたりますか。1つ選んで○をつけてください。

1. 三世大家族(祖父母、夫婦、孫の3つの世代が同居している家族。あるいは夫婦と結婚した子ども夫婦が同居している家族) 63 (31.5%)
2. 夫婦家族(夫婦のみ、または夫婦と未婚の子どもが同居している家族) 110 (55.0%)
3. ひとり暮らし 18 (9.0%)

4. その他 9 (4.5 %)

問 46 現在のお住まいはどちらですか。1つ選んで○をつけてください。

1. 柏崎市	6 (3.0 %)	7. 長岡市	46 (22.8 %)
2. 塩沢町	10 (5.0 %)	8. 見附市	24 (11.9 %)
3. 六日町 (南魚沼市)	14 (6.9 %)	9. 栄町	11 (5.4 %)
4. 小出町 (魚沼市)	4 (2.0 %)	10. 川口町	11 (5.4 %)
5. 十日町市	34 (16.8 %)	11. その他	2 (1.0 %)
6. 小千谷市	40 (19.8 %)		

問 47 あなたは現在お住まいの市町村に合計何年お住まいですか。1つ選んで○をつけてください。

1. 5年未満	3 (1.5 %)	4. 20年以上 30年未満	16 (8.0 %)
2. 5年以上 10年未満	7 (3.5 %)	5. 30年以上	164 (82.0 %)
3. 10年以上 20年未満	10 (5.0 %)		

問 48 あなたのご家庭の主たる生計維持者の方のご職業は何ですか。1つ選んで○をつけてください。

1. 農林漁業	11 (5.4 %)
2. 自営業 (工業・商業自営、家族経営あるいは従業員が4人以下の場合)	20 (9.8 %)
3. 事務・営業職 (事務、営業セールス、店員、公務員のうち専門・管理職以外)	23 (11.2 %)
4. 技能工・労務作業 (工場や工事現場の作業、タクシーなどの運転手、など)	12 (5.9 %)
5. 管理職 (従業員5人以上の企業経営者、課長以上、など)	18 (8.8 %)
6. 専門職 (医師、弁護士、看護師、技術者、教員など)	12 (5.9 %)
7. その他の職業*	6 (2.9 %)
8. 年金受給者	103 (50.2 %)

その他、現在感じておられること、考えておられること、体験をふまえたアドバイスやご意見などについて自由にご記入ください。*

以上アンケートは終わりです。長時間のご協力まことにありがとうございました。

新潟県中越地震 被災地の声

— 「中越地震後の生活についてのアンケート」調査報告書・手記 —

2005年7月発行

新潟県消費者協会

〒950-0994 新潟市上所2-2-2 新潟ユニゾンプラザ1階

電話/FAX 025-281-5558

E-Mail n-shokyo@happytown.ocn.ne.jp

新潟大学人文学部松井研究室

〒950-2181 新潟市五十嵐2-8050

電話/FAX 025-262-6329

E-Mail matsui@human.niigata-u.ac.jp

